

於ける該理論の發表、及びその實行と見られる「當世書生氣質」から出發してゐる。そして後の四迷の寫實主義、後期の硯友社の精神、或は柳浪・子規・一葉等を経て遂に自然主義へ展開した。

【浪漫主義】ラウマンシュギ 藝術論。Romantik (G), Romanticism (E). 十八世紀中葉の頃から起つたものであるが、多岐に亘る思想・文藝上の主義運動に冠せられて用ひられた結果複雑な内容をもつ様になつた。後には古典的といふ概念と對立するものと解せられるやうになり、文藝上の精神又は傾向の中、自然尊重・形式主義・寫實主義的傾向のものに對立するものを浪漫的といつたり、又浪漫主義といふやうになつた。その廣義の浪漫主義文藝の特色としては次のやうなものをあげることが出来る。

- 1、主觀的世界把握。
- 2、空想的であり感情的であること。
- 3、個性的であり、自由を尊重すること。そのため傳統的形式的破壊が行はれること。
- 4、表現の形式的明朗さよりも感情の横溢してゐること。
- 5、象徴的であり、神祕的なこと。
- 6、好奇的であり、異國情緒をこのむこと。

7、無意志的憧憬であること。
當代に於ては先づ北村透谷をその先驅者とし、高山樗牛の評論及び明星派の和歌、とくに晶子の和歌等はその代表的のものである。

【自然主義】シゼンシュギ 文學論。Le Naturalism (F), 文學へ科學の研究法を採用して、單に人間生活の觀察をするばかりでなく、更に實驗的研究を加へようとする學說である。そしてその中には人間を生理學者や醫者の如く觀察する方面と、社會學者の觀察の様な態度と二方面ある。文藝上に於ける自然主義は佛のエミール・ゾラによつて主唱され「モウパッサン」「ゴンクウル兄弟」はそれを受けついで著名な人である。

我が國に於ては早くゾラの影響をうけた小杉天外や永井荷風によつて理論よりも作品が先にあらはれ、後島村抱月・長谷川天溪・岩野泡鳴等の理論となり、田山花袋（平面描寫）島崎藤村・國木田獨步・徳田秋聲・正宗白鳥等の作品が出現したのである。

【新體詩】シンタイシ 明治の初期に於て西洋詩歌の形式や精神をとり入れて新に創造された新詩形を言ふ。我が國にその源流を尋ねれば上古の長歌、中古の今様歌などにも求めうるが、直接には全く西洋の詩の影響であり、とくに明治十五年の「新體詩抄」に淵源してゐる。該書

は外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の共著で、譯詩十四、作詩五篇からなり、その表現や内容は粗笨通俗のものであるが、これは和歌や俳句に比して表現が甚しく自由であり、當時の新思想の複雑さを表現するのに大いに適してゐたため、その後次々と行はれ、遂に藤村・晚翠の如き極盛時代を現出するに至つたのである。今次に一例をかかげておかう。

山山かすみ 　　いりあひひの
かねはなりつゝ 野のうしは
徐に歩み 　　歸りゆく
耕す人も 　　うちつかれ
やうやくさりて 余ひとり
たそがれ時に 　のこりけり

（虞禮氏墳上感懷の歌、矢田部良吉譯、「新體詩抄」より）

かくの如く七五調であつて、テニスン、ロングフニローの譯詩等がとくに多かつたのである。

【二十年代は未だ試作の境地を出でず】詩壇の展開は之を三分して見ることが出来る。

- (一) 前期
- (イ) 新體詩の誕生
- (ロ) 新體詩以後

（落合直文の「孝女白菊の歌」二十一年）
（森鷗外の「於母影」二十三年）

(二) 中期

- (イ) 北村透谷
- (ロ) 藤村晩翠時代
- (ハ) 其の他

(1、明星派——鐵幹中心)

(三) 後期

- (イ) 自由詩の提唱
- (ロ) 露風白秋時代の自由詩

二十年代は所謂初期であり準備の時代であり、したがつて試作時代である。

【北村透谷】前課参照。彼は「文學界」を創刊し天成の詩才、ことに浪漫主義的風格を持して其の先驅者となり、熱烈なる詩情と豊醇なる空想とに於て當期隨一の詩人であつた。その代表作としては「蓬萊曲」「楚囚の詩」「蝶のゆくへ」等をあげることが出来る。透谷の作は理想と現實との葛藤、理想の破れる経路の闡明、近代人的憂鬱感等をうたつてゐるところにその特色がある。尙彼は若年を以て自殺したが後進誘導の功は實に偉大であつた。

島崎藤村・馬場弧蝶・戸川殘花・平田禿木・戸川秋骨などはみな彼の傘下に集つた人々である。

【中西梅花】 ナカニシバイクワ 詩人。本名は幹男。落花漂絮・梅花道人と言ふのはその別號である。安政三年江戸淺草に生まれ、明治二十四年發狂、日露戦争前後に歿した。家は漢法醫を業としてゐたが、詩才にめぐまれ、常に「萬葉集」を愛誦し、又俳諧をよくした。佛語を學んだこともあると言ふが殆ど學歴はなく、露伴の推薦によつて讀賣新聞に入り記者生活を營み、新體詩を作つたのも亦彼のすすめによると言ふ。在社三年で去り、二十三年東京を去つて放浪し、或は籠居坐禪したりした。彼には「新體梅花詩集」(二十四年刊)がある。

尙彼は美妙や湖處子・歐外等と共に「文學界」以外の人である。

【森歐外】 モリオウグワイ 小説家・戯曲家・評論家・翻譯家。本名林太郎。種々な別號がある。文久二年石見國に生まれ、大正十一年東京にて病歿、享年六十一。

彼は累世藩主龜井家の典醫である家に生まれ、早くから四書・五經を習ひ、蘭學蘭文典を學び、後東京に出て(十一歳)西周の邸に寓し、進文學舎に通學して獨逸語を修め、二十歳を以て東京大學醫學部を卒業した。軍醫となり病院官衙に勤めたが、二十三歳獨逸留學を命ぜられ

た。二十一年二十七歳を以て歸朝、陸大・美術學校などに奉職した。二十二年譯詩集「於母影」を發表、又雜誌「しがらみ草紙」を創刊して旺んに文學的活動を始めた。二十三年處女作の小説「舞姫」、續いて「うたかたの記」「文づかひ」を發表して、一躍文壇の巨擘と仰がれる様になつた。翌年醫學博士となり、二十六年軍醫學校長に補せられ、翌年軍醫部長として出征、臺灣に轉征して凱旋。三十二年から三年間小倉にて十二師團軍醫部長として勤務。日露の役にも再び出征、三十九年功三級勳二等に敘せられ、四十年軍醫總監となる。大正五年五十五歳、從三位勳一等を以て豫備役となる。其の間翻譯に評論に殆ど超人的精力をもつて活動をつづけた。「水沫集」「月草」「即興詩人」等によつてその一斑を知ることが出来る。尙彼は文部省美術展覽會の審査員並びに帝國美術院長或は帝室博物館長としても盡力し、國語問題や教科書調査委員としても活躍してゐる。四十二年には文學博士の學位をうけた。大正十一年病歿、特旨を以て從二位に敘せられた。長男於菟氏は醫學博士として現に東京帝大教授である。

彼は官途の方面に於て非凡の働きをなした上、文人としても亦偉大な業績を残した。常に先覺者の精神をもつて、小説に翻譯に評論に活躍し、更に文壇より一步遅れ

てゐた劇界にも亦偉大な功績を残してゐる。ことに泰西文學に造詣深く、且つ國文學・支那文學にも亦よく通じ、とくにその文章は措辭用語正しく、蒼古にして清新の趣を存し、更に緊張と暢達とを藏する文格であつて、まことに独自の名品と謂ふべく、古今に多く比類を見ない程である。

新體詩方面に於ける業績としては譯詩集「於母影」に於て、新體詩の藝術的價値を最初に最も力強く示した點が注意せられる。ゲエテやバイロンを多く譯し、形式的には新しく八七調や十調を試み、内容的には近代的情感のゆたかなものとした。その發表は明治二十二年であつて、透谷以前、直文と共に詩壇の表面に出現して活動した功績は大きい。

【島崎藤村】 前課參照。詩人としては「文學界」の同人として透谷の影響をうけた。三十年「若菜集」を出し、遂に一世を風靡するに至つたものである。人生自然の兩界を共に歌ひ、その内容は優雅・繊細な詩情であり、形式は七五調でありしかも雅醇な用語が連ねられてゐる。謂はば内容形式共に藤村的に完成されたものと謂ふことが出来る。次いで一葉舟(ヒトハブネ)を三十一年に出して、一脈の沈靜味を加へ、次に三十四の落梅集(ラクバイシフ)に於ては情感の世界から漸く意志の世界に推移

して來た。これは人間性自然の傾向でもあるが、藤村の詩がやがて小説へ進展することを暗示してゐる。

【土井晩翠】 ドキバンスキ 詩人。本名は林吉。明治四年仙臺に生まれた。家は土地の豪家で、二高を経て、三十年東大英文科を卒業。詩壇に出て独自の詩風を以て一世に鳴り、詩情衰へた頃外遊し、後永く第二高等學校教授であつた。天地有情(三十二年)を處女詩集として、曉鐘(三十四年)東海遊子吟(三十九年)等の著がある。彼の詩は本文にある通り莊重雄渾の格調にその特色がある。藤村が女性的であるならば、彼は正しく男性的の詩人である。蒼古沈痛の悲調はまことに彼独自のものであり、しかも一人の先達もなくして此の詩調を完成したことは、文學史上特記すべきである。ことに日清戦後國民詩人出でよとか、雄渾剛健の理想をうたふ詩人出でよとかいふ詩壇の提唱待望切なる時に、恰もその要求に應ずるが如くして出た彼は、漢詩成語を中心として、放吟に適する七五正調を以て英雄を詠じ東西の風雲をうたひ、理想を高吟し、人生觀を直敘したので大いに青年學生の愛誦するところとなり、遂に藤村と對立して一家をなすに至つた。但し詩想の展開は既に「天地有情」を以て留まり、「東海遊子吟」の如きは徒にその缺點を暴露する結果に終つたことは残念である。

【莊重雄渾】 サウチヨウユウコン 「莊重」はおごそかで、重みのあること。「雄渾」は言語文章などの勢があつて力強いこと。

【格調】 カクテウ 詩歌の風格調子のこと。

【中葉】 チユウエフ 中頃。中世。ここは前者。

泣菫や有明の活躍時代 三十四・五年前から四十年頃迄である。

【薄田泣菫】 ススキダキフキン 詩人・隨筆家。本名は淳介。明治十年岡山縣に生まれた。祖父は醫師、父は農。

岡山中學を二年にして退學、後の學歴はない。上京して帝國圖書館に群書をあさり獨學修養した。大阪で雜誌創刊、京都に轉居、歸郷後再度上洛。後西宮市外に轉住し大阪朝日新聞に關係し幹部に累進、顧問とまでなつたが病を以て退職。明星終刊前後、有明と共に詩壇を去り永く筆を絶つた。後に隨筆家として復活今日に至つてゐる。その著は詩集募笛集(三十二年)を處女作として、ゆく春、二十五絃、白羊宮等八・九種に上つてゐる。

【蒲原有明】 カンバラリアアケ 詩人。本名は隼雄。明治九年東京市麴町生れ、二十五年東京府立尋常中學校を卒業し國民英學會に學んだことがある。「新聲」詩壇選者となり「明星」に詩作を發表したりして斯界に重きをなすに至つた。象徴詩運動の氣運に乗じ、その派の

隨一の作家となり、泣菫と並んで詩壇双璧の觀をなした。四十一年頃から詩壇を遠ざかり東京の郊外中野に退き、鎌倉に赴き、靜岡に隱退した。三十五年の「草わかば」を處女詩集として獨弦哀歌(三十六年)、春鳥集(三十八年)、有明集(四十一年)、有明詩集(大正十一年)等がある。

【兩者何れも西歐の詩風を……】 泣菫はキイツの感化をうけたに對し、有明はロゼッテイの影響があるとは當時詩壇の通評であつた。但し兩者ともにその程度は必ずしも深大なものではないと言はれてゐる。然し「文學界」や新國文提唱の中に人となつたのであるから、國風と洋風とが巧みに渾融されてゐることは謂ふ迄もないところである。

【前者は措辭の巧妙と詩想の博大を以て】 前者は勿論泣菫をさす。措辭(ツジ)はことばづかひ。文字の用法と辭句の配置のこと。彼は難解晦澁のそりしもうけたが、古語廢語の自由な驅使による古典詩風の浪漫的香氣を以て讀者を酔はしめ、ことに後出「ああ大和にしあらましかば」の様な古代巧藝思慕の頌詩體等に於て其の詩才を遺憾なく示してゐるのであるから、措辭の妙、詩想の博大はその特色と見ることが出来る。

【象徴的な詩風】 シャウチヨウテキナシフウ 先づ藝術論

としての象徴と言ふ意義を考へて見よう。一體吾々は二様の表象の仕方がある。一は對象の直接的意味を表象すること、即ち直觀と對象と現實の意味とは直接的に融合する場合である。例へば眼前に櫻の花を見て櫻の花と觀

じ、或は鳩を見て鳩とし、赤色を見て赤色と認めるのはそれである。二は對象の現實の意味以外に間接的聯想的意味をも含めて表象すること、例へば、櫻の花を見て櫻の花といふ觀念の外に「大和魂」を、或は鳩を見て「平和」を、或は赤色を見て「熱烈活動」を、「危険」をむすびつけて抱く場合がそれである。その直接的具象的觀念と共に、間接的抽象的觀念が各々獨立の意義を有しながら結合するところに意義があるのであつて、これが即ち象徴の作用であり、象徴を起すものを象徴の形式とよび、象徴されたものを象徴の内容とよぶのである。そして宗教上或は實生活上の象徴は多く所謂知的象徴であるが、藝術に於ける象徴は形式的方面が獨立の具象的である上に、兩者が感情的情趣的に結びつくところにその特色があるのである。即ち美的象徴に於ては、象徴の形式的方面に於て美的具象的獨立的であると共に、内容に於て人間的深さが要求され且つ情趣的になりたつてゐるのである。尙一般に表象の形式的方面は白・赤・青等の色彩、形・線の様な感覺的のもの、動植物・器具等のもので表

はされるに反し、その内容は「人生」とか「愛」とかいふ精神的抽象的なものが普通である。

さて「象徴的な詩風」と言ふのは、以上の藝術論に基づいて、象徴の手法によつて表現する詩風のことである。有明は實に我が國象徴派の第一人者であつて、かれの「春鳥集」はその方面の代表的詩集である。尙我が國の象徴派と言ふ詩派は三十一年代末に胚胎し、四十年代から大正期に榮えたもので、先づ象徴(Symbol)と言ふ譯語は遠く中江兆民の「維氏美學」に始り、後鷗外・上田敏等によつて定譯となつたものである。三十一年の「佛蘭西詩壇の新聲」(敏)、三十三年の「審美新説」(鷗外)は本邦該詩史上注意すべきものであり、三十八年に至つて長谷川天溪・片山孤村・角田浩々歌客・中島孤島・島村抱月・岩野泡鳴等がこれについて論じ、上田敏の「海潮音」の序が又これを説明し、愈々詩壇の中心問題となつて來たのである。

さて象徴詩人はと言ふに、先づ蒲原有明を第一人者と見て泡鳴・泣菫・與謝野寛などがあり、更に當時年少の白秋や露風があつた。然し泣菫・寛は習作に止り、泡鳴のは詩境に於て純粹なものと言ひ難く、したがつて僅かに有明一人が優れた詩品を示したことにとどまつたのである。前記の有明の詩集以外のものでは、邪宗門(白

秋) 廢園(露風) 白き手の獵人(露風) 等があげられるだけである。したがって我が詩派としての象徴派はその理論も作品も實は完成の域に至らなかつたが、中で有明は詩人として光つてゐるのである。本文の意も亦それを言つたのである。

【北原白秋】 キタハラハクシウ 歌人・詩人。本名は隆吉。明治十八年福岡縣生。生家は醸造業、中學卒業後早稻田大學の文科に入つたが中途退學。四十二年處女詩集「邪宗門」刊行、詩名頗に揚がる。詩集の外に歌集・小唄・民謡集等著書が多い。「その精力・天分共に明治大正を通じての第一人者であり、しかも白秋ほど自分の天分を十分に發揮し得た藝術家は稀であらう」とは河井氏の評である。本領とする詩は勿論であるが童謡を新興して新天地を開拓し、その民謡は廣く大正の後期に行はれ、短歌もすぐれた伎倆を示してゐることを思ふと、たしかに詩人としてなすべき凡ての仕事に着手し、開拓し、而もみな成功を収めた人と言ふことが出来る。散文にも得がたい名品がある。

さて彼の詩壇の活躍を見るに、三十七年「文庫」に詩作を發表し始めてから、翌年の「全都覺醒賦」の長篇によつて彼の名は青年注目の的となり、續いて「明星」「スバル」によつて盛に詩作を發表した。定型詩破壊運動・

口語詩提唱・自由詩發生等によつて詩壇の動盪期であつた四十年から四十一年にかけて、彼は超然として象徴的手法により、又別に独自の印象的手法をもつて新しい感覺をうたつてゐた。かくて四十二年「邪宗門」を出し、ここに詩壇的位置が定まつたのである。その頃盛に短歌を發表。「思ひ出」(明治期最後の刊行)は全詩壇の推稱をうけた。大正に入つてからは「白金の獨樂」に詩技の圓熟を示し、一方又民謡・童謡を發表して活躍し、作曲と相俟つて全國に流布し、「白秋小唄集」も大いに世に行はれ、彼の名は全國の小學兒童にまで知られる様になつた。昭和に入つては主として短歌に力を注ぎ、近年歌誌「多摩」を創刊して後進を指導してゐる。

【三木露風】 ミキロフウ 詩人。本名は操。明治二十二年兵庫縣生。姫路中學などに學んで後、早大の英文科、慶應義塾大學の文科の聽講生であつたことがある。「夏姫」はその處女詩集で三十八年の刊、中に短歌もとられてゐた。上田敏主宰の「藝苑」に詩作を發表してその才をみとめられ、後相馬御風や野口雨情等と早稻田詩社を結んだ。當時御風と口語詩を提唱して「暗い扉」を發表、更に四十二年最初の詩集「廢園」を出すに及び、新人としての注目をひき、永く白秋と共にその詩名を並稱された。四十三年「寂しき曙」、大正二年「白き手の獵人」大

ある。

正四年「幻の田」と次々に詩集を出した。大正十年頃信仰生活に入り北海道のトラピスト修道院に起居したが、十四年上京し、後は主として童謡の製作に没頭した。「小鳥の友」(大正十五年)はその童謡集である。彼は最初官能的な印象的抒情詩に始まり(廢園)、それが廢類的心意と靈性への思慕となり(寂しき曙)、更に東洋風な自然的瞑想をフランスの象徴的手法によつて示した(「白き手の獵人」「幻の田園」)。修道院生活中の「信仰の曙」等は内省的傾向は勿論深いが、感情と感覺とに於て往年のものに劣ることを示してゐる。とにかく彼は日本に於ける象徴主義の理想的側面を示した詩人である。

【感覺美】 カンカクビ 外界の刺激を感受する感覺上の美しさ。

【編爛】 ケンラン (一)あやがあつて目も覺める程にきらびやかなこと。(二) 詩歌文章の措辭用語の立派なこと。

【冥想的東洋的な詩情】 「三木露風」の作風の項参照。

【自然主義の全盛時代】 九〇頁二行・三行参照。

【詩壇にも口語詩が勃興し、定型律が破壊されて】 前述詩壇の展開變遷の項参照。即ち三期に分けた後期の状態であつて、一般的文學思潮としての自然主義が隆盛を極めた結果、詩壇も亦此の様な變移を見ることがなつたので

抑、近代詩の誕生・發達は、譯詩がその原動力をなしてゐる。然るに譯詩は從來の定型詩によつて表現することとが困難な爲、いつかは自由詩形の唱道となることは當然の歸結であつた。そしてそれを一層早めたのが即ち自然主義の文學思潮なのである。とにかく敏の「佛蘭西詩壇の新聲」は我が國に於ける自由詩の提唱の起原とされてゐる。自由詩は文語の定律を破つて口語詩に進展することも亦當然の理である。「口語詩」とは日常口語を詩語とする詩篇の一體で、古くからあるにはあつたが、口語詩の正しく先驅と見るべきものは川路柳虹の「塵溜」である。當時の詩壇は論議百出したが、大勢は口語詩に傾き、御風の「瘦犬」(四十二年)、露風の「暗い扉」(四十二年)等がつづいて出た。その間口語詩の存在性を強く主張したのは抱月の「口語詩問題」(四十一年)であつた。尙鴨外の「沙羅の木」(大正四年)に收められた譯詩の口語體は我が口語詩發達史上忘れ難い出来事である。業績であると言はれてゐる。とにかく明治末年から大正にかけては口語詩が勃興してゆき、したがつて「定型律」が破壊せられる様になつたのである。

【明治二十年代の中葉】 當時は國粹保存・國文學復興の熱が盛であつて、そこから我が國古來の傳統文學の一であ

る俳句革新の叫が起つたのである。一體江戸時代、天明の蕪村が歿してからは俳諧は墮落の一路を辿つたのであるが、ことに文政天保の頃から月並的になり萎靡沈滞してしまひ、その風が明治の前期に迄及び、其角堂永機等を宗匠として形骸だけの俳句が行はれてゐたのである。

【正岡子規】 マサヲカシキ 本名常規。作歌論には竹の里人の號を用ひた。慶應三年伊豫の松山に生まれ、明治三十五年東京下谷上根岸子規庵に歿す。享年三十六。父は彼の六歳の時早世、母方の祖父は藩儒であつたため早くから漢文の素讀をうけた。十一二歳既に文を草し詩をつくり、又旅行を好んだ。松山中學に入り、後上京共立學校に學び、更に大學豫備門（後の第一高等中學校）に入り二十三年卒業、大學國文科に入る。子規の號はその前年突如略血したので之を用ひ始めた。二十四年本郷駒込に一家を構へ、翌年下谷にうつり、此の頃から漸く俳句に専心し句作と古句研究に没頭した。俳句分類・俳家全集・一家二十句・俳書年表の編著に着手した。二十六年大學退學。その間「日本」（新聞）に執筆し、又その社員となつた。二十八年從軍記者として金州に行く。但し講和成立のため實戦に臨まずして歸國。船中略血、神戸にて療養し松山に歸り、夏目漱石の家に寄宿。ために俳風とみに松山に興ることとなり、後三十年に「ホトトギス」の發表以來、遂に萬葉調の復古を叫び、これまた明治歌壇の偉觀となつた。萬葉集の推賞と共に、實朝・曙覽・平賀元義などのかくれ歌人を紹介した功も亦大きい。その俳句和歌を始め編著多く、その各方面に於て薰陶をうけた人々も亦頗る多い。

俳句に於てはとくに客觀的繪畫的な蕪村に傾倒し、更に自然の凝視、寫生的主張を唱道して表現格調共に清新味溢れた句を以て明治俳壇の始祖となつた。

【三十五年に病歿したが】 卷五、十課「子規居士」參照。彼の門下によつてつがれ。俳句の方では虚子・碧梧桐の外に、先輩である内藤鳴雪も教を受けて名高く、其の他村上東城・飯田蛇笏・原石鼎などが聞えてゐる。

【高濱虚子】 タカハマキヨシ 本名清。明治七年愛媛縣松山市に生まれた。二十四年松山中學在學中、碧梧桐を通じて子規を知り、句作をなし、遙か東京からの教をうけることとなつた。二十五年中學卒業、京都の高等中學に入り、その解散に會ひ、碧梧桐と共に仙臺高等學校に轉じたが、同年共に退學して上京、親しく子規の教を受けた。彼等二人は相共に文學並びに俳句の研究に精進し、ことに俳壇革新の業には子規を援けてつくす所が多かつた。當時子規は日本新聞社員で俳句俳話を發表、彼も二十九年から雑誌「日本人」に俳話をかけ、三十一年ま

ス」の松山に刊行されるに至る基をなした。その間彼は病益々悪かつたが、「日本」紙上等を主にして盛に執筆し、二十九年頃から新風の俳句漸く天下に普く子規の名も重きを加へて來た。同年月一回の根岸庵句會を始め、翌年蕪村忌を修し、毎年の例とした。三十一年句集「新俳句」なる。又「歌よみに與ふる書」を發表。歌壇に大衝動を與へた。又「敘事文」の論文によつて寫生文を提唱した。三十二年「根岸短歌會」を始めた。此の頃前に引つづいて歌論作歌益々盛であつた。三十三年來の腰部の疼痛愈々甚しく人力車の力を借りなくては外出出來なくなつた。同年文章朗讀會山會をひらき寫生文の制作に精進した。三十四年殆ど病床を出る能はず、二三の書に筆をとつてゐたが翌年九月遂に病歿。

彼は短い生涯に於てしかも病になやまされつつ（臥床約五年）幾多の方面に没すべからざる偉績を残した。第一に明治二十五年「日本」に俳句の革新を唱へてから、僅か六七年を以て天下を風靡し、蔚然明治新俳句の盛觀を招來した。尙芭蕉や蕪村等の先人の眞價を闡明し、兼ねて俳句の詩的價値を宣揚し確保した功は偉勳と謂はなければならぬ。「俳句」の語も亦彼の創始する所である。又俳句に關聯して寫生文の一體を創始し殆ど文壇の空氣を一新した觀があつた。更に三十一年「歌よみに與ふる

とめて「俳句入門」となし之を刊行。これが彼の第一の著書である。三十年一月松山に誕生した「ホトトギス」は翌年八月を以て廢刊。彼は十月之を引繼いで東京で發行、爾來今日に及んでゐる。この雑誌は新聞「日本」と共に新俳句革新の大事業を成就する上に大いに力のあつたもので、日本派、ホトトギス派などと新俳句をよぶのもまた一にそのためである。ことに彼は三十五年子規が病歿してからは名實共に「ホトトギス」の主宰經營者であつた。四十年前後は俳壇に新傾向が起り、大衝動を起したが、彼はその頃寫生文と小説とに没頭してゐた。前者は子規と共に創始したものであり、後者は漱石との親近から志すに至つたものである。四十一年國民新聞に入つて約二ケ年文藝欄擔當、同新聞の俳句欄は之を松根東洋城に譲つた程であるが、大正の初年再び俳壇に戻りホトトギスによつて新傾向の俳句と對峙することとなつた。勢力の挽回と門下生の指導誘掖とはその後専ら彼のつとめた所である。その結果現れたのが「進むべき俳句の道」（大正七年刊）である。

彼の俳句は勿論子規の紹述で客觀寫生にあるが、古くは「古壺新酒論」、近くは「花鳥諷詠論」などの語によつて十七字の定型と季題との兩者を堅持し、新傾向の俳句に對して傳統的俳句の本領を主張するところにその面目

がある。その寫生文は獨特な清新さを有してゐたが、それを以て更に進んだ彼の小説は、かつて漱石が低徊趣味と命名した如く、寫生文に對してはより多く小説であり、小説に對してはより多く寫生文であると云ふ趣で、ただとるべきは一種清新な描寫法であつた。「俳諧師」はその代表作であり、「朝鮮」や「柿二つ」の長篇も注意せられる。

【河東碧梧桐】カハヒガシヘキゴトウ 本名秉五郎。明治六年伊豫の松山市に生まれ、昭和十二年歿、享年六十五。二十七年松山中學卒業、京都の三高に入學、翌年仙臺の二高に轉校、同年退校して上京。この項虚子の項参照。二十八年新聞「日本」へ入社。三十九年から四十四年迄全國行脚。その後「日本及日本人」の編輯に與り、新聞「日本」時代から繼承した「日本俳句」擔當。大正九年歐米漫遊の途に上り、十一年歸朝。その後三・四の個人雜誌或は同人雜誌を出してゐる。昭和八年還曆に當り、俳壇引退を聲明した。

虚子と碧梧桐とは子規在世の頃から門下の二俊秀として並稱され、その俳句上の衣鉢をつぐのは此の二人であると目されてゐたが、二人の性格・氣稟に於ては相違するものが少くない。しかし子規の生前に於てはその指導によつて統率されてゐた。そして虚子はホトトギスによつて新俳句をひろめ、碧梧桐は「日本及日本人」によつて藝術的に向上しようとしたので、何れも處を得てゐたわけであつたが、子規の歿後虚子は一時俳句を離れて寫生文や小説に没入してゐる時、彼碧梧桐は行きつまつた寫生説の打開にと専心努力し、遂に新傾向の俳句を興し十七字と季題とを打破するに至つた。その門下には新進氣鋭の士が東京にも地方にもあつて彼をたすけ、又彼の大旅行によつてその勢力は益々擴大された。勿論「日本」

「日本及日本人」の機關の働きも亦與つてゐる。かくて一時は俳壇を席卷する迄に至つたのである。彼は大旅行の後新傾向運動唯一の機關雜誌「層雲」から離れて、「海紅」を興したが、又之とも袂を分つて「三昧」を興した。更に之とも相垂いて最近まで「壬申帖」の孤壘を守つてゐた。その間「日本及日本人」も亦分解してゐる。それらは皆彼がその當事者と主張を異にする所から出發してゐるのである。かくて彼は分裂と分裂との連続の中に獨歩して來たのであるが、それはその句風の變移の早いためでもあるが、一には少々難解な句をつくる様になつたことにも因由があらう。やや藝術的に疑はれる様な句作に迄突進した事は遺憾ではあるが、通俗に墮せずして、向上の聖道に専念して來たその意氣と努力とは壯とし多しなればならない。

尙明治の俳壇に於ては日本派の外には、筑波・秋聲の二會があつた。前者は二十七年、帝大出身の新進によつて作られたもので、大野酒竹・佐々醒雪・笹川臨風・沼波瓊音等がその同人である。後者は二十八年に出來たもので、角田竹冷・尾崎紅葉・岡野知十・巖谷小波等がその同人である。これは二十九年「秋の聲」を出した。一は俳句勃興に促され、一は日本派に對抗しようとして起つたものではあるが、何れも格別な働きは見せないで終つた。

尙新傾向の俳人としては萩原井泉水が名高い。彼は「層雲」によつてその主張を明らかにしてゐる。

【明治時代以後の和歌は】今落合直文以前のことを概説しておかう。まづ明治時代の前期は、一言にして言へば、桂園派の流である。即ち江戸時代傳統の歌風を守つて、景樹風の流を汲み、所謂堂上派の和歌の時代である。主なる人は景樹の門人八田知紀から出た高崎正風を始めとして、三條實美・小出繁・海上胤平・本居豊頼・坂正臣・井上通泰・税所敦子等である。

尙明治の和歌を語る者の忘れてならないのは、實に明治大帝の御事どもである。大帝は時流を巔然と超越し給ひ、大稜威そのままの、謂はば帝王調とも申すべき珠玉の名歌を残し遊ばされてゐる。ことに御一生の御製約十

萬餘首、二十一代集全歌數の約三倍にも匹敵すると言ふ數量だけでも、その不世出の大歌人であらせられたことがわかるであらう。明治歌壇の隆昌は一に御歌所・新年歌御會等を中心にした大御心の賜物と謂ふべきである。

【浪漫的】浪漫主義の項参照。

【落合直文】オチアヒナホブミ 歌人・國文學者。萩之家の號がある。文久元年、宮城縣本吉郡松岩村に生まれ、明治三十六年、東京にて歿。享年四十三。彼は仙臺藩の重臣、鮎貝盛房の子であつたが、落合直亮の養子となり改名。十年伊勢の神宮教院に入り、十四年院費を以て東京に遊學。十五年東京大學古典講習科に入り、十六年直亮の次女と結婚。十七年歩兵第一聯隊に入營、大學を退く。二十年除隊。二十一年皇典講究所等の講師となり、「孝女白菊の歌」を發表。二十二年國語傳習所の創立に關與し、その主任講師として晩年に及んだ。第一高等中學校・早稻田專門學校文學部に教鞭をとる。二十三年小中村（池邊）義象・萩野由之と共に「日本文學全書」を刊行。後國學院の創立されるや、入つてその講師となる。後學監補となる。二十四年「歴史讀本」等を出す。二十五年雜誌「歌學」に短歌革新の意見を公にす。二十六年駒込に居を卜し淺香社を結ぶ（次項参照）。二十七年「日本大文典」「大鏡詳解」「中等國文讀本」等を出す。こと

ばの泉」の編纂開始。三十年子規・鐵幹・信綱・雨江・桂月・羽衣等と詩新會を起し、詩集「この花」を出す。三十二年病を以て教職を退き轉地療養。彼の歌文は「萩之家遺稿」「萩之家歌集」「落合直文集」に收められてゐる。

彼の業績は明治二十年代の初期に於て國語國文學の新路を開拓したこと。讀本類を編纂して教育界に清新の氣をもたらししたこと。新體詩に於て多くの後人に影響を及ぼしてゐること。その草する文が後の美文の母胎となつたこと。或は文典・辭書及び日本文學全書の如き多くの編著を公にしたこと等を數へうるが、就中偉業と言ふべきは短歌革新上の業績である。

【淺香社】アサカシヤ 文學的結社。落合直文が明治二十六年東京本郷區淺嘉町に居を移すや、その町名に因んでなづけたものである。本文に「二十五年」とあるは誤植。専ら國文和歌の革新を圖る目的の下に、毎月數回會合して門生と共に創作し、且つ批評論難した。同年二月、實弟鮎貝槐園・鐵幹・桂月・雨江・内海月杖・堀内新泉・國分操子・師岡須賀子等の集つたのがその始である。後には尾上柴舟・金子薰園・久保猪之吉・服部躬治等も加はつた。もとは詩文にも力を注いでゐたが、後には和歌が中心となり、「淺香社同人詠草」の題で新聞に發表した。

かくて鐵幹・柴舟・薰園などはその方面で名をなすに至つた。僅々二三年のものであつたが、新派和歌形成上には大きな業績を残してゐる。

【明星派】ミヤウジヤウハ 詩歌雜誌「明星」を中心とした和歌の流派。「明星」は鐵幹の主宰であつて、明治三十年四月新詩社から發刊。同四十一年十一月百號を以て廢刊。大正十年十一月刊行、昭和二年四月廢刊。始め新聞大であつたが後に普通雜誌形に改められた。挿繪・紙質・體裁すべて新清にして、先づその外形上當時の誌界に大いなる刺激を與へたものであるが、更にその詩歌界に對する勢力に至つては全く明星王國として一時は對臨をほしきままにしたのである。鐵幹はもと直文の門に出たのであるが、同門の柴舟・薰園等をしのぎ、信綱の折衷派、子規の萬葉調を壓して新詩社時代を現出したのである。彼の歌は自ら「男生の歌」と稱した様に豪宕雄健なものであり、格調のよく整つてゐるところにその特色があつた。然し眞の明星派の中心は其の妻晶子であつて、其の詩才は嶄然頭角をあらはし、近代の香氣馥郁たる奔放情熱的歌風は當時の青年男女を全く魅了し去つたものである。詩に於ても亦其の特色とする浪漫的精神を高揚して詩壇の統一的王國をなしたのであつた。然し四十年頃になると散文界の自然主義勃興に禍され遂に廢刊せざるを

なかつたのである。當時の詩人歌人中その同人でない著名のものも詩歌を之によせたのであつて、今その著しい人々だけをここに掲げておかう。

和歌—鐵幹・晶子・窪田空穂・水野葉舟・相馬御風・高村光太郎・吉井勇・玉野花子・平野萬里・茅野蕭々・北原白秋。

詩—鐵幹・晶子・鷗外・敏・孤蝶・泣菫・有明・泡鳴・御風・萬里・蕭々。

【與謝野鐵幹夫妻】ヨサノテツカンフサイ 與謝野鐵幹と其の妻晶子のこと。

【與謝野鐵幹】本名寛(ヒロシ)、鐵幹は明治三十七年迄用ひたその號である。彼は詩人であり歌人である。明治六年京都に生まれ、昭和十年流感にかかり慶應病院で歿した。享年六十三。父は尙綱、西本願寺の僧で、儒學・國學・和歌に通じてゐた。故に彼は早くから儒・佛の典籍や國書を學んだ。明治十三年(八歳)鹿兒島市の小學校に轉校、同市舊藩塾「兵兒の社」に入り、また漢學塾に學んだ。十六年京都に歸る。攝津の僧の養子となり、十九年そこを去る。二十二年(十七歳)西本願寺で得度。その後仲兄の經營する山口縣徳山女學校の教員となる。二十五年東京に逃亡、苦學す。その間落合直文に師事し、鷗外に知られ、透谷・桂月・井上哲次郎等と相知つた。

二十六年同人と淺香社を創立した。同年二六新報の記者となり學藝部主宰。坂正臣・大口鯛二・佐佐木信綱・正岡子規等と相知る。二十七年「亡國の音」等を發表し、舊派の短歌を痛撃、二十八年韓國政府學部省乙未義塾の教師となる。二十九年(二十四歳)東京に歸り、詩歌集「東西南北」を刊行。翌年詩歌集「天地玄黃」を出した。同年或は新體詩會を起し新詩會を結んで「この花」を刊行。同年再度韓國に渡る。三十一年東京に歸り、三十三年新詩社を創立し、四月「明星」を刊行。翌年鳳晶子と結婚。四十一年同誌廢刊。四十二年鷗外と共に「スバル」を刊行。その間「鐵幹子」や「紫」などの詩歌集を刊行した。四十四年佛蘭西に遊學、途中晶子の渡佛をまつて共に諸國を巡遊、大正二年歸朝。同九年慶應義塾の文學部教授となる。十年文化學院を創立。同年「明星」を復活。昭和二年休刊。前記の外歌集「相聞」を始め數種の著がある。彼は詩歌を以て専門とする者でない旨を斷つてゐるが、然し詩歌の改革、ことに新派和歌運動に於ける功績がもつとも顯著である。

【與謝野晶子】ヨサノアキコ 歌人。明治十一年堺市に生まれた。舊姓は鳳。三十四年上京、同八月歌集「みだれ髪」を刊行、その秋鐵幹に嫁す。その後歌集・詩歌集等多數の著を出してゐる。「明星」の中心的勢力として活躍

し、情熱的な自由奔放なその詩歌は當時の青年男女から強い感激を以て迎へられたものである。大正元年渡歐、同十年文化學院設立に及びその學監となる。

【園外】 ケングワイ 範圍の外。限られた區域外。「園」は畜類を養ふ「をり」のこと。

【尾上柴舟】 ヲノヘサイシウ 歌人。本名は八郎。明治九年岡山縣津山町に生まれた。舊姓北郷、尾上勤の養子となる。一高を経て帝大の國文科卒。和歌は始め大口鯛二についたが、後直文の淺香社に入つた。鐵幹氏等新詩社の浪漫的傾向に對して、薰園氏と共に敘景詩運動を始め、三十八年車前草社を結び、牧水・夕暮、正富・汪洋氏等をその門から出した。大正三年「水麴」の發刊されるや、これを主宰して今日に至つてゐる。彼は書道にも盡瘁し、その研究書もある。又女子高等師範・學習院・早稲田大學等にも教職を奉じた。

その帝大國文科學生の時(明治三十三年)、新年歌御會始の預選歌に入選した頃はまだ大口鯛二風の傾向を存してゐたが新詩社に懐らないで「敘景詩」を編し、清新な敘景歌を唱導するに及んで、作風が漸く定まつて來た。その後その自然觀照に抒情的分子が加はつて來て内省的、思索的なものに進んだ。

【金子薰園】 カネコクンエン 歌人。本名は雄太郎。明治

九年東京の神田に生まれた。舊姓は武山、外祖父の家を嗣いで金子と稱する様になつた。明治二十六年淺香社に入つて和歌の新運動に参加した。三十年「新聲」の歌欄擔當。三十四年一月、第一歌集「片われ月」を刊行。三十五年柴舟と共に「敘景詩」を出し、明星派の戀愛至上歌に對して一流をなした。三十六年「白菊會」を起し、土岐・哀果・吉植・庄亮等が集つた。三十七年、「新聲」の後身「新潮」の出るに及んで再びその歌欄を擔當。三十八年短歌研究會を起して後進の誘掖につとめた。歌集は次々と刊行されたが、短歌作法に關するものが十數冊にも上つてゐる。大正七年雜誌「光」を出し、今日に至つてゐる。

【沈潜的】 チンセンテキ 「沈潜」とは(一)水底に沈むこと。(二)心をおちつけて靜かに考へること。ここは勿論後者であり、且つ兩人中では柴舟の方を言つてゐるのである。彼に實生活に即した内省的・思索的の和歌が後年多くなつたことは前述の通りである。

【正岡子規】 既出。

【後世に及ぼした影響】 本文の九五頁參照。

【謳歌】 オウカ 聲を合はせてひとしくうたふこと。ほめうたふこと。ここは後者。

【反響】 ハンキヤウ (一)音響が物にぶつかつて再び耳に

きこえて來る現象。こだま。轉じて、或ることの影響で同様なことの起ることをひろく言ふ。

【伊藤左千夫】 イトウサチヲ 歌人・小説家。本名は幸次郎。元治元年、上總國山武郡成東町殿臺に生まれ、大正二年東京の龜戸の自邸で歿した。享年五十八。十歳上京、明治法律學校(明大の前身)に入り、法律家にならうとしたが、眼を病み、中途退學。二十二年再度上京。數年の間牛乳店に奉公、二十六歳の時、本所の茅場町に牛乳搾取業を始め、晩年に及んだ。(後に之を龜戸に移した。彼は三十歳の頃から和歌を學んでゐるが、三十三年始めて子規の門に入つた。その後同門中の最も勤勉敬虔な者として根岸派和歌建立に努力した。「アララギ」の創刊後は、作歌・歌論・萬葉集講義等を以て多くの門下生を養成した。和歌の外に、寫生文、寫生文派の小説にも手をそめた。

【長塚節】 ナガツカカカシ 歌人・小説家。明治十二年、茨城縣結城郡岡田村國生に生まれ、大正四年福岡の九大病院で結核症を以て歿した。享年三十七。水戸中學を中途退學。明治三十三年子規の門に入る。子規歿後「馬酔木」によつて作歌・歌論・寫生文を發表し、又ホトトギス派の小説をも作つた。「土」は小説として著名である。彼は家に在つて農事に勵み、父は政治に熱中して家事を

顧みる暇がなかつたと言ふ)又旅行を好んで多くの土地に遊んでゐる。晩年東洋の造形美術に思ひをひそめ、和歌の上にも「氣品」「牙え」を強調した。

【自然主義的思潮】 既出。

【さしもの】 あれ程迄(さかんであつた)の。

【石川啄木】 イシカハタクボク 歌人。本名は一(ハジメ)明治十九年(事實は十八年と言ふ)岩手縣に生まれ、四十五年東京の寓居で歿した。享年二十七。父は住職であつた。早くから神童と呼ばれ、十三年盛岡中學校に入學、級友と共に廻覽雜誌をつくり、又新詩社に加つた。十七の時中途退學上京したが、病を以て歸郷。その頃から詩篇・長詩の作多く、之を明星に發表。三十八年、詩集「あこがれ」を發刊。敏と鐵幹との序跋を得てその聲名はいよいよ高くなつた。同年結婚、盛岡市に在つて「小天地」を創刊したが、物質上の困難により、父の職を奉じてゐる澁民村に退いて代用教員となつた。第二詩集出版を企てて上京、當時の自然主義運動の盛んなのに會して小説を執筆したが生活はくるしかつた。再び同村に於て代用教員。やがて校長排斥のストライキを起して北海道に放浪し、或は雜誌を主宰し、或は代用教員となり、或は幾多の地方新聞記者となつて流轉した。四十一年上京郷友金田一京助の下宿に入つて、愈々小説をもつて立たうと

決心し、數篇を創作したが何れも各社から採用されなかつた。ここに於て煩悶焦燥の日夜を送り、その創作慾を短歌の表現に移すに及んで、深く生活の現實に迫り、歌壇に新生面を拓くに至つた。四十三年の歌集「一握の砂」はその作品を集めたものである。(三行にした新様式をもつて)。その後「スバル」に参加し、又東京朝日の校正に與つたりしたが、晩年は深く社會主義の研究に耽る様になつた。

彼の詩人としての傾向は「食ふべき詩」詩の内容形式に對する新提唱に於て最もよくあらはれてゐる。

「詩人はまづ第一に人でなければならぬ。第二に人でなければならぬ。第三に人でなければならぬ。さうして實に普通人のもつてゐる凡ての物をもつてゐるところの人でなければならぬ」

と言つて、之を詩人の三つの資格とし、又

「一切の文藝は他の一切のものと同じく、我等にとつては或る意味に於て、自己及び自己の生活の手段であり方法である。詩を尊貴なものとするのは一種の偶像崇拜である」

とも言つてゐる。かくの如き主張を有する彼の和歌が所謂生活派の和歌として切實なる實生活の表現されたものであることは言ふ迄もない。

平福百穂・古泉千穂・中村憲吉・土屋文明・齋藤茂吉・土田耕平・結城哀草果・高田浪吉・久保田不二子等はその派の主要な人々である。

【島木赤彦】 シマキアカヒコ 詩人。本名は久保田俊彦。柿人・柿の村人・柿蔭山房主人等の別號がある。明治九年長野縣上諏訪町に生まれ、大正十五年歿、享年五十一。正岡子規系統、アララギ派。伊藤左千夫の門人である。長野縣師範學校を卒業後十六年間小學校教育に従事、大正三年上京して歌道に専念し、且つアララギを編輯して多くの門人を養成し、長くアララギ派の重鎮として仰がれてゐた。

彼は作歌の信條として寫生を説き、寫生とは事象の核心を捉へることであり、寫生道は感情活動の直接表現をなす唯一の道であるとしてゐる。その晩年の作は著しく人麁風の雄大なる歌調を示してゐる。

【齋藤茂吉】 サイトウモキチ 歌人。醫學博士。本名は茂吉(シゲヨシ)。明治十五年山形縣南村山郡堀田村に生まれ、小學校卒業後上京し、開成中學・一高を経て、四十三年帝大醫科を卒業。精神病學教室助手・巢鴨病院醫員を勤務し、大正六年長崎醫專の教授となり、十年文部省在外研究員として獨逸・奧太利等に留學、十四年歸朝。十五年から東京青山腦病院長の職をついで今日に至つて

【土岐哀果】 トキアイクワ 歌人・新聞記者。本名善齋(ゼンマロ)。明治十八年東京の淺草に生まれた。父は學僧であり、連歌・國典にも通じてゐた。彼は府立一中の頃から連歌を學び、後金子薫園の白菊會に加つた。やがて自然主義運動の起るに及んで、短歌の生活化を提唱し、明治四十三年第一詩集「NAKIWARAI(全篇ローマ字)」を出した。後啄木との交遊深く、所謂「三行詩」の創始者でもある。始め讀賣新聞の記者となつたが、後に東京朝日に入社し、社會・學藝・調査の各部長に歴任した。「作者別萬葉集」及び「作者別萬葉集以後」を編纂し、又ローマ字の普及宣傳にも努め、その方面の著書も多い。

【かなぐり捨てる】 あらつぼく拂ひ棄てること。

【アララギの歌風】 アララギは短歌雜誌の名で、その歌風をアララギ派とも稱し、現實主義的萬葉調を以て、その特色としてゐる。

正岡子規の歿後門人等によつて「馬酔木」が發刊されたが、三十六年から四十一年迄で廢刊となつた。その後をついだのが「アカネ」であるが、同年更にアララギを千葉に於て創刊し、翌年之を東京に移し、左千夫が専ら中心となつて經營した。左千夫の歿後數人の共同編輯であつたが、大正十五年赤彦が歿してからは、齋藤茂吉が主任となり、もつて今日に及んでゐる。島木赤彦・岡麓・

ゐる。

明治三十八年正岡子規遺稿「竹の里歌」をよんで始めて作歌に志し、翌年左千夫の門に入り、アララギ發刊以來他の二三の同人と共に編輯を助けてゐたが、赤彦の歿後はその主任となり今日に及んでゐる。

子規の現實的寫生の作風を學んだ彼は、實相觀入の説を唱へ、寫生即象徴の説を固守してゐる。故にその歌風は寫生的萬葉調と言ふことが出来る。

【佐佐木信綱】 ササキノブツナ 歌人・歌學者。文學博士。竹柏園はその號である。明治五年伊勢の鈴鹿郡石薬師村に生まれた。父は國學者弘綱であつて、彼は早くから歌を詠んだ。父と共に諸國を歴遊したが後東京に移りすみ、高崎正風に和歌を學ぶ。東京帝大文學部古典科卒業。民間にあつて和歌を普及させようと志し、「歌の葉」を出し、又父と共に日本歌學全書を編した。日清戦後直文・鐵幹・子規等と共に新風を唱道し、後竹柏會を設けて「心の花」を發刊、會員の指導につとめた。三十七年帝大の講師を囑託され、昭和六年まで二十八年間の長きに亘つて、和歌史・歌學史・歌論史・國文學書史・萬葉集等を講じた。大正六年帝國學士院から恩賜賞を授けられ、同年又御歌所寄人を命ぜられ、明治天皇御集・昭憲皇太后御集の編纂に従事、大正十一年完成と共に辭任。十三年

宮内省御物管理委員臨時委員を囑託され祕府の典籍精査に従事、又橋本進吉・武田祐吉・久松潜一氏等と共に校本萬葉集作成に従つた。和歌及び歌學の歴史的研究と萬葉學の建設とを目的とし、他方國文學の文學的研究によつて未知の資料古典籍を發見紹介し、その刊行に努力した功績は大きい。

歌人としては竹柏會を率ひ、「心の花」を主宰し、和歌の革新と共に、趣味教育としての和歌の普及に努力してゐる。また童謡・唱歌・軍歌等にも心をそめ、その方面の作品も少なくない。門下には石樽千亦・川田順・木下利玄・齋藤瀧・大塚楠緒子・柳原白蓮・九條武子がある。

【窪田空穂】クボタウツボ 歌人。本名通治。明治十年長野縣東筑摩郡和田村に生まれ、松本中學卒業後、東京專門學校（早稲田大學 文學部）に入り、英語・國漢文を修め、卒業後新聞記者。雑誌記者を経て、現在は早大文學部教授である。

明治三十二年（二十三歳）初めて和歌に志し、新潮社に入つて明星に作歌を發表したが、間もなく去つて自己の進路を開拓し、今日に及んでゐる。その間多く年少の子弟を育成した。

【若山牧水】ワカヤマボクスキ 歌人。本名は繁。明治十八年宮崎縣に生まれ、昭和三年沼津の自邸で病歿、享年

之を大別すれば三期とすることが出来る。

一、小説及び文藝評論を主とした時代

二、演劇改良に専心し、新文藝開拓に努めた時代

三、演劇改良の實行と劇文學の創作・翻譯時代
小説に於ては明治十八年新小説論「小説神髓」を公にしその試作「書生氣質」を出したことに注意されるが、間もなく小説の筆を絶つた。文藝評論方面としては鷗外の理想派に對して寫實主義・現實派をもつて臨み、黎明期の明治文壇に對して大きな感化を與へた。

第二期に於ては脚本「桐一葉」「牧の方」「菊と桐」その他の創作を發表し、新しい立場から演劇評論を行つて時代に先驅した。

第三期に於ては文藝協會の創立と活動、ページェント劇の創始、沙翁全集（明治四十年以來昭和三年迄繼續、日本第一の翻譯事業）の完成に精力を傾け、「名残の星月夜」「役の行者」「新曲浦島」「義時の最後」「杵手鳥孤城落月」等多くの著作がある。

大正四年迄早稲田大學教授として後進を指導し、又「早稲田文學」の創刊から休刊迄之に盡力し、文藝教育家としても亦卓越した手腕を示した。島村抱月・綱島梁川・中島半次郎等はその門人である。昭和四年古稀祝賀の意味を以て、演劇博物館が早大に設立された。

四十五。延岡中學卒業後上京して早稲田大學に入る。在郷中から文才・歌才を認められてゐたが、尾上柴舟の門に入るや前田夕暮と共に忽ち歌壇に進出した。四十四年創作社を起して「創作」を主宰し、經營難と戦ひながら後進の誘掖につとめた。甚しく旅を愛して各地を歴遊し自然に親しみその祕奥に徹した作品が夥しい數に上つてゐる。それと共にその清新な紀行文も亦異彩を放つてゐる。夫人喜志子氏も歌人として認められ、夫の死後創作社の經營をついでゐる。

【前田夕暮】マヘダユフグレ 歌人。本名は洋三。明治十六年神奈川縣に生まれ、病弱と放浪の少年時代を送つて、三十七年上京、尾上柴舟の門に入つた。牧水の殉情的傾向に對し、其の主知的・無技巧的歌風を以て對立並稱された。三十九年白日社を起して「向日蔡」を發刊し、又四十四年「詩歌」を發刊した。後者は一時廢刊中絶したが後に再興、今はその唱道する新興短歌（自由律）の壇場として活用されてゐる。

【北原白秋】前出。

【坪内逍遙】ツボウチセウエウ 小説家・劇作家・評論家。文學博士。本名雄藏。安政六年美濃國に生まれ、昭和十年伊豆熱海の雙柿舎で歿した。享年七十七。その文學生涯は長く且つ廣汎な範圍に亘つてゐるが、

【小説神髓】セウセツシンズキ 明治年間に於ける最初の組織的小説論で、又文學批評理論の先驅とも見られる。

上巻は小説總論・小説の變遷・小説の主眼・小説の種類・小説の裨益。下巻は小説法則總論・文體論・小説脚色の法則・時代小説の脚色・主人公の設置・敘事法である。小説は美術（今の藝術）の一部で、

「畢竟、小説の旨とする所は専ら人情世態の描寫にある」即ち

「一大奇想の糸を繰りて巧みに人間の情を織做し、限りなく窮りなき隠妙不可思議なる原因よりして更にまた限りなき種々なる結果をしもいと美しく編みだしつゝ此人の世の因果の祕密を見るが如くに描き出し、見えがたきものを見えしむるを本分とはなすものなりか」と言ふのが本書の主眼である。心理的觀察と客觀的態度とによつて、馬琴風の勸懲小説から飛躍させようとするところにその論旨が存するのであつて、逍遙自身その理論の實作として「當世書生氣質」を世に出した。まさに劇期的の評論書と謂ふことが出来る。

【革新の第一歩を導かれた】明治の小説界は三期に區分しうる。十八年の「小説神髓」以前がその初期であつて、そこには二つの流れが認められる。一は傳統的の小説で

あり、二は新傾向の小説である。前者には江戸時代風の戯作者の最後の人として假名垣魯文があつた。西洋道中「膝栗毛」「安愚樂鍋」「胡瓜遣」等はその代表的作品である。何れも皮相的遊戯的なもので世態世相を滑稽化し揶揄したに止り、戯作たるを免れなかつた。後者に於ては政治小説と翻譯小説とがその著しいものである。即ち自由民権の思想を小説の形を借りて表現した「經國美談」「佳人の奇遇」等は政治小説と謂ふべく、又翻譯小説としては「月世界旅行・海底旅行」等の科學小説、及びリットン卿の作品の翻譯である「擊思談」「慨世士傳」等の歴史小説がその代表的のものである。これらの初期の小説界はやがて小説神髓の所論に導かれて革新されて行つたのである。

【世態人情】 セタイニンジャウ 世の中の状態と一般の人のもつてゐる心のこと。それをあるが儘に模寫するのは、世相、廣く言へば人生を如實にうつし、人の心理的描寫をなすこと。逍遙は同書執筆の動機をのべて、江戸時代、とくに馬琴の勤懲主義に慍らず、西洋流の寫實的模擬小説こそ小説の本領であることを明らかにしようとするのだと言つてゐる。故に殊更に考へられた善玉・悪玉等は人情を離れ世態に即さないものとしてこれを排斥し、何處迄も理智的考察と客觀的寫實こそ小説の旨とす

べきものであるとしてゐる。

【最も立派に示し得たのは】 前述の通り、逍遙は小説神髓に示した所論の實行として自ら「當世書生氣質」を十八年から十九年に亘つて發表したのである。然しこれは多分に戯作的臭味の殘存してゐるもので、眞の意味の寫實小説と言ふことは出来ない。

【二葉亭四迷】 前出。

【浮雲】 ウキグモ 明治二十年に第一編が出で、二十二年の第三篇を以て完結した。第一篇の表紙には「春のやおぼろ」(逍遙の名)とあるが、それは發賣上からの考慮である。當時四迷は二十四歳であるが、露西亞文學就中ツルゲネーフの影響によつて、寫實と心理描寫とを根本態度となし、その表現は所謂「言文一致」を以てしたもので内容形式共に近代小説の嚆矢であり、而も近代文藝の相當高い水準に迄到達しえたものである。然し當時の人は未だ此の作品の優秀さを認めうる迄に至つて居らず、ために硯友社がしばらく勢力をうる状態となつたことは惜しむべきことである。

【尾崎紅葉】 ヲザキヨウエフ 小説家。本名は徳太郎。慶應三年江戸に生まれ、明治三十六年東京で病歿。享年三十七。彼は幼にして聰明俊敏を以て謳はれ、殊に文才が豊かであつた。十六年大學豫備門に入り、三十年帝大法

科に入學したが一年で文科に轉じ、更に一年して退いた。文學的活動はその豫備門時代から始まり石橋思案等とはかつて文友會を興し、緑山と號して漢詩なども作つた。やがて山田美妙と共に十八年硯友社を創立し漸次川上眉山・巖谷小波・江見水蔭・廣津柳浪・大橋乙羽等が加盟した。同年「我樂多文庫」を廻覽雜誌として創刊。彼は同誌に自ら創造した雅俗折衷の文體をもつて諸作を發表して次第に文名を馳せてゐたが、二十二年最初の單行本「色懺悔」を出して出世作となり、一躍文壇に覇を稱ふるに至つた。この年大學を退いて讀賣新聞に入り、その後十餘年に亘つて幾多の名篇巨作を寄せて同紙を飾つた。二十四年の「二人女房」は「都の花」に連載されたものであるが、これを以て完全に他の儕輩を壓倒するに至つた。尙此の作品は美妙の「です」調、二葉亭の「だ」調に對し、「である」體を新に興した點に於ても注意せられる。又「伽羅枕」は彼の深く傾倒してゐた西鶴模倣の名文と取材とで衆目を驚かしたものである。二十五年の「多情多恨」は彼の一代の傑作とも謂ふべきものである。畢生の大作「金色夜叉」は遂にその完成を見ずして終つたのは惜しむべき事である。

臨終に際して七度生まれ更つて文章のために盡くさんと誓つた程、その文章には眞に彫心鏤骨の苦を續け、

獨創的な雅俗折衷體、新興の言文一致體、西鶴風の名文等みな當時の人目を驚かしたもので、一代の文章家と仰がれた。彼は常識圓滿なる人格の持主である上に藝術家的天分にめぐまれ、家庭的にも幸福であつて、安んじて文筆の道に精進し、文藝の發展を招來するとともに、文學並びに文學者の社會的地位向上を來す結果ともなつた功績は大きい。その門人も多く、泉鏡花・小栗風葉・柳川春葉・徳田秋聲の如き紅葉門下の四天王と稱された。彼は日本の文學者としては社會的に異數な尊敬を拂はれ、人氣作家として夥しい讀者を有してゐて、その會葬者は無慮二千人の多きに達したと言はれる。

【山田美妙】 前課既出。

【硯友社】 ケンイウシヤ 文學團體。大學豫備門にあつた紅葉は同窓の丸岡九華・石橋思案等と會して「文友會」を興したが、更に美妙も加はつて、十八年二月新に文學修習の目的を以て「硯友社」を組織し、同年五月「我樂多文庫」を出した。これを第九號以下は印刷に附して頒ち、二十一年五月弘く販賣する事とした。それは第十七冊を第一號としたもので、この後長く文壇に硯友社の存在と活動とを認められるに至つたのである。美妙は間もなく「都の花」に移つたので、その主宰統領たるものは終始紅葉であると言つてよい。新我樂多文庫は第十七號

から「文庫」と改名、二十二年第二十七號を以て廢刊した。故に機關紙による活躍は前後五ヶ年に過ぎない。但しその同人等の文學運動はその後も益々活潑となつて、文壇に硯友社時代として十年の長きに亘つて勢を振つたのである。

當時流行した政治小説・翻譯小説等蕪雜生硬の功利的・素材的内容主義的文學に對し、藝術至上主義の態度で正統文學の興隆を期する所にその特色があつた。その當初に於ては稍々戲作的であつた所に世の非難を免れえないが、江戸文學が既に亡んで新文學の未だ起らない過渡期としては止むを得ないことである。近代思潮に浴した新文學と評する事は出来ないが、彼等は文壇の新機運である寫實主義の提唱をも取入れ、文章の技巧を磨いて、よく人情世態を描き、純粹に日本的な思想・感情の表現に成功した。

【幸田露伴】 カウダロハン 小説家。本名は成行（シゲユキ）蝸牛庵はその別號である。彼は文學趣味と文筆の才能にめぐまれた父を持ち、早くから程朱・老莊・佛書に親しみ、支那小説、江戸時代の戲作稗史類をも博く涉獵した。始め電信技術の學校を卒業し、十七年同技手として北海道に赴任した。二十年官をすてて上京、二十二年「露團々」を始めて發表。忽ち世評を集めたが、同年傑作

「風流佛」を出すに及んで美妙・紅葉と並んで第一流の作家と目されるに至つた。この冬紅葉と共に讀賣新聞に入社。この後二十九年頃迄續々と著作を發表、紅露時代、或は露伴一葉時代と呼稱される時代を現出した。二十七年の大患を機として沈滞靜修の時代に入つたが、三十六年大作「天うつ浪」を發表、四十一年京大講師となり、翌年歸京。四十四年文學博士を授けられた。その後は小説の筆を斷ち、史傳・隨筆・考證・修養等の文章を草してゐる。

紅葉と並んで明治文壇の双璧であるとは世の定論であつて、その理想主義的小説はまさに古今獨歩の概がある。彼は好んで剛健不屈、勁烈な意氣をもつ男性を描いて、其の文章は雄勁莊重、文中に溢れる氣骨と識見とは強大高邁である。彼は詩人的小説家であり哲學的思索文學者である。尙小説以外に於ける功績としては隨筆・論文・史傳文學を始め戯曲（史劇）に又俳書評註等忘るべからざるものが存する。

【樋口一葉】 ヒグチイチエフ 小説家。本名は夏子。明治五年東京市に生まれ、二十九年同市で病歿、享年二十五。士族氣質の教育を受けながらも、小説を嗜讀し、歌文に親しんだ。かくて十九年中島歌子の歌塾に入り、當時の閨秀作家田邊花園と並んで中島門下の才媛と稱せられ

た。父の死後文學を以て生計を立てようとし、半井桃水に就いて小説の添削を受けたりした。二十八年「ゆく雲」を發表した頃から文名あがり、二十九年「たけくらべ」を出すや紅葉・露伴の大家をも凌ぐ程の名聲を博するに至つた。作家生活は僅かに四ヶ年位であり、しかも二十五の若年を以て世を終つたのであるが、明治女流作家隨一の文名を残したことは驚歎に値する。「たけくらべ」の外、「にぎりえ」「十三夜」等はその傑作である。

【雄渾な筆致を以て……描いて】 彼の傑作「五重塔」などはその最も著しい代表作である。次課參看。

【一葉は……】 一葉の取扱つた世界は薄幸な若い女の哀愁の世界、無自覺な儘に舊習に捲き込まれてゆく明治型の女性の暗涙を含んだ成行がその大部分である。そしてこれらは自身の經驗を土臺にしたものであり、作中の女性はその化身でもある。且つその思想は舊套的なあきらめの境地に止つてゐた。但しその範圍内に於ては深く見、細かく描いてゐる所がすぐれてゐるのである。

又彼女の文章は一種の雅俗折衷體であつて、彼女独自の名調子を成してゐるものであつた。

【諦視】 テイシ ヨクみること、みまもること。「諦」はあきらか、つまびらか、まこと等の意。

【森鷗外】 既出。ここは「舞姫」「うたかたの記」「文づか

ひ」「於母影」等のこと。

【泉鏡花】 イヅミキヤウクワ 小説家。本名は鏡太郎。明治六年金澤市に生まれた。小學校を終へてから、米人經營の英和學校で英語を修め又英數學の塾にも通つた。二十二年紅葉の「色懺悔」に大いに動かされて小説の耽讀試作に入り、翌年上京、一ヶ年の放浪生活を経て、翌年紅葉の門に入つた。その後は彼の指導の下に勉學し、二十七年「豫備兵」「義血俠血」を發表し共に好評を得た。二十八年博文館に入り、日用百科全書の編纂に従事。同年の「夜行巡査」「外科室」の兩作は非常な好評で、當時の一流大家を凌ぐと迄激賞され、ここに新進作家としての地歩を確保するに至つた。（これらは即ち觀念小説と呼ばれるものである。）二十九年の「照葉狂言」はロマンチックな佳作であり、三十一年の「辰巳巷談」「通夜物語」等は益々その人氣を集めたものである。三十二年の「湯島詣」は最もよく讀まれ、翌年の「高野聖」は藝術的香氣の高い作として今に至る迄推賞をうけてゐる。三十六年の「風流線」も亦名作である。尙その後引續いて多くの作品を發表した。彼の作風は世の寫實に反して、理想世界の美の追求、情熱世界の創造安住に一貫してゐる點である。

【觀念小説】 クワンネンセウセツ 文學論。明治二十八年

四月發表の泉鏡花作「夜行巡査」に對して當時の評家がかく呼んだのに始まる。その名義は作中にある觀念を具體化し、之を讀者の頭腦に浸潤させようと意圖する小説と言ふ意である。鏡花の「外科室」、或は川上眉山の「うらおもて」「書記官」等も亦その方面の小説と言はれるものである。

【廣津柳浪】 ヒロツリウラウ 小説家。本名は直人（ナホト）。文久元年長崎市に生まれ、昭和三年東京で歿す。享年六十七。彼は父の業をつぐべく外國語學校の獨語科に入り、後大學の醫學部豫備門に進んだが廢學した。二十年始めて小説をかき、二十二年硯友社の同人となる。同年「殘菊」を發表するや、その文名を喧傳されるに至つた。その後諸作を経て二十八年「黒蟬」を出すや、當時の批評家が求めてみた深刻小説の代表作として文壇の讚辭を一身に集めた。次いで「今戸心中」「河内屋」が出るに及んで文名は頂點に達し、紅葉・露伴・一葉に次ぐ作家として賞揚された。その後の「畜生腹」「骨ぬすみ」「紫被布」「二人やもめ」等は有名なものである。明治末年に及んでは筆を絶つた。同門中には中村春雨（吉藏）、永井荷風等がある。なほ和郎はその次男である。

彼の作は深刻小説・悲惨小説と言はれるが如く、好んで陰慘な世界、暗黒面、醜惡な事物を筆にし、又形式に

於ては人物を描くにつとめて對話をもつてした所に特色がある。即ち取材と手法とに於て獨歩の領域を開拓したものと注意すべき人である。

【深刻小説】 シンコクセウセツ 一名悲惨小説とも言はれるもので、觀念小説と同傾向を持ちながら、とくにその悲惨な方面・暗黒面・醜惡な事實等を題材としたものと言ふ。柳浪の「變目傳」「黒蟬」等は其の代表的作品である。

【木下尚江】 キノシタナホエ 小説家。明治二年信州松本町に生まれた。その先祖は大阪没落の士木下某であることを知つて、幼少の時から徳川の呪詛者、明治革命の謳歌者であつた。土地の小學校教育を欺瞞的なものと考へ、それによつて偽善と虚偽とを呪ふ心を生じ、生家が寺に近かつたので死の神祕を早く知り、又當時の民権家の演説には年少ながら血を湧かしたと言ふ。以てその人となりを知るべきである。十九年上京、政治家にならうとして東京專門學校に於て英法を學び、二十一年卒業して歸郷、信府日報の主筆となり、後辯護士となる。普選運動に着手。奇禍によつて入獄、一年半の未決監として多大の教訓をうけた。三十二年東京毎日新聞に入り記者として専ら社會惡と戦つた。星亨攻撃、廢娼問題、足尾銅毒問題に特に筆を振つた。次第に民主主義的から社會主義

的思想になり、三十四年社會黨宣言を機としてその運動の第一步をふみ出し、三十六年幸徳秋水・堺枯川等を助けて平民社を創め、平民新聞を發行し、我が國社會主義運動史に一時期を劃した。日露の役には前記の兩人等と非戰論を唱へ、言論に文章に大いに努めた。その後基督教的共產主義を標榜したこともあつたが、一切の世間的な運動から退き信仰生活に入るに至つた。

【社會小説】 シヤクワイセウセツ 在來の小説が戀愛・煩悶・家庭・狹斜等餘りに狭い範圍に局限されてゐるのに慊らず、もつと眼界をひろくして、社會を見、社會にふれ、その風潮・思想と關聯することを意圖する小説を言ふ。

我が國では日清戰爭以後に唱へられたもので、内田不知庵・高山樗牛の所論を経て、作品としては不知庵の「暮の二十八日」を始めその他の數篇、小栗風葉・後藤宙外・蘆花のものが數へられてゐる。

木下尚江の小説としては「良人の自白」を以てその方面の代表的大作とすることが出来る。不知庵に始まり、蘆花に興つた社會主義的小説は尚江に至つて大成したものと見ることが出来る。

【實證主義の哲學】 實證論 (Positivism)、實驗論、積極論とも言ふ。事實を基礎として現實を解釋する哲學のこと。

即ち哲學は經驗的事實を以て其の研究の唯一の出發點となすべく、事實即ち現象・感覺によつて付與せられた）及び其の合法的關係を以て唯一の對象となすべしとの見解をいひ、かの思辯を主とする哲學が實驗科學と獨立して其の世界觀を立てんとするに反し、哲學の問題は實驗科學の結果を全體に結合するに在るとするものである。實證論的傾向は、特に十九世紀にイギリス・ドイツ・フランスに於て殆ど同時に起り、現今思想界に重大な勢力を有するものである。其の創始者で且つ代表者と見るべきは、フランス人コントである。その他リットレ・ミル・スペンサー・フォイエルバハ・ラース・リール・ヂーリング等は其の派の代表的な人々である。

【島村抱月】 シマムラハウゲツ 評論家・新劇運動家。舊姓は佐山、本名は瀧太郎。明治四年島根縣に生まれ、大正七年東京にて歿す。享年四十八。二十七年東京專門學校（早大の前身）卒業後、直ちに第一期「早稻田文學」の記者となる。その後或は讀賣新聞に入り、或は三省堂に入り、又母校に教鞭を取つてゐたが、三十五年同校の留學生として英獨に赴いた。三十八年歸朝、母校に於て美學・英文學・文學概論等を講じ、又東日に關係して三十九年文藝協會の幹部の一人となり、その機關として再興した「早稻田文學」を主宰し、爾來文學藝術の諸問

題を同紙に於て論じ、大いに自然主義運動のために努めた。大正二年藝術座を起して新劇運動のため盡瘁した。抱月が我が國自然主義文學の理論家として活躍したのは、歸朝以後、藝術座を起すまでの間であるが、就中「文藝上の自然主義」「自然主義の價值」等はその雄なる論文であつて、ここに於て自然主義の體系化組織化が完成されたと謂ふべきである。今はその他の論文をも併せて「近代文藝の研究」の中に收められてゐる。

【徳田秋聲】 トクダシウセイ 小説家。本名は末雄。明治四年金澤市に生まれ、金澤中學・四高の豫科などに學んだが、學校を退き文學を以て立とうと志した。その後上京して紅葉の門に入り創作に専念した。二十九年始めて「藪柑子」を發表。三十三年の「雲のゆくへ」は好評を博して文名漸くあらはれ、鏡花・風葉・春葉と共に紅葉門下の四天王と認められる様になつた。その後多數の作品を發表したが、代表作とも言ふべきものは、雲のゆくへ・出産(短篇)・新世帯・足迹・微・爛・あらくれ等であり、就中、新世帯・微・爛・あらくれ等は自然主義的作品の最高水準を示すものである。彼はもと紅葉門下から出て、しかも自然主義文學を確立完成した第一人者であることは興味あることである。

【正宗白鳥】 マサムネハクテウ 小説家。本名は忠夫。明

ひ・號外・窮死・竹の木戸等。

彼の代表作は詩としては「山林に自由存す」「秋の入日」であり、小説としては「忘れえぬ人々」「牛肉と馬鈴薯」「號外」「窮死」等である。

【田山花袋】 タヤマクラワタイ 小説家。本名は録彌。明治四年群馬縣館林町外に生まれ、昭和五年東京で病歿、享年六十。彼の父は西南の役に於て戦死し、したがつてその少青年期は苦難流離の日をおくり、正規の學校教育は受けなかつた。殆ど自學自習で、ヨーロッパ文學、とくにフランス自然派の作家、フロベール・ゾラ・モウパッサン等を研究して多大の影響をうけ、自然主義文學作家として又理論家として、逍遙・二葉亭以後の明治文學に一つの革命をもたらした第一人者である。三十五年「重右衛門の最後」を出す迄は單なる感傷小説家としか思はれてゐなかつたが、愈々新風の作家として時人の眼を驚かし、四十年の「蒲團」に至つては花袋にとつても亦全文壇にとつても一つの劃期的作品であつて、これを導火線として自然主義運動は盛んになつたのである。その後彼は旺盛な精力を傾けて、その主筆である「文章世界」を中心にして自然主義鼓吹の論陣を張り、且つ長短無數の小説を發表し、新興文學先驅者の面目を遺憾なく發揮した。

治十二年岡山縣に生まれ、東京專門學校を卒業した。三十七年處女作を發表以來、三十九年自然主義文學運動の盛んなのに乗じて諸作を出し、四十年の「塵埃」によい世評をえて、新進作家として目される様になつた。四一年の「何處へ」以下「玉突屋」「五月蟻」「世間並」「二家族」等の作品を出すに及んで自然主義作家の雄をもつて稱せられ、四十三年の「徒勞」「微光」に於ては益々世評を高めた。かくて數篇の長篇小説と百に餘る短篇及び數種の脚本を世に出してゐる。

【島崎藤村】 既出。その自然主義的作品としての代表作は「破戒」(三十九年)、「春」(四十一年)、「家」(四十三年)等である。

【國木田獨步】 クニキダドツボ 詩人・小説家。本名は哲夫。明治四年下總國銚子港の母の生家に生まれ、同四一年相州茅ヶ崎病院にて病歿、享年三十八。彼は幼少の時から幾度か居を轉じ、種々な事に従つた。その創作年代を三期に分けて見るに

- 一、抒情時代(二十七年—三十四年) 獨歩吟・忘れえぬ人々・武藏野等。
- 二、理智的浪漫的な自然主義時代(三十四年—三十七年) 牛肉と馬鈴薯・惡魔・運命論者・酒中日記等。
- 三、客觀的社會的時代(三十七年—四十一年) 泣き笑

自然主義的代表作としては「蒲團」の外、「生」「妻」「縁」等がある。

【餘裕派】 ヨユウハ 文學流派の名。生活派などと對蹠的に用ひられる稱呼で、反自然主義的な低徊趣味的な文學派の意味である。漱石が虚子の小説集「鶏頭」の序文中で餘裕のある文學、餘裕のない文學の語を用ひたのに始まる。この派の文學は子規に始まり虚子を経て漱石に至つて完成したものと云ふことが出来る。一體自然主義文學は、あるがままの眼前の人生を絶對の人生と見て、そこに理想を見出し批判や解釋を與へようとはしないのであるから、そこに別派の起る因由がある。ことに我が國の當時の自然主義文學の描く世界は人間の醜惡・陰慘な方面が大部分であつたから、非自然主義的の文學が誕生すべき事情があるのである。漱石は寫生文・俳句・禪・漢文學等と共に英文學の趣味をも加へ、餘裕ある傍觀的態度で人生を觀察し批判した。

【俳諧的】 漱石はその教養を寫生文や俳句からうけ、禪や漢詩などの、謂はば東洋的趣味を基本としてゐたのであつて、其の人生觀は與へられたある社會・ある家庭に於て出来るだけの趣味と娛樂とを健全に享樂すると言ふにあつた。故に自然主義の文學が恰も科學者が眞を追求すると同様な態度とは甚しく異なつて、それを餘裕ある態

度で傍觀し、その中にゆとりある趣味を發見しようとするのである。即ち俳諧的である所以である。

【高踏的】カウタフテキ 高踏的・高踏派・高踏主義等は何れも原語 Des Parnassiens. から出發してゐる。即ちもとはバルナッス山上にすむ人々、美の神々、詩人の群の意であるが、やがてとくに十九世紀の中頃以後、フランスに於てリコント・ドウ・リイルを首領とした一派の詩人を指す名稱となり、それを上田敏が始めて高踏派と譯したのに始まるのである。それ等の詩人は一面俗悪なもの、卑近なものを斥けて、ひたすら美的印象に訴へることを眼ざしたので、我が國ではもつぱら、超俗的、貴族的、氣取屋、貴族趣味などの意に高踏と言ふ語を用ひる様になつた。

漱石の作品が高踏的であるべきことは、かれの文學觀（小説觀）をよめば直ちに肯づけるであらう。本卷一七。「詩境」の初から百三十五頁あたり迄に、その考は明確に述べられてゐるので参照されたい。

【夏目漱石】ナツメソウセキ 小説家・俳人。本名は金之助。慶應三年江戸に生まれ、大正五年東京で歿した。享年五十。幼少の時養子となつたが復籍。一ツ橋中學校（後の府立一中）・二松學舎・共立學舎等に學び、大學豫備門を経て二十六年帝大英文科卒業。豫備門在學中早稻田の

専門學校に教鞭をとつたことがある。卒業後は二十七年東京高師、二十八年松山中學、二十九年第五高等學校に奉職した。三十三年英國へ留學。三十六年歸朝、一高教授・帝大講師となる。四十年總べての教職を辭して東京朝日に入社、以後續々と同紙のために述作を發表、一躍文名を博し、逝去迄これを續けた。尤も彼は俳人としては二十七八年頃には交友子規の影響で碧梧桐・虚子などと共にその派の錚々たる人であつた。彼はその半生を殆ど病患と戦つた様なものであるが、二月月間の滿鮮旅行を始め、會遊の地も亦少くない。後進には寺田寅彦・松根東洋城・森田草平・鈴木三重吉・阿部次郎・安倍能成・野上豊一郎・小宮豊隆等を始め芥川・久米・松岡・菊池等迄周圍に集つた人は甚だ多い。作品については次項参照。

【彼は次第に深く人生を描き】漱石の作品は始めは著しく浪漫的な色彩に富んでゐた。「倫敦塔」「草枕」等は其の代表的なものである。然るに「それから」「門」「三四郎」以後になると浪漫主義的色調をすて、ひたすら心理解剖を以て内へ内へと掘りさけて行つたのである。それは「彼岸過迄」「行人」「心」「道草」「明暗」（これは未完のまま死去）等と一作から一作へと深く掘りさげられ、遂に人間の性格に根づよく培はれてゐる自我主義の發見になつたのである。

たのである。尙前記の外「吾輩は猫である」「坊ちゃん」「虞美人草」等皆初期の作品であるが夫々傑作と目されてゐる。

【唯美主義】ユキビシユギ 藝術論。又耽美主義とも謂はれる。美を以て最高の價値乃至人生唯一の目的であるとす態度を謂ひ、従つて其の生活態度は享樂的な官能的な生活となる。その主張の實現者としてはオスカア・ワイルド等は名高く、我が國では谷崎潤一郎の初期の作品中に之を見出すことが出来る。即ち「刺青」「少年」「悪魔」の様な作品がそれであつて、病的な官能美を生々しく描寫したものである。

【人道主義】ジンドウシユギ ヒューマニタリアニズム。人類の理想をとき、人類の幸福を増すことが、道徳の最高の目的であるとする説で、人格の平等を認め、同情・慈恵・献身の様な愛他的行爲を以て本義とするものを言ふ。古くは十五六世紀の文藝復興にも遡りうるが、それは人文主義（ヒューマニズム）と呼ばれたものであつた。この主義が眞に文藝思潮として明かになつたのは十九世紀英國の文壇に於てである。當時功利主義思想全盛の後をうけて、カーライルやラスキンが之を唱へ、デイキンズ・ギッソングの作品となり、更にロシアに影響してトルストイ・ドストエフスキー等によつて完成されたもの

我が國に於ては自然主義と共に大きな影響を與へた文藝思潮で、早く「戦争と平和」の翻譯があり二葉亭・嵯峨舎・蘆花・花袋等の事もあるが、とくに明治四十三年に創刊された「白樺」に於てその旗色は鮮明となつた。その高唱強調する點については本文に説かれてゐる通りである。

【新現實主義】シンゲンジツシユギ 文學論。我が明治文壇に於てはひとしく現實主義の文學であるものを、始は寫實主義とよび、日露戦争以後は自然主義と呼んでゐた。それ等に對して歐洲大戰以後にはあらはれて來たものを新現實主義と呼ぶのである。これは直接には自然主義文學に對する反動であつて、即ち同文學は現實尊重の思想が重大な役割を演じてはゐるが、しかし謂はば個人主義的の文學であつて、個人と個人との有機的關聯については之を取扱はうとはしなかつた。そこでかかる現實は眞の現實ではないとして、從來の現實主義に更に社會的意義を與へて主張する様になつた。これが即ち新現實主義である。故に現實の一切の事象の中に於て經濟的・社會的・倫理的意義を中心としようとするところに新の意味が存するのである。

尙菊池寛を中心とする所謂新技巧派の作家達を新現實

主義の名で呼ぶ場合もある。

【文學より斥けられた美の世界を……】 自然主義文學は謂はば科學者の實驗の様な態度で人生の眞を描き出さうとしたのであつて、美と言ふよりは人生の醜惡なもの、陰慘なもの、をむしろ好んで描く風があつた。然るに耽美主義は人生の中に特殊な感覺的美を探求し創造するものであつて、自然主義の眞に對する美の描寫に主眼が存するからである。人生を直視しない點では餘裕派に近似してゐるが、彼がより多く知的に見たのに對し、これは主として感覺美的に人生を見ようとするところにその特色があるのである。

【谷崎潤一郎】 タニザキジュンイチラウ 小説家・劇作家。明治十九年東京市に生まれ、府立一中・一高を経て帝國文科に進んだが四十二年退學した。同年同好の士と「新思潮」を創刊し、「刺青」「麒麟」「信正」「少年」(これは四十三年)を發表するや忽ちにして文壇の視聽を集め、異色ある新進作家として世に出た。時恰も新浪漫主義擡頭の時機に際會し、その潮に乗じて大正五六年頃迄續々と小説を發表し、又戯曲を作つた。「愛すればこそ」(大正十年)を魁に十三年頃迄は彼の戯曲時代であつて、大正末期の戯曲全盛時代を招來するについて與つて力があつた。尙昭和に入つてからは四年に「夢喰ふ虫」六年に

「盲目物語」の力作を發表した。

彼はロマンチストであり、又徹底的なデカダンで、洗煉された都會人的趣味と、近代人的類廢氣分を濃厚に所出し、病的に靡爛した官能美、強烈異常な感覺美を描出する耽美派作家として、我々國文人中の特異な存在である。彼の作が惡魔主義・神祕主義等と稱せられるのも亦一にそのためである。

【その代表者である】 谷崎潤一郎以外では永井荷風をあげうる位で、元來耽美派の作家はごく稀である。荷風の作品としては「歡樂」「冷笑」等がそれである。

【武者小路實篤】 ムシヤノコウヂサネツ 小説家・劇作家。明治十八年東京生。父は子爵實世で兄は公共、歌人實陰はその祖父である。學習院を経て三十九年帝大の社會學科に入学したが、翌年退學した。四十三年志賀直哉・木下利玄・有島兄弟等と共に「白樺」を創刊、その後大正十二年に廢刊される迄所謂白樺派の中心として大いに活躍した。彼は深くトルストイに傾倒してゐたが、漸次解放されて独自の個性主義に轉換し、大正三・四・五年頃の「その妹」「彼が三十の時」「ある青年の夢」等を發表した頃には文壇一方の重鎮として注目されるに至つた。大正七年に新しい村の事業を志して同志と共に日向に移り住んだ。彼は早くから演劇・美術の興隆に志し、西洋美

術の紹介・展覽會の開催、演劇社の創立等に盡力した。

彼は自然主義の後をうけて、新しい理想主義に炬火を點じた人として、又特異な文章家として注意せられる。小説としては「盲目出度き人」「世間知らず」等に於て其の作風を見ることが出来る。

【武者小路……その代表者である】 彼以外にあつては有島武郎・志賀直哉・里見弴・長與善郎等がそれである。しかもそれらの人々はみな學習院關係の者達である。

【芥川龍之介】 アクタガハリユウノスケ 小説家。明治二十五年東京に生まれ、昭和二年同地で自殺した。享年三十六。舊姓は新原、後に母方の伯父の養子となり芥川を名のつたのである。府立三中・一高を経て、東大英文科に入學。久米・菊池・松岡・成瀬等と第三次「新思潮」を發刊し、同誌に「羅生門」をかいて一部の注目をひいた。後漱石の門に入り多くの影響をうけた。大正五年出世作「鼻」を發表し、漱石に激賞され、文壇にも認められる様になつた。その年大學卒業、横須賀海軍機關學校教官となる。引續き諸作を發表して中堅作家の地歩を確保し、八年教職を退いて東日の客員となり、以後専ら作家生活を送つた。晩年極度の神經衰弱に罹り遂に自殺した。

彼は性俊敏にして驚くべき讀書力を有し、當代稀に見

る學殖を具へてゐた。その題材の新奇と着想の奇抜と、又巧緻洗煉の手法による明徹清澄の持味とは當代獨歩の觀があり、一代の鬼才をもつて目された。彼は漱石・鷗外の流を汲み、又アナトール・フランスの影響をも受けて、小説以外俳句・隨筆をもよくし、その煥發する才華は眞に驚嘆すべきものがある。

【菊池寛】 キクチヒロシ 小説家・劇作家。明治二十一年香川縣高松市に生まれた。家はもと藩儒であつた。幼少の時から文藝をこのみ、高松中學を経て、四十三年東京高師にすすんだが陰名され、後、一高に入り大正二年退學。京大の上田敏に私淑して同校英文科選科に入る。翌年本科に移り、アイランド文學を究め大正五年卒業。時事新報に入つた。大學在學中から創作に志し、第三次、第四次の「新思潮」を在京の友人等と起し、同誌上に多く戯曲を發表したがあまりみとめられなかつた。後小説に轉じて諸作を發表し、奇警な題材と新味ある端的な作風で次第に識者の注意を惹き、同七年「無名作家の日記」を公けにして漸く文壇的に認められ、同年代表作「忠直卿行狀記」を出すや最も好評を博し新進作家としての地位を確立するに至つた。その後大阪毎日に轉じ、大正の中頃迄流行作家の一人として益々一流の特色を濃くした短篇を發表し、文壇の中堅作家として重きをなすに至つ

た。九年には「眞珠夫人」を第一作として長篇をも試み、或は雜誌或は新聞に連載して一般社會の大歡迎をうけ、又同年舊作「父歸る」が上演されるや絶大の賞讃を博し、一躍劇作家としても有名になつた。かくて大正の末年に入つては優に大家の貫祿を示し、或は小説家協會を起し、或は文藝春秋（大正十二年）を創刊し、文藝の向上と社會化に努めるところが少くない。昭和に入つてからは短篇から遠ざかり、専ら通俗的連載小説を執筆してゐるがそれらは一作毎に映畫化されてその方面でも有名になつた。文壇の大御所と言ふ稱呼が示す通り社會的に著名な點では蓋し明治大正を通じての第一人者であらう。

【……菊池寛等はその代表者である】 芥川・菊池の外に「新思潮」關係としての久米正雄・豊島與志雄・山本有三等、及び佐藤春夫・藤森成吉・廣津和郎・室生犀生・葛西善藏、更に白樺派の里見・志賀も亦此の流派の色彩をもつてゐる。

【演劇改良會】 エンゲキカイリヤウクワイ 明治十九年八月末松謙澄（青萍）が中心となり朝野の名士を集めて設立したもので、彼は十月三日一橋第一高等學校講堂で大演説をした。それを後に一書にしたのが即ち「演劇改良意見」である。此の要旨は劇場の改築（舞臺の改正、花道廢止等）、興行法、道具立の改良、脚本の改善、女形の

廢止等であつた。しかし大規模の下に計劃されたこの改良運動も、演劇とくに日本演劇の特殊相をしない無理な論であつたために、直接には何等の結果を生むことなく自然消滅した。然し二十一年の演劇矯風會などと共に革新の氣風を興した功は認めべきである。

【従来の歌舞伎劇】 明治の前期に於ける戯曲は清新なものゝの發達は見られなかつた。ひとり黙阿彌が新富座附作者として傳統的歌舞伎劇のために才筆を振つてゐるだけであつた。その一貫する精神は因果應報の理をらしめ、勸善懲惡の資に供しようとするのであつたから、自然荒唐無稽なものをも演じてゐたのである。

【荒唐無稽】 クワウタウムケイ 根據のない話。でたらめ。【史實によつて改正し】 演劇革新の第一歩は先づ史劇に向つて始められた。古くは明治七年の頃の活歴物にその端緒があるが、矯風會設立の頃には寫實的史劇の名をもつて、依田學海・福地櫻痴等が筆を執つたのである。然し餘りに史實の再現に囚はれすぎて劇的效果の乏しい憾が多かつたことは本文に説く通りである。

【明治二十六年に至り、坪内逍遙は……】 逍遙は明治二十六年十月雜誌「早稻田文學」に「夢幻劇論」と題する一論文を公にした。これは恰も小説界に於ける「小説神髓」に相當する論説であつて、史劇の變遷、本質を論じ、更

に本來の夢幻劇をそのまま存続させると共に、歐米の演劇に於ける様な性格表現を主とする新史劇の出現を要望したものである。その主張の下に彼自ら試みたものが即ち新史劇「桐一葉」（明治二十七年刊）である。

尙逍遙は新樂劇論（三十七年）を發表して、舞踊劇に對する新意見を公にし、自ら新曲浦島・新曲赫映姫を出し、その方面での開拓者であつた。

【桐一葉】 キリヒトハ 六幕十五場の史劇。逍遙が明治二十七年十一月から「早稻田文學」に連載したもので、初演は三十七年三月東京座に於てなされた。これは片桐且元を主人公として、秀頼を守護しようとする彼の苦衷を中心とし、之に配するに且元の娘蜻蛉と木村重成との戀を以てし、且元・重成・淀君等の行動性格を描寫したものである。逍遙が自己の「夢幻劇論」の所説を自ら試みたものであつて、彼の最初の戯曲で、しかも最も著名なものである。

【沓手鳥孤城落月】 ホトトギスコジヤウノラクゲツ 三幕の史劇。逍遙が明治三十年九月に發表したもので、三十八年五月、始めて大阪角座に於て上演された。

これは先の「桐一葉」と二部作をなすものである。即ち前者が且元の大坂城退去までしか取扱つてゐなかつたのを受けて、これは大坂城の陥落と且元の最後とを取扱

つた悲劇である。獨立の戯曲としては「桐一葉」ほどの統一性を有して居ないが、逍遙の作中、最も舞臺効果にとみ、實演に適するものとの定評もあつて、三都を通じて十數回の上演に及び、中村歌右衛門の淀君は適役として劃期的演出を見せた點で名高い。

尙逍遙は更に鎌倉三代の史實に取材して「牧の方」（二十九年）、「名残の星月夜」（大正六年）、「義時の最後」（大正七年）等の名作を出しその史劇を完成してゐる。

【明治三十七年頃に上演され】 前述の通り前者は三十七年、後者は三十八年の初演であつて、述作からは約十年後に當つてゐる。「上演」（ジャウエン）は脚本を舞臺にのぼせて公演すること。

【日蓮上人辻説法】 ニチレンシヤウニンツジセツポフ 一幕の戯曲。森鷗外作。明治三十七年三月發表で、同年四月歌舞伎座初演。進士太郎善春は辻説法の噂高い日蓮を賣僧と罵つたために戀中の「妙」との間をへだてられてしまった。妙の父比企能木は大の日蓮信者であつたからだ。日蓮がふりくる雪と瓦石の雨との中に説法するところに來合せた善春は之に信服した。やがてその戀も復活されると言ふのがその内容である。當時この作ほど歌舞伎の精神や手法を否定したものはないと言はれてゐる。それだけ新史劇の先驅であるわけである。鷗外の作中で

は最も多く上演された脚本である。

【翻譯劇】 ホンヤクゲキ 新史劇の流行につれて盛行したものは新派劇と翻譯劇とである。そして後者に於ては先づ逍遙は明治十六年該撒自由太刀餘波銳鋒と題して沙翁のシーザーを譯し、更にゼニスの商人(三十九年)・ハムレット(四十年)等多くの翻譯劇を出した。殊にこの自然主義以後の翻譯劇に最も活躍したのは鴨外であつた。彼は二十二年の頃カルデロンの作を譯して「調商突洋絃一曲」を出し、つづいてレッシング作のエミリア・ガロツチーを譯して「折薔薇」と題して出してゐる。之に刺激されて高安月郊はイブセン劇、社會の敵(二十六年)、人形の家(二十六年)、闇と光(三十七年)等を紹介した。かくて翻譯劇は中期から後期に亘つて大に行はれ、後期の近代劇盛行の原因をなしたのである。

【文藝協會】 ブンゲイケクワイ 演劇團體。明治三十九年一月逍遙を中心として創始されたもので、もと抱月の歸朝を機として、早大文科の刷新と一般文藝界の革新とがその目的であつて、再刊の「早稻田文學」はその機關誌であつた。然るにその發會式の餘興に逍遙の舊作を演じ、且つ當時の逍遙の状態などから自然後には演劇を中心とする様になつたのである。三十九年・四十年の第一・二回同大會にはゼニスの商人、ハムレット等を夫々演じ

てゐる。四十二年には逍遙の邸内に研究所を置いたりしたが、更に四十四年には組織を改めて純然なる演劇團體とし、自らその會長として新劇運動の第一線に立つたのである。然し演劇方針の新舊衝突から抱月の脱退となり、松井須磨子の除名等もあつて、新組織後二年を以て解散した。其の間公私演約十四。尙イブセンの「人形の家」を私演したのは四十四年九月であつた。

【沙翁劇】 サウウゲキ 沙翁即ちシエクスピヤ作の劇。こは勿論その翻譯であるが、多くは上述の通り逍遙によつてなされ、とくに名高いのは「ゼニスの商人」「ハムレット」等である。

【イブセン】 (Henrik Ibsen) ノルウエーの劇詩人。一八二八年生まれ、一九〇六年歿。彼は社會劇を以て近代に著はる。スキーンに生まれ醫を志して、二十三歳首都クリスチアニアの大學に入る。この時早く悲劇を出し、又雑誌の發刊をなした。翌年ベルゲンの一劇場に入り、六年間その主幹であつたが一八五七年クリスチアニアの劇場に轉じ「ヘルゲラントの海豪」「僭望者」「戀の喜劇」等を出して名聲漸くあらはれた。一八六四年飄然イタリヤに遊び、次いでドイツに入り、ローマ・ドレスデン・ミュンヘンの間に留ること二十七年、二劇詩を以て故國の文壇を動かし、一八六九年以來散文劇に轉じ、多くの

社會劇を出し、一八九一年一代の名聲を荷つて故國に歸り、平和と崇敬との中に晩年を終つた。彼は實に歐洲近代の社會に對する弾劾者であつて、其の作は常に現社會の問題を捉へて、因襲と偽善とに向つて戦つたものであつた。彼は又近世劇壇の革命家で、其の散文劇は近代社會劇の新形式として全歐の文壇を風靡し、劇文學に新生命を與へた。一代の作はその全集に收められてゐる。我が國に於ては「人形の家」の著者としてとくに名高い。

【北歐】 イスラント・デンマルク・ノルウエー及びスウェーデンの諸國を包括した古スカンデナヴィア地方の名。

【藝術座】 ゲイジュツザ 大正二年逍遙の文藝協會解散の前後、新劇第二次の運動として、演劇による直接の思想的刺激を求めた早大派小壯文學者によつて組織された新劇團である。島村拘月を盟主として中村吉藏・秋田雨雀・片山伸・相馬御風・中村星湖等を幹事とし、俳優としては松井須磨子を座長格にその他澤田正二郎等があつた。翌三年の「復活」上演は大いに當り、御風作、菅平曲の「カチューシャの歌」が須磨子によつて歌はれて甚しく有名になつた。以後抱月はあらゆる世の艱難と屈辱とにたへて一座を率ゐてゐたが、大正七年の彼の死に次ぐ、須磨子の自殺を以てすべては崩壊し去つた。

【新劇】 シンゲキ 新しい演劇の意であるが、とくに歌舞

伎劇・新派劇を一括し、それに對峙する演劇の通稱である。故に恰も西洋の近代劇と同様に、單に時代的に新しい演劇と言ふのではない。

これは傳統の歌舞伎劇及びその亞流である新派劇に對する不滿から、西洋近代劇の影響を多分にうけて出來たもので、今從來の國劇との比較をなせば凡そ次の様な差異が存する。

從來の國劇

新劇

- 1、夢幻的・浪漫的。 現實的。
- 2、娛樂的・唯美的。 反省的・内省的。
- 3、勸善懲惡的。 思想的・社會的。
- 4、荒唐無稽な筋を主とする。 内的思想的文學的美を主とする。
- 5、行爲的。 臺詞的。

そしてこの運動は文藝協會以來のことであつて、之を大別すると四期に分けて見ることが出来る。

一、明治三十九年頃から大正二年頃迄。

文藝協會、自由劇場、藝術座、新國劇(澤田正二郎藝術座からの脱化)を中心としたもので、殆ど翻譯劇であるところに特色がある。

二、大正の中頃から大震災の頃迄。

狂言座(菊五郎) 文藝座(勘彌) 春秋座(猿之助) 新

劇座(章太郎)等の如く職業俳優によつて、日本の新劇作家の作品を上演したのがその特色である。

三、震災後昭和三年小山内の死迄。

小山内薫等の築地劇場中心時代。この時に漸く新劇は大地に根を下したものと見ることが出来る。

四、築地小劇場以後。

その分裂以後左翼的のものと、自由主義的藝術を主とするものとに分れたまま、その進展が期待されてゐる形である。

【小山内薫】 ヲサナイカヲル 劇作家。明治十四年廣島市に生まれ、昭和三年東京で歿す。享年四十八。今の府立一中・一高を経て帝大の英文科を卒業した。彼は先づ歌人として出發し次に小説家として名をなしたが、勿論その偉大な足跡は實に三十年間絶えざる情熱を以て指導的活躍をなした劇界にある。即ち明治四十一年歸朝した市川左團次と提携して演劇の革新を企て、自由劇場を組織、四十三年慶應義塾の教授となり永く劇文學を講じた。大正元年演藝見學のため洋行。その後松竹キネマに關係して一時所長となつたが之を辭した。震災後は後進土方

2 文の構成

第一節 初—九〇頁九行

總説。

1 新文學の發生(初—同頁五行)

2 當時代文學の特色(八九頁六行—九〇頁九行)

第二節 九〇頁一〇行—九六頁三行 詩歌。

1 新體詩(九〇頁一〇行—九二頁六行)

2 俳諧(九二頁七行—九三頁七行)

3 和歌(九三頁八行—九六頁三行)

第三節 九六頁四行—九九頁終 小説。

1 二十年代の小説(九六頁四行—九七頁六行)

2 三十年代の小説(九七頁七行—九八頁三行)

3 自然主義の小説(九八頁四行—九九頁二行)

4 大正時代の小説(九九頁三行—同頁終)

第四節 一〇〇頁以下終迄 戯曲。

1 新史劇(一〇〇頁初—九行)

2 新劇(一〇〇頁一〇行—終)

3 文意

明治大正時代の文學の概説。

三 備考

一三 明治大正時代の文學

與志が獨逸から歸朝したのを機として築地小劇場を創立、その後劇曲の創作以外は殆ど同劇場のために没頭盡瘁した。彼の生涯は謂はば我が國新劇運動の化身として生きた様なものである。

【自由劇場】 ジイウゲキヂヤウ 劇團。新劇の上演を目的とする無形劇場。青年歌舞伎俳優市川左團次は歐洲の旅から明治四十年に歸つた。そしてその新洗禮をうけて來た理想を實現すべく翌春明治座に於て試みた。然し因襲的周圍の反對と迫害によつて中道にして斷念するの已むなきに至り、これを親友の研究者小山内にはかり、ここにその結果出來たものが即ちこれである。これには二人の外に岡田三郎助の背景係、鷗外・藤村・鳴泡等の顧問などがあつて出發したものである。四十二年三月にイブセンの劇を上演して好評をばくし、爾來、進取的な曲目、眞摯にして研究的な演技、優秀な舞臺監督、藝術的な背景などは常にその誇とするところであつた。かくて大正三年迄年二回宛の公演をなしたが、その後は五年と八年とに演出を見せただけで自然消滅の形になつた。

1 指導研究

明治大正と言つても、昭和の今日に迄直接関係をもつてゐることが多いので、生徒は異常な興味と關心とをもつて向ふことであらう。その心構を生かして十二分な効果を收めさせる様に注意したい。すでに生徒は大和時代以來の文學を學習してゐるわけであるから、それらと比較させて、此の期の文學の特色をよく把握させることが大切である。それと共に當代の文學それ自身の問題としては、社會的主潮・文學的主義などの關聯に深く注意し、その起るべくして起り、衰へるべくして衰へる展開のすがたをよく理解させ、ことに各文學類型間の關係については出來うる限りの有機的取扱が望ましい。更にその事象が現在如何に流れて來てゐるかを補説することも亦必要であると思ふ。

その他指導上注意すべき事は既習の同趣の課を参照されたい。

2 參考書

明治文學史	岩城準太郎	明治大正の國文學	岩城準太郎
明治文學十二講	宮島新三郎	日本現代文學十二講	高須芳次郎
明治文學史概説	藤村作・久松潜一	近代の小説	田山花袋
明治大正詩史	日夏耿之助	明治歌壇概史	尾山篤二郎
明治大正俳諧史概観	高濱虚子	現代文學十二講	高須芳次郎
大正文學十四講	宮島新三郎		

一四五 重塔

幸田露伴

一 解題

1 作者

幸田露伴。前課参照。

2 出典

「五重塔」の其三十三・三十四採擇。(全篇三十五回。)五重塔(ゴヂュウノタフ)は明治二十四年十一月から國會新聞に連載された小説で、同二十五年血紅星と共に尾花集として刊行されたものである。今は露伴全集第一卷その他などに收められてゐる。その梗概を示せば次の如くである。

「ある年谷中感應寺の境内に五重塔を建てることになり、當時江戸に有名な番匠川越源太は此の見積書を出すこととなつた。それをきいて源太の恩顧をうけてゐる「のつそり十兵衛」は親方には濟まないと思ひながら是非一生の思出として之を建てたいと申込んだ。十兵衛は緯名の通りののろまなため久しく不遇な境涯にゐるのであるが、元來名人肌の男で非凡の腕をもつてゐるのである。同寺の和尚朗圓上人は二人をよび、譲り合つて決する様に諭した。源太は立腹しながらも持前の江戸兒氣から二人主副の關係でやらうと言ひ出した。十兵衛は拒んだ。和尚は十兵衛の技倆と熱意に感じて一切をこれに任せた。源太もさうきまつた以上は潔くかゝりあひを捨てて助力を申出た。然るに十兵衛はまたしても之を聴き入れなかつた。そこで源太の子分清吉は憤激し十兵衛を不意討ちにして怪我をさせた。然し十兵衛の鐵石の一念は動かない。遂に苦心に苦心を重ねて見事な塔を建てた。所がいよゝ落成式の近くなつたある夜、満都

に魔物の様な大暴風が襲来して、五重塔も揉まれに揉まれてゐた。然し十兵衛は信ずる所あつて家に泰然としてゐたが、寺からの再度の迎で仕方なく寺に行き塔に上り、もし板一枚へぎとられても六分撃で見事に死なうと第五層に突立つてゐた。やがて風雨が収まつて見るといささかの損傷もなく五重塔は屹立してゐる。かくて名匠十兵衛の名は全都に響き渡つた。源太も江戸っ子の俠氣からすべての婦りを忘れてその風雨の中で塔下に立つて人知れず之を守つてゐた。やがて上人は筆太に「江都の住人十兵衛之を遣り川越源太郎之を成す」と記した。(本課は暴風雨の夜寺男が迎にゆく所から十兵衛が塔上に立つてゐる所までである)

此の一篇は所謂名人氣質、強固不拔なる意志の力、岩をもとほす一念を中心として藝術の永遠性を主題としたものである。その情熱と詩美の高潮、整然緊密な構成等、ひとしく彼の意志文學として此の前後に出た「風流佛」「一口劔」も達しない最高の境地である。當時作者は年齢僅かに二十四歳であるに拘らず、恰も老巧の大家を思はしめる様な絢爛自在な行文を以て、遺憾なく浪漫的法悦境を描き出したその力量には全く驚歎の外はない。其の三十一章から三十五章に亘る暴風雨の情景を描寫した莊嚴にして雄渾、甚しく迫力に富んだ文章は早くから讚歎のまとなつてゐる。五重塔一篇だけでも露伴の地位は不朽であるとさへ推奨されたのも亦故あることである。

3 主眼及び採擇の趣旨

露伴は或は紅葉と並稱され、或は一葉と時を同じくして推重された通り、種々な方面で明治の代表的文豪と謂ふべきである。殊に特異な文體を以て男性の心意氣を意志の力を描くその浪漫的理想主義的手腕は古今獨歩の概がある。本課はその方面の代表作であり、同時に彼一代中の傑作でもある五重塔から抄出し、小説の本質理解の一助ともし、其の鑑賞眼をも高める事を期するものである。前後兩段に見られる對照的描寫によつて、名人氣質の十兵衛が一代の知遇に感激してこの絶大なる情熱と精魂とを打ち込んでの信頼さと、一方その生命とする我が腕我が藝を疑はれたと知つて、失望落膽焦燥苦悶のどん底につき落された狂亂ぶり、はてはその深い決意の悲壯さをしみじみと味讀させたいと思ふ。

二 解 釋

1 語 釋

- 【著碌頭巾】 モウロクヅキン 法樂頭巾、焙烙頭巾とも言ふ。焙烙の形をした僧侶のかぶる頭巾。大黒づきん。まづきん。はうろく。
- 【準備】 ヨウイ
- 【引被り】 ヒキカブリ
- 【鷲子合羽】 トンビカツバ 羅紗製の外套。兩袖が長く、て、鷲の翅の様であるとところからの名である。
- 【胴締】 ドウジメ 胴をしめるもの。バンドの様なもの。
- 【手ごろ】 丁度好い加減のこと。恰好なこと。
- 【怖々】 コハゴハ
- 【七藏爺】 シチザウオヤチ 頭註参照。
- 【奪られて】 トられて
- 【親子三人】 主人の「十兵衛」、妻の「お浪」、齡は二十五、六、一人子「猪之」の三人。
- 【かたまり合うて】 お互に身をより添へてをること。
- 【点滴】 シツク
- 【飛沫】 烈しく吹きつけられて飛び散る水滴。
- 【始末】 ここは様子、有様、状態のこと。

- 【氣の働の無い】 氣のきかない、氣轉のきかないこと。
- 【呆れ】 アキレ
- 【棟梁】 トウリヤウ (一) 棟と梁。(二) 國家の重任にあたる人。(三) おもだつたもの、かしら、首領、頭領。(四) 大工のかしら、工匠の長。ここは勿論(四)。
- 【此の暴風雨】 本課採用の部分だけでも想像はつくが、三十一、三十二はその物凄い暴風のこと描かれてゐるのであつて、それをうけてゐる氣持である。
- 【さうして】 さう言ふ風にして一向塔のことなど心配なげに暢氣にしてゐること。
- 【ゐられて】 「られ」は寺男が棟梁十兵衛に對する敬語。
- 【まるで】 まるつきり、全然。ほとんど變がないこと。
- 【戦争】 イクサ
- 【お前の建てられた彼の塔】 十兵衛が此の度新しく建てた谷中感應寺の生雲塔。「られ」は敬語。
- 【正面】 マトモ
- 【撓んで】 タワんで
- 【軋る】 キシる
- 【壊れる】 コハれる

【圓道様】 エンダウサマ 頭註参照。

【爲右衛門様】 タメエモンサマ 頭註参照。

【膽】 キモ

【氣が氣では無く】 何となく心配でたまらず、じつとして
みられなくて。

【一體ならば】 本来ならば、通常なら、あたりまへなら。

【餘りな大勇】 餘りと言へば餘りな大勇。

【險難な使】 危険至極な使。即ち大暴雨の中を冒しての迎
の役。

【いまましい】 腹立たしく残念なこと。忌々しいこと。

【瘤】 コブ

【笠】 前出の「竹の皮笠」。

【攫はれる】 サラはれる

【おまけに】 その上に、更に。

【打付かりくさる】 ブツかりくさる 「くさる」は人又は物
の動作を腹立しく罵つて言ふときにつける語。なまじくさ
る。吠えくさる。

【い面の皮】 いいツラのカハ よい恥さらしのこと。つ
まらない面つぶしに會ふこと。

【喫驚】 ビツクリ

【行て仕舞うた】 イテシマうた 始めて雨戸のないのに氣
づいた様をみせた書きぶりである。

【堪る】 タマる

【愚圖々々せずと】 ダグダグせずと のろのろせずには
きはきと。

【身支度せい】 ミジタクせい 出かける支度をしろ。

【せき立つれば】 せき立てると、いそがせると。この次に
省略がある。参考の部参照。

【不興氣】 フキヨウゲ 機嫌を損じた様子。不愉快さうな
こと。不機嫌さうなこと。

【何の、これ程の】 どうして、これ位の。

【大丈夫、大丈夫でござります】 此の語ばかりでなく、こ
この十兵衛の答はまことに落ちついた自信たつぷりな述
べ方である。

【落著きはらつて】 よく／＼落著ききつてゐること。

【膨れ面】 フくれヅラ 頬をふくらかして憤つた様子をす
ること。

【ゆさゆさきちきち】 「ゆさゆさ」は揺れる様子、「きちき
ち」は物のきしるおと。

【御開帳の幟】 オカイチャウのノボリ 「開帳」は文字通り
帳（トバリ）を開くこと。とくに佛教では、厨子（ツシ）
を開いて其の中の佛體を公衆に拜させることを言ふ。啓
籠。開籠。その幟とは、その開帳のあるしるしとして寺
の境内などに立てる旗の一種である。布の横に乳をつけ

て竿に通して立てる。ここはその幟が風に吹かれて頭を

ふるのに塔のゆられてゐるのを喩へたもの。

【何程】 いくら。どれ程。いかに。どんなに。

【寛闊】 クワンクワツ 心持のゆつたりとして廣く、物に
こせこせしないこと。「のつそり」の品のよい述べ方であ
る。

【氣性】 キシヤウ 氣質・性質、性格、生まれつき。

【ふはりふはり】 魂（タマシヒ）が正氣常態を失つて身か
らぬけ出してしまふことを、ものがふは／＼浮き立つて
ゆく事にたとへたのである。

【陰で強い】 カゲでツヨい 所謂陰辨慶では何にもならな
いといふこと。實際のことにあたつて見ずに、陰で自慢
して強がりと言ふこと。

【來たり來たり】 ここは、一緒に行くのだ行くのだの意。
「たり」又は「た」でもつてこの様な述べ方をし、命令・
要求をあらはすことは普通に使はれてゐる。「早く行つた
り行つたり」「さつさと始めたり始めたり」「すぐにやつ
た、やつた」等。

【肝を煎つて】 キモをイツて（一）周旋すること。肝煎。

（二）いらだつ、腹たてること。ここは後者。

【みらるるぢやろ】 居られるであらう。

【半纏】 ハンテン 羽織に似て襟の折返しのない膝までの

もの。又印半纏の略。

なほ本文には省略してあるが「腐つても彼火事頭巾…
…何程イクラ襪ソックスでも仕方ない刺子半纏イハハも上に被カておいでな
され」とお浪が戸棚をさがしに立つたことが前にある
ので、それをうけて「頭巾なり半纏なり、冠るとも被
るともして」と言つたのである。

【冠る】 カブる

【被る】 キる

【さつしやれ】 なされ。

【遣り返す】 ヤリカヘす 反駁して應答する。應酬する。

【突撥ねる】 ツツバねる つよく相手の申出を拒むこと。

【容易く】 タヤスく

【焦れ】 ジれ 心がいら／＼してくること。

【何でも彼でも】 ナンでもカでも 是が非でも。なんでも
かんでも。否應なしに。

【語氣】 ゴキ 言葉の調子。

【むつとして】 今までは十兵衛靜かに構へて居つたが、七
藏があまりうるさくとげ／＼しく言ふので、少しく立腹
したのである。

【建てい】 建てよ。建てろ。

【御上人様】 ゴシヤウニンサマ 頭註参照。本篇の始の方
にその高潔有徳な名僧であることが述べてあつて、十兵

衛はその高德に感激し、此の上人のために見いだされたことを生涯の感激として生命を投げ出して塔を建てることを誓つてゐるのである。

【危いぞ】 アブナイぞ

【一期の大事】 イチゴのダイジ 生涯中での一大事。

【瀬戸に乗りかかる時】 セドにノリかかるトキ 「瀬戸」は瀬處（所）の意で、もと川を渡るときのことから出たもの。生死成敗のわかれる大事な所を言ふ。即ち瀬戸際に立つた時、危急存亡の時であるとの意。

【天命】 テンメイ 天の命令、天から受けた運命、又天が命ずること。ここは天からうけた命の意で、即ち「天命を捨てる覺悟で」のこと。

【駈けつけませうなれど】 かけつけもしませうけれども。

【一言半句】 イチゴンハンク

【餘の人】 ヨのヒト 別の人、他の人。上人様以外の人。

【云はれうと】 言はれようとも。

【紙を材にして仕事もせず】 雨にぬれたらすぐ豪なしになる紙きれを材料にして仕事をしただけでもなく、又。

【魔術】 テヌキ 手品、あやしい方法、不思議な術、ごまかし。

【手拔】 テヌキ 十二分に手を施さないで、當然なすべきところを手を抜いてごまかしておくこと。

【樂々】 ラクラク

この十兵衛の答の中には如何に上人様を尊信してゐるか、どんなにその知遇に感激してゐるかが現はれてゐると共に、どれ程精魂を打ち込んで吟味に吟味を重ねてなしたげたか、したがつてその塔に對する自信の念の如何に強いかがよくあらはれてゐる。

【愛想なく言ひ切る】 アイソなく 何等の愛想・愛敬をも示さずに、ぶつきら棒に言ひ放つこと。

【さても】 さて、さても、なんと。

【其の場に臨んでの】 即ち臨機應變のこと。

【何故】 ナゼ

【云はぬ】 言はなかつたのか。

【態】 サマ

【のつそり】 「のつそり十兵衛」のこと。

【かぶれて】 同化して。感化されて。

【寛怠】 クワンタイ 心がゆつたりしすぎてみてすばしくないこと。

【了簡】 レウケン 心得、心の持ち様。料簡。

【是非も無い】 已むをえない。仕方がない。

【欺詭り】 た詐る、うそをもつてだますこと。

【文句いはず】 モンクイはず 理窟や、逃口上などを言はせないで。

【獨言きつつ】 不平をこぼしながら、言はれてみれば成程

自分の智慧が足りなかつたのであるから、誰にあたるわけにもゆかず、獨り口の中でぶつ／＼言ひながら。

【四の五の】 シのゴの 何の彼のと。ここから其三十四。

七藏爺の次に「いきりきつて」とあるのを省略。

【我鳴る】 なること、大聲で叫ぶこと。がなる、どなる等はみな卑語で、身分の卑しい者がや／＼やかましく騒ぐことを言ふ語である。

【聞くより身を起して】 前に「落著きはらつて身動もせず答ふれば」とあるのとよい對照である。

【御召しなさるとか】 御召しなさると言ふのか。

【直實】 マコト

【頼みきつたる】 心から信頼しつくしてゐること。

【思し召されたか】 お考へなされたのであるか。

【口惜しい】 クチヲしい

【慈悲】 ジヒ なさけ、あはれみ。衆生に樂を與へ其の苦を抜く心。

【真底】 シンソコ 根柢、衷心。

【手腕】 うでまへ、伎倆、はたらき。

【たしか】 確、慥。即ちうでまへのしつかりしてゐること、伎倆のすぐれてゐること。

【思はれざりしか】 思はれなかつたのであるか。

【つくづく】 しみじみと、よく／＼。

【頼もしげ無き世間】 頼もしさのない世の中。

【生き甲斐無し】 生きてゐる甲斐もなくなつてしまつた。

【たまたま】 偶然、丁度よい具合に。

【當時】 その頃、今時、當世。ここは後者。

【知識】 チンキ 名僧のこと。大知識とも言ふ。大徳。ここは勿論圓上人をさす。

【空に】 むだに、徒に。

【果敢無き】 ハカナキ たよらない、もろい。

【そよと】 靜かに吹く風を言ふ副詞。「そよ吹く風」。實は世に稀な大暴風雨が吹きまくつてゐるのであるが、十兵衛が一心こめて建てた塔に對してはそよ風にもひとしいのである。

【丹誠凝らせし】 タンセイコらせし 眞心こめた、一心不亂になつてつくつた。

【腑の無い奴か】 フのないヤツか 奴であるのかの意。腑ははらわた。即ち意氣地のない奴なのかの意。表面には自らを卑しめてあきれてゐる様子をみせ、又一方には自分を見そこなつた人々にあたりちらす氣味をも含めて、奴と見ゆるかの意もある。

【取辱】 ハヂ

【のめのめ】 「おめ／＼」とも言ふ。恥づべき所を知らぬげに平氣でゐること。

【のめのめ】 「おめ／＼」とも言ふ。恥づべき所を知らぬげに平氣でゐること。

【面押拭うて】 ツラオシヌグうて 平氣を粧つて。

【よしんば】 萬一、よしや、たとへ。

この次に

「お浪、それほど我が鄙しからうか」
を省略。

【生命】 イノチ

【愛想が盡きた】 アイソがツきた 興がさめてあきれば
て、其の物に對する何の愛情も感じなくなることを。

【苦情を受ける】 クジヤウをウける 「苦情」は難儀なりと
する不平の心。即ち「苦情を受ける」とは人から不平を
言はれること。

【うつそのこと】 一層のこと。どうせかうせ、いつそのく
され。生なかの程度でなく、どうせなるなら徹底的であ
ることを望むことは。

【くれよかし】 呉れよかし。「呉れよ」は命令願望、「かし」
は念を押す時のことば。

【情無からねば】 つれなくあらねば。無情ではないから。
むごく、つらくあたるわけではないから。

【悦びこそせめ恨みはせじ】 悦びこそしても決して恨みは
しない。

【一枚の……一本の】 共に「の」は主格の「の」。

【吹きめくられ】 吹きとられること、吹きはがされること。

【味氣なき世】 アチキなきヨ 面白みのない世、つらい世
間。

【未練】 ミレン 心のこること、執着心のあること。

【物の見事に死んで退けて】 潔よく立派な死に方をして見
せて。

【粗漏】 不始末、不出來、失敗。

【生存へて】 イキナガラへて

【鄙劣】 心がさもしいこと、きたないこと。もとは金錢の
しいはいこと、守銭奴に言ふことば。

【無かりしか】 無かつたのであるか。
【かゝる心をもつてゐしか】 己が業の責任を感じて生命を
捨てる程高潔な心をもつてゐたのであるか。

【どうせ】 何れにしたところか。

【佛寺を汚すは】 後にある様に塔から飛んで死なうとする
のである。

【立去り得べきや】 立去り得るであらうか、立去れない。
「や」は反語の助詞。

【菩薩】 ボサツ 梵語 Bodhi-sattva の略で、覺有情と譯
す。佛語としては佛に次ぐ位置で、大勇猛心を以て菩提
を求め、大慈悲を以て衆生を濟ひ、己に妙覺の果に近づ
いた者を言ふ。

【生雲塔】 シヤウウンタフ 頭註参照。

【頂上】 語としては天邊の促音化したものであらう。

【五尺の皮囊】 ゴシヤクのカハブクロ 五尺の身體などと
言ふにひとしい。「皮囊」はものを容れる器であるが、そ
れでもつて身體の意を下品に述べ、自暴自棄になつた十
兵衛の心持をあらはしたのである。聖書の「新しき酒を
舊き革囊に盛る者はあらじ」を句はせてゐる。

【潰れて醜かるべきも】 ヤブれてミニクかるべきも みに
くくあるべきなれども、醜いには違なからうが。

【きたなきものを盛つてはをらず】 胸中腹中には決してき
たない心、腹黒い點などはもつてゐないと言ふこと。

【あはれ】 感動詞、ああ、あつばれ。

【男兒の】 ヲトコの

【醇粹】 一本氣。純粹醇厚にしてすこしのまじりもないこ
と。直情なること。邪曲な點のないこと。尙文は「醇粹
から」の意。

【清淨】 シヤウジヤウ 清いこと、けがれてゐないこと。

【流さんなれば】 流さうとすることなのであるから。
【愨然】 可愛想であること、あはれであること。同情すべ
きであること。

【照覽あれ】 セウラン てらして明らかにみることに、とく
に神佛の明らかに見られることに言ふ。照鑑。ここは勿
論後者の意で「あれ」と命令の形を以て懇請してゐるの

である。次に

「おもひし事やら思はざりしや、十兵衛自身も半分知ら
で、」

を省略。

【夢路を何時の間にか辿り】 夢路を辿ること、無我夢中
で感應寺に辿りついたことを兩方きかせた述べ方であ
る。

【此處は、おゝ、それ、其の塔なり】 此の所の書きぶりは
實に躍如たる生動の姿を寫して妙、緊縮された簡潔の辭
句は珠玉と化して光彩奕々たるものがある。

【第五層】 五重塔の第五階、即ち頂上。

【今しも】 「しも」は強め。

【ぬつと】 人や物のだしぬけに現れること。

【磔】 コイシ つぶて、小石。

【暴雨】 バウウ

【目を明けさせず】 上に對しては述語の如く、下に對して
は副詞として働いてゐる。

【面】 オモテ 顔面。

【一つ残りし耳】 十兵衛は源太の弟子清吉から斬でもつて
左の耳を殺ぎ落されてゐるのである。故に残つた右の耳
のこと。

【ちぎらんばかりに】 ちぎるのではないかと思はれる位

に。「ちぎる」はもぎとること、ねちぎること。扯斷。

【呼吸】 イキ

【欄を握んで屹と睥めば】 ランをツカんでキツとニラめば「欄」はてすり、欄干のこと。各層の周圍に組んで廻してあるもの。

【天は五月の闇より黒く】 ソラはサツキのヤミよりクロく

五月闇は五月雨が降りしきつて空の暗いこと。ここは雨

雲の爲に空が五月闇より暗くなつてゐること。

【轟々】 ガウ／＼ 物凄く吹く風の音の形容。

【虚空】 コクウ 大空、空。

【どうどうどつと】 猛風の吹きくる音をうつした擬聲語。

【棚無し小舟】 タナナシヲブネ 舟棚のない小舟。

何所にか船泊すらむ安禮の崎 こぎたみゆきし棚無し小

舟(萬葉集、一)

堀江こぐ棚無し小舟こぎかへり同じ人にや戀ひ渡りなむ(古今集)

「舟棚」とは(一)せが(櫃)のこと。「たな」とも言ふ。

字鏡や名義抄に舷(不奈太奈。タナ、フナタナ)とある。

(二)船の兩舷に家の縁の様に板を打ちつけたもの。舟子の櫓を操るところ。又その上を歩くのにも用ひる。せがい、ふなのへ、ふなばた、あゆみ。

【あはや】 ああ今にも。

【覆らん風情】 クツガへらんツゼイ 傾覆しさうな様子。

【岐路】 わかれ路、わかれ目、わかれ際。「ちまた」と言ふ

語は路股である。道(ミチ)はちにミの添はつたもの、ネ

にミが添はつて嶺となつたのと同趣)の股になつてゐるところ、わかれみちである。

【八萬四千の身の毛】 人身の毛の数を佛説で言ふことば。

八萬四千煩惱などの語もある。

【堅たせ】 「よだつ」は彌堅つ(イヨダツ)の略である。ま

すす毛を逆立てること。堅立。

【牙咬み】 キバカミ 糸切齒、延いては廣く齒をかみしめ

ること。

【睨り】 ミハリ 文として肝・瞳の方がよい。

【來し】 コシ キシ 何れでも文法上誤でない。「し」は過

去助動詞連體形。

【六分鑿】 ロクブノミ 刃の幅が六分あるのみ、穴を掘る

のみである。

【忘るばかり】 一心のあまり、さうしてゐることを忘れて

しまふ程に。

【引握んで】 ヒツツカんで

【靜かに待ちぬ】 「ぞ」の結びとして「ぬる」とあるべき所

である。尙原文では、

「……」握んでぞ天命を靜かに待つとも知るや知らずや

風雨いとはす塔の周圍を幾度となく徘徊する怪しの男
一人ありけり」

とあつて、其三十四は終つてゐるのである。尙そのあや
しの男とは勿論源太のことである。

2 文の構成

第一節 初一〇七頁六行 十兵衛の強烈不動な自信。

第二節 一〇七頁七行以下 篤く信頼してゐた上人に疑はれたと聞いて、十兵衛の驚愕落膽、自暴自棄。遂に生雲塔と

共に倒れて死なうと決意し、その第五層にあつて荒れ狂ふ虚空を睨み、靜かに天命を待つ所。

3 文意

名人氣質の十兵衛が如何にすべての利害を超越し、全心魂を打ちこんで仕事をなしたか、それだけに又その自信がどれ程強大なものであるかを述べたのがその前半で、したがつてそれが此の世の唯一の知己と信頼しきつてゐた上人に迄疑はれたと知つては、落膽と自棄とのどん底につき落され、遂に此の世への生甲斐をも失つてしまったことを述べたのがその後半である。

4 鑑賞批評

前半の七藏と十兵衛との問答は、七藏の益々いらいらしてくる心に對して、十兵衛の強い自信から彌々泰然としてゐる様子がいかにもよく書けてゐる。ことにそれが大暴風雨の中で、屋根も吹き飛ばされ雨戸もふつとんでしまつた背景の中での應酬であるだけに、七藏の心はさこそと思はれ、十兵衛の態度の異常さがことさら際立つてくるのである。百六頁に述べられた十兵衛の述懐は、如何に上人様一人を深く信頼し、如何にその知遇に感激して、吟味に吟味をかさねて十二分の細工をもつて仕上げたものかを遺憾なく表現してゐる。それだけに又後半の狂亂にもひとしい自暴自棄の念が一入さこそ思はれてくるのである。その前後對照の效をねらつた所に注意したいと思ふ。

後半、上人様のお召ときいた十兵衛の驚愕動天、自暴自棄の苦悶はまことにいたいたしい程である。その我と我が身の不甲斐なさに自らあきれ心から歎く姿は前半の落つきと對比して益々そのせつなさがあはれである。己の心魂を打ち込んだ細工が疑はれては、もう自己の生命もないと同然と知つて、深く塔とともに倒れて、そのきたなきものなき心を示さうとした決意は、藝のためには我が命までも捧げて悔いない情であつて、名人氣質の一面が躍如としてゐる。

「此處は、お、それ、其の塔なり」は語釋中に述べておいた通り、短句ながら本文中の白眉である。最後の數行の敘述はまことに物凄くも亦悲壯な鬼氣を漂はしてゐる。

尙文體は、言ふ迄もなく文語文であつて、既に「小説神髓」や言文一致の「浮雲」のあらはれてゐた當時としては新生のものによつたのではない。然し露伴の特色はむしろ文語體にあつて、特異な漢語を用ひること、句を次ぎ次ぎと聯ねて切れる所をしない様な趣のあることは本文にもよくあらはれてゐる。ことにある状態を描寫するとなるとそれが著しく長句になるのがその一特色である。本課の最初と最後の行文の如きはその最も代表的なものである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 本課採用の部分に至る迄の大意は是非補説すべきである。尙露伴の作品の特色と直接には「五重塔」の地位等を一應明らかにして本文に入る方がよいと思ふ。

(二) 本文の讀解はさ程困難ではなからうと思ふ。文語體の小説である點と、やや獨特な行文、及び特殊な漢語の使用等が一寸奇異に感ぜられるかも知れない。然し音讀すれば、その音調の美によつて、やや不明な所があるままに相當生徒は引きつけられるに違ひない。そこを手がかりとして利用するがよいと思ふ。但し是等の文體上に關しては適當な批判的指導が望ましい事は言ふ迄もない。その場合此の作品の生まれた時代、及び露伴の素養・性格・特色等の考慮があつて然るべきである。

(三) 本課採用の部分に於ては何處迄も十兵衛の心理が中心問題である。ことに度々前述した通り、その前半後半に於て兩極端の好對照をなしてゐるのであるから、その點によく着眼させて十分な指導をされたいと思ふ。

2 省略

少量のものについてはその部分々に補つておいた通りであるが、一〇四頁五行「せき立つれば」の次には左の省畧がある。

「傍から女房も心配氣に。出て行かるるなら途中が危険い、腐つても彼火事頭巾、あれを出しましよ、冠つてお出なされ。何が飛んで来るか知れたものではなし、外見よりは身が大切、何程襦袢でも仕方ない刺子半纏も上に被ておいでなされと、戸棚がた〜明けにかかるを、」

3 参考

八 波 則 吉

時に君、古い本だが「五重塔」は讀みましたかね。まだ？ では一度お讀みなさい。僕の本を貸しますから是非お讀みなさい。これは僕の愛讀書です。

君文體は違つてみますよ。同じ露伴物の中でも、これは格別古い方ですから、今日流行の小説とは非常に文體は違つてみますよ。併し、文體の如きは抑々末です。『ぞるこそれ』で書いてあつても、源氏物語は矢張千古の傑作ですからね。

え著者に面會したことがあるかといふお尋ねですか。ありますとも、何度でもあります。露伴さんは謂はば布袋さん……いや達磨さん見たやうな方です。斯うどしんと爐を切つた座敷の爐の前に坐つて、ねつちりねつちり話されるところはまるで禪坊さんです。恐し

い凝性の方で、此の小説を書かれる時には、——人傳に聞いたのですが、東京附近の五重塔を見廻つて幾枚も／＼机の抽出一杯ほどの圖面を集めて、それでも満足が出来ず、たうとう大工に模倣を作つて貰はれたといふ事です。さうか。知れませんが。本文の中に大工の十兵衛が、

其の夜からといふものは、眞實、眞實でござりまする、上人様、暗れて居る空を見ても、燈光のとどかぬ室の隅の暗いところを見て、白木造りの五重塔がぬつと突立つて見おろして居りますは。たうとう自分が造る氣になつて、到底及ばぬと知りながら、毎日仕事を終ると直に夜のめも寝ずに五十分一の雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました。見に来て下され、御上人様。

といふ所がありますが、これは其の儘著者露伴さんの熱誠と見る事が出来ます。

まだ露伴さんが谷中(谷中の天王寺町に住んでゐた)に住んで居られた時のことださうです。朝夕五重塔を見て、天晴立派に建つたものかな、あら快き細工振りかな、稀有ぢや未曾有ぢやと朝日夕日に感嘆されてゐたさうですが、或年非常な暴風雨がありました。翌朝、今朝こそ、若しや……と走り出て五重塔を見られたさうです。ところが依然として、いや巍然として、金剛力士が魔軍を睥睨して十六丈の姿を現じ、坤軸動かず足ぶみして巖上に突立ちたるごとく釘一本ゆるがず、板一枚剝がれず突立つてゐたさうです。ここに露伴さんは感奮して、是非此の五重塔の由来を書いて見ようと決心して、それから前に申したやうに材料蒐集に苦心して、百五十頁足らずの「五重塔」に一箇年餘を費されたといふ事です。

ところが君面白い事がありますよ。本文の中に暴風雨の記事があります。一寸其の本を貸して見給へ……此處です、「其の三十二」です。長夜の夢をさまされて江戸四里四方の老若男女悪風來たりと驚き騒ぎし以下です。飛天夜叉王が數萬の眷屬を指揮して暴威を逞しくする、實に凄慘極る、鬼氣人に逼る名文は露伴さんが、一夜の中に書かれたのださうです。彼の運筆……といはれてゐる露伴さんが、これ程の名文を一夜の中に書かれたといふ誠に驚嘆すべき事實で、蓋し神興——「不斷の努力」「愛の力」結晶ともいふべき靈感、即ちインスピレーションに依つて筆を運ばれたのであらうと想像します。(創作への道)

高須芳次郎

彼の表現法は、觀察や實驗などに重きを置かないで、彼の主観によつて机上に作りあげた人物を空想的に描き出さうとしたため、とひ人物そのものに奇矯、非凡なところがあつたとしても、個性をはつきり浮べ出すことが出来なかつた。其處には輪廓があつて魂がなかつた。通有性だけあつて特殊性がなかつた。また心理描寫を行つても、ある一角が誇張された丈で固定的傾向から脱することが出来なかつた。それに時々、文章の調子に引きずられたり、作爲のあとが目立つたり、氣力のみで文章を書き通さうとしたりして、破綻を示すことがあつた。西鶴に私淑しながら、唯西鶴の文章を模したやうなことは、紅葉のみならず、露伴にもあつた。けれども彼は確かに文章の妙手であつた。紅葉のやうに艶麗、華美なところはなかつたけれども、強い氣分で押通してゆく男性的な勁健の趣は彼の獨特であつた。其の日記などは、蒼古・簡淨の味があつて殊に宜い。唯彼が文章の上に於て、紅葉のやうに時代の大勢に適應して新しい試みを重ねてゆく傾向に乏しかつたため、その初期の時代に於て略々固定してしまつたのは、彼の弱點であつた。

(現代文學十二講)

一五 あゝ大和にしあらしかば

薄田 泣菫

一 解 題

1 作者

薄田泣菫 ススキダキフキン 名は淳介。明治十年五月岡山縣淺口郡連島町に生まれた。縣立岡山中學校を二年で退學以來學校生活を志さず、上京して數年間上野圖書館に通つて群書を涉獵し、獨學修養した。氏の詩人としての活動は明治三十年の頃に始まり、三十一年處女詩集「暮笛集」をだすに及んで、その独自の詩境は漸く詩壇の注目を集め、三十三年初から大阪で雜誌「小天地」を發行した。ついで三十四年「行く春」を刊行するに至つて遂に詩壇に重きをなし、島崎藤村・土井晚翠の後をうけて蒲原有明と共に三十年代詩壇に君臨した。その詩風は、初め藤村の影響をうけて抒情的であつたが、三十九年詩集「白羊宮」をだす頃には全く象徴詩風になり、その靜かな情熱を堪へた高踏的古典的な独自の詩境には愈々彫琢が加へられた。併し四十年代には既に詩壇を遠ざかり、大正期に入つては全く詩筆を絶ち、童話・隨筆に轉換し、殊にその英國風のユーモアとウィットに溢れた小品は當代隨筆の最高峰と目されてゐる。現在大阪朝日新聞社の客員として屢々隨筆の筆を執つてゐる。

詩集には前記の他「二十五絃」「白玉姫」等があり、今すべて「泣菫詩集」一卷に收められてゐる。隨筆集には「泣菫小品」「茶話」「新茶話」「猫の微笑」「艸木蟲魚」「大地讃頌」「樹下石上」等があり、何れも愛讀するに足る佳作である。

2 出典

白羊宮（ハクヤウキユウ）。明治三十九年五月、金尾文淵堂から出した泣菫の詩集。全六十四篇で、本詩の外、「望郷の歌」「妖魔自我」「笛の音」をとめどころ「離別」「牧のおもひで」「白すみれ」等がその代表作とされてゐる。この詩集は「有明集」と共に、明治新體詩の最高點を示すものである。即ち彼のさきの詩集「二十五絃」以來のさまざま試作の總收を見せて、小曲（牧のおもひで）、民謡調（小雀と桂女）、象徴詩風（妖魔自我）、回顧曲（あゝ大和にしあらしかば）等が收められてゐるのである。此の集に於てはその詩語の美が特に秀でてゐるのであつて、三十年代の古語復古といふ風潮が、始めて彼に於てひとり完全に實現せられた事を示すものである。瑰麗の古典美と高雅な浪漫美、しかも複雑極まる詩形美を以てその背景に漂ふ詩情の清奏をなす所、人々は初めて新體詩形による美感を十分に味はふことが出来た。

3 主眼及び採擇の趣旨

本課は標題の通り「あゝ大和にしあらしかば」の心をうたつたもので、作者泣菫の一特色である浪漫主義的古代憧憬、回顧調的尙古趣味をひたすらに古都大和によせたものである。洗煉巧緻を極めた複雑な詩形と典雅優麗の夢幻的詩情とによる美しい陶酔境を鑑賞させると共に、新體詩の一般をも知らしめようとする所に本課の主眼がある。

二 解 釋

1 語釋

【あゝ、大和にしあらしかば】「大和」は大和の國、今の奈良縣のこと。古代の都の土地であり、藝の華のさきほこつたみやびの地としての大和の國。「し」は強め。「まし」は願望。「ああ」と一旦切つて深い感歎をあらはし次に「大和にしあらしかば」と強意的句法をもつて之

を承け、その憧憬の心の切實さをあらはしたもので、此の一篇の詩の全貌が既に此の冒頭の一句に遺憾なく示されてゐる。

【しま神無月】。時は十月である。神無月（カミナヅキ、カシナヅキ）は陰曆十月の異稱。その語原的説明は三種あるが何れも妥當とは解し難い。

【うは葉散り透く】 森にかかる句。うは葉は上葉で、落葉樹が紅葉して上葉の方から散り初めたため、森の中が透いて見える様になつたことである。

【神南備】 地名。頭註参照。

【小路】 コミチ 森の中の小路。

【あかつき露】 曉の露、朝露。頭上にある樹木の枝や葉から滴下する清涼の露である。尙ほ頃は十月であり、此の一節は時は曉方であることに注意。

【髪ぬれて】 森の中を往く人の髪が、あかつき露に濡れるのである。

【往きこそかよへ】 「行き通ふ」に「こそ」の係結を用ひて強めたものである。その強いむすびは冒頭の「あゝ、大和にしあらましかば」の深い感歎強い憧憬に應じたものであつて、文脈の上でもここにづくのである。尙ほ「斑鳩へ」を後にして倒置法を用ひたのも亦感動の深さの表れである。

【斑鳩】 地名。頭註参照。斑鳩は鶴ともかき、「しめしに似た雀科の鳥である。單にいかるとも云ひ、まめまはし、じゆすかけの異稱もある。尙ほ此の地にあつた聖徳太子の御殿を斑鳩宮と言つた。

【平群のおほ野】 平群あたりの大野、廣野のこと。平群は卷九の第三に既出。なほ頭註参照。

をさす。

【珍】 古語で、善美なこと、賞讃すべきことを言ふ。珍貴珍重。ここは御經の修飾。古事記の上卷天照大神出現の條に、

「吾は子を生み生みて、生みの終に、三柱の貴の子得たり」

と伊邪那岐命が大きく歎かれたことが見えてゐる。

【御經】 佛教の經典を敬意をこめて言つたもの。

【黄金文字】 黄金色をした文字。即ち金泥による寫經をさす。

【百濟緒琴】 百濟琴とも言ふ。篋篋の異稱。百濟の國から渡つて來たための名である。

【齋瓮】 古へ神を齋ふに供へる酒を盛つた器のこと。(瓮とは古語で、かめのこと) 陶製で種々な形があつた。いんべ、いつべとも言ふ。

【彩畫の壁】 彩畫の施されてゐる壁。彩畫は彩みたる繪。彩色した繪畫。丹青畫のこと。「だむ」はもとすんで「たむ」と言ひ、色どる、彩色する意。この語を以て熟語となつたものに、だみ繪、だび繪、薄だみ、金だみ、銀だみ等がある。

【見ぞ恍くる】 見恍く、見惚けること。見て恍惚となること。見とれること。ほく(惚く)は後には四段活用である。

【高草の】 高草が。背の高い草の義であるが、次の句をみると、中でも田圃に見渡される一面の稻をさしたものであらう。

【黄金の海とゆらゆる日】 陰曆十月であるから、既に稻穂は黄に熟して恰も黄金色の海の如く擴つてゐ、そこに、かすかな秋風が渡つて、金波の波立でも見ることく、ゆらゆらとゆれてゐること。「ゆる」は奈良時代特有の古語で、中古文以降の「ゆるる」に當るもの。活用は「え」「え」で、「ゆ」「ゆる」「ゆれ」である。ここはその連體形。口語の「ゆるる」に當る。ここは隱喩法を用ひて其の印象を鮮明ならしめてゐることに注意したい。下旬によつて一層明白でもあるが、この句だけに於ても秋晴の日である事に注意したい。

【塵居の窓】 時代をへた古びた窓であるため、そこに塵がたまつてゐること。

【うは白み】 その塵の表面が白くなつてゐることであるが、語感としてかすかにほんのりと白いことをも示してゐる。

【日さしの淡に】 日射の淡い所に。堂の中の方までは強い光がとどかず、周囲の古さも手傳つて淡い日射と感ぜられるのである。

【いにし代】 往にし代、古代。但しここはとにかく推古朝

るが、古くは下二段活用である。ここは前述の琴・齋瓮、彩畫に心を奪はれること。

【柱がくれのたたすまひ】 「たたすまひ」はたたすまふの名詞形。ここは作者が其の寶物殿の中の柱がぐれに、みとれつつたちどまること。

【常花かざす藝の宮】 とこしへに迄咲き薫る様な藝術の精華のかざしてある、飾つてある御宮。

【齋殿】 イミドノ 齋みきよめた御殿。イミトノ(齋殿)の方は神事潔齋の時神官の參籠する所(齋館、神館、神館)を言ふ。

【焚きくゆる香ぞ】 たきくゆらしてゐる薫香こそ。くゆる(燻)は煙のたつこと。「ぞ」はつよめ。

【さながらの】 そのままの、丁度、恰も。ここは香がさながら美酒の意である。

【八鹽折】 鹽はあて字。八入折。入とは染料にひたす回数を示す單位。八は数の多いこと、彌の意。故に幾度も幾度も折返して芳醇にした(酒)のこと。古事記上卷八岐大蛇の條に出てゐる語。

【美酒】 甘しき酒のこと。「き」(酒)は「さけ」の古語。「おみき」(神酒)と言ふのも「き」に「お」と「み」の敬語が二つ重用されたものである。黒酒、白酒は新嘗祭に用ひる酒のこと。

か」がそれに匹敵すべきものであり、且つ「魂にしも」と強められてゐるので、その響きに應じたものである。

【日は木がくれて】此の節は日ぐれ方を詠つたもので、夕日も西方の木隠れに沈んだこと。

【諸とびら】諸扉。多くの扉。

【ゆるにきしめく】ゆるゆるときしめく音をたてて閉ざされるのである。

【夢殿】ユメドノ 頭註参照。

【夕庭寒く】夕方になつて事實身に稍々寒さを感じられるわけでもあるが、見わたした感じの上でも寒むざむとしてゐる氣味の庭の意である。

【そそ走りゆく】そそくさと、かさこそ音をたてながら走りゆくこと。夕風に吹かれて落葉が轉げゆくさまである。

【乾反葉の】落葉が乾いてかさかさ水氣がなくなり、その上にそりかへつた様になつてゐること。

【白膠木】樹の名。山野に多く、高さ約六米、枝は四方に茂る。春新葉を出し、漆の葉に似て廣く粗齒を有し對生する。夏三十糎許りの穂を生じ細白花をつける。實は垂れて圓く平たく、漆の實よりは小さい。外に白粉がある。葉は秋に早く紅葉して落ちる。古くは「ぬりで」「ぬで」と言ひ、別名を勝木（かちのき）とも言ふ。

【榎】エノキとも言ふ。高いものは十米餘に達する。葉は

楕圓形で先が尖り端に鋸齒があつて枝の間に互生する。夏の初、淡緑の花を開く。實の大きさは豆の如く、生は綠色であるが熟すると黒褐色となり、甘味がある。

【棟】オウチと發音する。今は多くせんだんの木と言ふ。高さ十餘米に及び、葉形は南天に似、鋸齒があり、光澤がある。夏長い穂をして五瓣の淡紫花が聚り咲く。雌樹は一・五糎程の圓い實を垂れ結び秋熟して黄色である。

【葉廣菩提樹】葉の廣い菩提樹の意。葉廣熊白樞の語は古事記に見える。菩提樹は釋迦がその大樹の下で正覺をえたところからの名であるが、これに二種類ある。(一)は桑科の常綠喬木で東印度の産、幹の高さ三十米。即ち佛敎上の菩提樹である。(二)は田麻科の落葉喬木で庭園などに栽培される。莖は直立し、高さ一五米位、葉は心臟形、又は廣三角形で桑の葉に似、上面は平滑綠色で下面に灰白色の細毛がある。六七月頃花をひらく。花は黄褐色を帯び、總狀花序に排列し、球狀の堅果を結ぶものである。ここはこれである。

【道ゆきのささめき】夕庭をころげゆく落葉の音を道ゆく者のささめきの聲と見たのである。

【語に聞きほくる】「ほく」は前に「見ぞ恍くる」とあつたのに同じである。「語」はそらんずること、よくしつてゐることである。ここは實際にはその物を直接見ずともよ

く熟知してゐるので、單に音をきいただけで何の聲かを知り、しかもそれにききほれてゐること。

【石廻廊】ワタドノは渡殿で廻廊のこと。それが石敷で出来てゐるのが即ち石廻廊である。

【たたまひ】前出。

【振りさけ見れば】ふとふり仰いで見ると。語義は振放見であらう。瞻仰。多く天の原と續けられる。仲鷹の歌の他にも、

天の原振放見れば大王の御命は長く天足らしたり

(萬葉集、二)

天の原振放見れば天の河霧立ちわたる君は來ぬらし

(萬葉集、十)

ここでは石廻廊に立つてはるかに高塔の九輪を仰ぐのである。

【高塔】アララギ 塔の異名。齋宮の忌詞。ここは次の「や」と感歎的につづけて法隆寺の五重塔を提示したのである。

【九輪】塔の頂にある九層の輪を言ふ。相輪、空輪。九層露盤。

【……の錆に入日かけ】あの百尺に餘る五重塔の九輪の物

2 文の構成

一五 あゝ大和にしあらましかば

さびたところに、入日の光が落つて照り映えてゐるのである。

【花に照りそふ】花の如くに照りそふ意。はなやかな夕ながめとして照り映えてゐること。

【緇衣】「緇」は黒のこと。よつて墨染の衣、又は僧の意。

【裾ながに地に曳きはへし】學僧たちが衣の裾を長く地に曳き這はせてゐること。「はふ」は他動詞で這はせること。

【そのかみの】古代奈良の佛敎隆盛の當時。

【學生】ガクシヤウともよむ。古の大學寮の生徒のこと。

但しここは學僧の意に用ひたもので、即ち佛敎の隆盛を極めた飛鳥時代に於ては學問寺たる法隆寺には多くの學僧達が集つてゐたのである。

【浮歩み】足をうかしてあゆむこと。恍惚たる氣持になつておちついてかろく自然にゆる／＼あるく様子。

【聖ごころ……身に】聖ごころを、暫しをも、身に、知らましを、の意である。聖ごころは、俗に對して、聖なるきよい心を言ふ。宗敎上に於て専ら追求する聖心を、よしやしばらくであつても、我が身にひしとせられるであらうに。

第一節 神無月の曉、神南備の森の小路を分けて、常花かざす藝の宮にたたずみ、古代藝術品へのあくなき陶醉。

第二節 秋の日なかに法隆寺の邊の古典的自然美への沈潜。

第三節 夢殿の夕庭に落葉の音をき、高塔に照りそふ夕日を眺め、そのかみの學僧の心を思ふ。

3 一篇の大意

大和の國斑鳩の里に飽くなき憧憬をよせ、朝には法隆寺の金堂に入り、日中は寺邊をさ迷ひ、夕は夢殿の庭に高塔の九輪を仰ぎ文化の燦然として輝いたそのかみを思ひ、恍惚として夢幻の境に彷徨する氣持を歌つたものである。

4 鑑賞批評

此の一篇を誦して先づ氣づく事は、普通用ひられない古語が相當に多いことと、感歎的強意的表現の少くないこととである。冒頭の「あゝ、大和にしあらししかば」の一句がすでにさうであつて、これは直ちに一篇の内容形式を緊縮して代表してゐる。この古語を自由に驅使し、しかもそれは生々しい様な、或は激動を催す様な語は全然なくて、唯その意味がはつきりしないながらも、夢の様な美しさ、ほのかな、か細い静けさを感じさせるものであつて、誦することだけで既に夢幻的境地に人を引き入れる様なはたらきをもつてゐる。したがつて古語の多いことは一篇の詩の世界の時代的遠さを暗示すると共に、選擇して使はれたその古語の性質のために、その古さの更に美しさをも併せ感ぜしめてゐる點は注意したいと思ふ。これは詩情と形式との融合的成功であつて、如何にも古典的美への憧憬心を基調として、飛鳥時代への浪漫的陶醉的詩情を謳つた詩としてふさはしいものとなつたのである。ことに朝に日なかに、或は夕にみられる景として描き出された自然美が、古典的人工美とよく渾融して謳はれてゐるところにも、その飽くなき憧憬陶醉の詩情がいかにも濃やかであり、深切のものであるかを語つてゐるのである。

音數の上では別に定形をとらなかつたのであつて、一見不規律の様にも思はれるが、しかしよく心して見ると詩情と音

數との融合も亦細心の注意がはらはれてゐることに氣づくであらう。一體華やかなしかも複雑な詩形美をもつて優麗な詩情を象徴的に浪漫的に謳ふ所にこそ彼の特色はあるのである。本篇に於ても冒頭の句はやがて終結近くになつてまた使用され、そこに前後照應の妙味を示してゐるのであるが、始の方は「あゝ」と讀點をおいて、一篇に漂ふ感歎的・懐古的情感を強く示してゐるが、後者は「あゝ大和にしあらししかば」と一つづきになつて居り、「知らましを」まで大體平板に一聯にすすみ、最後に「身に」と添へて調子をゆるめ、無限の餘情を残して結んだのである。これらは何れも詩情の波動による變化であつて、むしろ一律的な齊形美のない所に注意すべき點があることを知るのである。

要するに此の詩篇の價値は、内容形式の兩者が相俟つて、古典的浪漫美、憧憬的夢幻境を描き出しえたところにある。古語の頻出や、古文的連綴の多いのを以て難解であり、したがつて何をよんだか解し難いといふ缺點をもつてゐるなどといふ非難は一應もつともらしくもあるが、全體的のねらひ所からすれば決して強くは主張しえないものであることを知らなければならぬ。

三 備 考

1 指導研究

(一) 泣菫や白羊宮については既習の筈であるが、一應の復習が望ましいと思ふ。彼の新體詩史上に於ける地位やその個人的特色を知つておくことは本課學習の效果をして一層大ならしめる所以だからである。

(二) 本詩は一二回唯讀んだだけでは、何が謳つてあるか仲々わかりにくいと思ふ。そこで始は一々の語句は分らなくとも何回も繰返してよませるがよいと思ふ。その後で大體何をうたつたかを發表させ、或は全篇に漂ふ感情はどんなものであるか、或は第一・二・三節は何をもつて三分されてゐるか等といふ極めて大まかな吟味から入つて行く様にした

い。次に古語を明らかにし、文法的文脈的検討をなし、更に各段別の細部究明といふ様に入つたならば如何かと思ふ。
 (三) 一語一語がきらかりになり、或は文法的關聯がはつきりしたとしても、何を纏つてゐるかをよく了解させることに努めなければならぬと思ふ。と言ふのは、本課の各段ともに比喩や聯想や隱喩が相當に多く用ひられてゐるからである。
 (四) 詩形と詩情との關係に於て、鑑賞批評的な取扱をもしたと思ふ。(鑑賞批評の項参照されたい)
 (五) 本課は明治文學中の新體詩としてその代表的意義をもたせてあるから、その方面をも考慮してひろく新體詩といふ立場に立つて、本詩獨特の點は之を指摘して了解させ、此の一篇の特殊な點をもつて直ちに新體詩の共通的なものと思ひ込ませる様な事のない様にしたいものである。

2 参考

左に白羊宮に對する上田敏氏の評を掲げておく。

「薄田泣菫氏は此學殖ある詩人の一例なるか。語彙の豊富にして、殊に中古軍記類に散見したる語を驅使することの巧なるは、詩壇第一人なるのみか、西歐詩人の造詣も頗る深きが如し。其處女作にはキイツ愛讀の跡あり。『暮笛集』の一篇がエルギリウスの第一牧歌に類する如く、近時の作「ああ大和にしあらましかば」はブラウニングの同じ體に相似し、新年の「太陽」に寄せたる佳什「望郷の歌」は「ミニヨンの歌」に通ひて、而も大に日本趣味を發揮したる所面白し。」「藝苑」誌上「鏡影録」より）
 「薄田泣菫氏作『白羊宮』」云。日は春の白羊宮に位する時、天地開闢せりと傳ふるに據りしものか。秀でたる近什數篇のほか、諸雜誌に散見して、余が未だ精讀せざる佳什多し。『わがゆく海』『笛の音』は今の佛蘭西詩壇の象徴詩人中、令名噴々たる Henri de Régnier の詩を讀む心地あらしめ、『冬の月』『零餘子』等、各節の第四行をはたと六音に止めて、情熱更に烈しきを感じしめたるは、古希臘サッフオオの餘韻なる可し。余がさきに激賞したる『望郷の歌』は素よりなれど、新に見たる「くちづけ」「白すみれ」「寂寥」「海のほとり」等は余が趣味にとりて頗る面白き作なり」(雑誌「藝苑」の「鏡影録」)

又日夏歌之介氏は次の如く評してゐる。

「泣菫の作の特色は、右の上田敏の賞讃にもあらはれてゐるが、上來しばしば述べて來た彼の古典趣味は、この一卷(白羊宮)に於て全く獨自のスタイルを完成し、選ばれた言葉は傳統に即して傳統以上の美を彼の名に於て談り、詩感と技巧と内容と形態とまことに渾然たる一致妙合の契機に達してゐるものが少くない」

と言ひ、又

「詩集『白羊宮』」一卷は『有明集』と並んで明治時代文學史の詩的最重要な位相を占めるもので、この冊子あるがため詩人としての泣菫は不朽であり、三十年代の民族詩的精進も亦辛くも石胎不毛のそしりを免れた。かれの詩風はユニークであつたがため、一部教養ある讀者に愛誦されるにとゞまり、普遍性もなく、亞流の「る」ことも尠なかつたが、その確實に成語の歴史を識つて、その上で、自己の奴僕として、快適に自由に、使ひこなした技巧の冴えや、造語のふさはしい置き具合と、趣味三昧に徹した古代嘆美と、美と藝術とに對する篤信的渴望とによる詩情の個性價は、二十餘年後の現今もなほ少しも(他の詩人や小説家や戯曲家の大部分に對するやうな)草創時代なるが故の危なつかしさ、稚なさを寸分も感ぜしめず、その詩は明治時代中期の精神を代辯するものとして、露伴の文章、鷗外のスタイル、二葉亭の譯業に次いで、永遠に残さるべき史價を持つてゐる」(明治大正詩史、下卷)

と稱讚の辭を呈してゐる。
 なほ上に引用した上田敏の評中に、本課の詩がブラウニングの詩に似てゐるところがあるとおつたが、その詩とは、次の如きものである。

Robert Browning (1812—1889) の短唱 Sonnet Home-Thoughts, From Abroad (1845) 云
 Oh, to be in England
 Now that April's there,
 一五 あゝ大和にしあらましかば

And whoever wakes in England

Sees, Some morning, unaware,

That the lowest boughs and the brushwood scar

Round the elm-tree bole are in tiny leaf,

While the chaffinch sings on the orchard haugh

In England-now !

但し此について日夏秋之介は次の様に言つてゐる。

「……云々とうたつた詩形のその唱ひだしこそ似てゐるが、ブラウニングのこの作が、詩人伊太利亞に漂遊する道すがらの作と傳へられ、特にここに引いたスタンザは（右記のものをさす）航行途上の作かといはれてゐるもので、英國田園の快美な風物への詩人の樂生の展望であるに對し、泣菫の詩に「大和への嘆美は、その昔の寧樂王朝の藝術時代を追懷しての今の大地山川に對する嘆美であの宗教的樂生詩人が右の作で英吉利の鶉の啼き聲に新らしき意義を添へたに比して、この藝術的樂生詩人は、天平の古都の黃鶉に奇警な聯感を與へてゐる。」（明治大正詩史、下卷）

尙この詩に對する泡鳴の評を駁した同氏の言をやはり同書から引用しておかう。

「この詩を評して岩野泡鳴は「しまひまで來れば、兎に角聖僧の心を持つて、藝に遊びたいといふ意だけは通つてゐる。然しその發想法は遊戯的になつてゐる」といひ、「又平群の野の草が枯れてゆらゆらする日、塵まみれの窓に白みて日ざしが淡く、古代の珍しい經文の句、篋篋、神酒入れ、彩色畫の壁などが見える。それらに見とれて柱によつてたざんでゐるといふことだ。「黄色」といふことをただ一行置いて二ヶ所に使つてゐるのが面白くない所へ持つて來て、古代の物をいかめしさうに並べたのが、單に珍物とさへ云へば濟むところだ（文章世界）」と言つたが、古代藝術美の憧憬に出發する詩感を建築するのに、古風なさまざまの道具だてを用ひるのも、單に珍物とだけは考へられぬ事いふ迄もない。出鱈目で粗笨な俗評の代表がこれである。」

一六 高 瀬 舟

森 鷗 外

一 解 題

1 作者

森 鷗外 モリオウグワイ 名は林太郎。文久二年一月石見國津和野（現島根縣鹿足郡津和野町）に生まれた。家は累世藩主龜井侯の典醫で、五歳から漢學を、九歳から蘭學を學んだ。明治五年（十一歳）父に従つて上京、翌年第一大學區醫學校（翌年東京醫學校と改稱）に入學、傍ら獨逸語を進文學舎に、漢詩を依田學海に、和文和歌を福羽美靜に學んだ。十年東京醫學校の東京大學醫學部となると共に、豫科より本科に進み、十四年（二十歳）卒業。陸軍軍醫副（中尉相當官）に任ぜられ軍醫生活に入つた。十七年醫學研究の爲ドイツ留學、ライプツヒヒ大學に入り、在留約四年、この間専門外の文學哲學の方面に關しても深い研鑽を遂げた。二十一年歸朝、二十四年醫學博士の學位を得、二十六年一等軍醫正に任じて軍醫學校長となり、日清日露の兩役に從軍し、四十年軍醫總監に任命され、陸軍醫務局長に累進し、大正五年豫備を仰付けられた。以後専ら文化的方面の事にたづさはり、六年帝室博物館館長兼圖書頭となり、後帝國美術院長・臨時國語調査會長を兼ねた。大正十一年七月歿。享年六十一。

文學的方面の活動はドイツ歸朝後に始つた。明治二十一年七月、雑誌「國民の友」夏季附録に譯詩集「於母影」を發表、十月雑誌「しがらみ草紙」を創刊し、譯詩・評論等を發表し、又外國文學の紹介につとめた。二十三年雑誌「國民の友」に處女作「舞姫」を發表、續いて「うたかたの記」「文づかひ」を出すに及んで一躍文壇の巨星を以つて目された。爾來累

年譯詩評論小説等の著をなしたが、日露戦役出征後一時沈黙状態にあつた。四十一年雑誌「スバル」を創刊し、この年また文學博士の學位を得、再び旺盛な活動を示し、當時自然主義全盛の文壇にあつて、時流を抽んで独自の道を闊歩したのは偉觀であつた。大正元年頃から歴史小説・考證・史傳等に筆をとり、軍職を退いて後は、殊にこの方面の作が多くなつた。博學高見、常に文壇の指導者・先覺として明治文壇に重きをなした。

著作には前記の他、譯詩集に「水沫集」「月草」「即興詩人」「黄金杯」「寂しき人々」「フアウスト」「マクベス」等、創作集に「涓滴」「意地」「走馬燈」「分身」「天保物語」「雁」「高瀬舟」「山房札記」等、評論隨筆集に「妄人妄語」詩歌集に「うた日記」「沙羅の木」、史傳に「澁江柚齋傳」「伊澤蘭軒傳」等がある。今、文學上・醫學上の著作は鷗外全集(十八卷)に併せ收められてゐる。

2 出典

「高瀬舟」の前半を採擇したもの。これは大正五年一月、中央公論に發表された小説で、大正七年二月、他の數篇と共に高瀬舟と題して春陽堂から刊行された。なほ鷗外全集ではその第四卷に收められてゐる。

この作については作者自身の「高瀬舟縁起」の一文を参照されたい。(参考の部)即ち此の一篇は「翁草」の中の二つの大きな問題と思はれるものに興味を感じて出來たものなのである。尙本課所載の次の大要についても参考の部を參看されたい。

3 主眼及び採擇の趣旨

罪人喜助の、高瀬舟の中で示した態度の異常さに不審を抱いた同心庄兵衛が、その物語をきいて財産や生活に對する喜助の考へ方に驚嘆し、それを我が身にひきくらべて遂に財産や生活に對する悟りをひらくに至る迄の心理を描いたのが本課である。財産や生活上に於て、足るを知ることの悟りを、不幸のどん底にある罪人の話から得るところに本文の特色は

存するのである。

純正端麗な筆致を味讀させて、財産に對する態度、ひろく言へば人生觀に就いて考へさせると共に、明治文壇の巨匠鷗外に對する理解を深め、以て小説の本質に觸れさせたいと思ふ。

二 解 釋

1 語 釋

【高瀬舟】 タカセブネ (一)艇の小さくて深いもの。高背船の義。和名抄に「艇小而深者、曰、舩、太加世、俗用高瀬舟」とある。(二)底を平にして浅くして作り、高瀬を乗り越すもの。高い瀬も自在に漕ぎ通ぜられる義。増抄に「たかせ舟、小舟なり、川の瀬の高き所もゆくやうに棚なしに作りて、浅く廣き船なり」とある。(三)又別に川船の一種で頗る大きなものを言ふ。荷足船。ここは本文の通り高瀬川を上下する小舟で、とくに罪人をのせて配流するための舟である。「高瀬舟縁起」参照。

【高瀬川】 タカセガハ、頭註並びに「高瀬舟縁起」参照。賀茂川の分流で、二條南から舊京極河原を通り、竹田に至り岐れて、一つは鳥羽の西で桂川に入り、一つは賀茂川を横きつて伏見町を貫ぬき淀河に入る。古來、木石貨物のための運河である。「縁起」に曳舟とあるが、一七頁の挿繪には荷物をつんで曳く姿が描かれてゐる。

【遠島】 エンタウ シまながし、をんる。江戸時代の刑罰の一として死罪よりは軽く、追放よりは重かつたものである。御定書百 條、御仕置仕方に

「遠島、江戸より流罪者は大島・八丈島・三宅島・新島・神津島・御藏島・利島、右七島之内へ遣す。京・大阪・西國・中國より流罪之分は、薩摩・五島之島々・隱岐國・壹岐國・天草郡へ遣す」

【牢屋敷】 ラウヤシキ 牢屋を構へた一區域の土地。

【町奉行】 マチブギヤウ 江戸幕府の時の職名で、江戸・大阪・京都・駿府の四箇所に置き、管内の行政(戸籍・租税)司法(訴訟)等を掌らしめたもの。

【同心】 ドウシン ここは與力配下の屬吏。江戸幕府時代に奉行の配下に與力と言ふのがあつたが、それに使はれて雑務を分掌するのが即ち同心である。以上は役人の部類で、その下に番太といふものがある。

【上へ通つた事】 おカミ(上)へ知れても差支のない事。政

府から公然と許可されてゐる事。

【六目に見る】 寛大に取扱ふこと。

【黙許】 モツキヨ だまつて許しておくこと、みのがし。知らぬふりして認めること。

【科】 トガ あやまち。罰すべき行爲。

【穽惡】 ダウアク 心の悪る猛しいこと。わる強いこと。兇惡。

「思はぬ科を犯した人であつた」の次に「有り觸れた例を擧げて見れば、當時相對死と言つた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ活き残つた男と言ふやうな類である」を省畧。

【入相の鐘】 イリアヒ(入相)は入間(イリアヒ)の義で、日の山の端に入る時、たそがれ、日没のこと。故に黄昏につく鐘、晚鐘のこと。

【賀茂川】 カモガハ 頭註参照。

【いつもいつも……】 「その罪人と其の親類の者との話と言へば」の様な主語を補ふとよい。

【繰言】 クリゴト 同じことを繰り返して言ふこと。「老の繰言」などの語もある。

【眷族】 ケンゾク (一)うから、やから。(二)配下のも、家の子、郎黨。「眷屬」も同じである。

【所詮】 ショセン つまり、(その話と言ふのは)。詮ずる所、畢竟、究竟。

【白洲】 シラス 裁判所の糺問の場。法廷、訟廷。

【表向】 オモテムキ

【口供】 コウキヨウ 口頭で述べること。罪人などの供述を言ふ。口述。

【口書】 クチガキ 罪人の口供の筆記。

【役柄ゆゑ】 ヤクガラ 役目の體面上、役目の性質上。

【氣色には見せぬながら】 ケシキ 氣色)には、即ち顔色や容貌には出さないながらに。出さないけれども。

【宰領】 サイヤウ 司ること、取計ること、支配すること。

【不覺の涙】 思はずおとす涙。

以上は本篇の序であつて、高瀬舟と罪人護送との大要を述べたのである。次には愈々、本物語に入るのであるが、その人や時や處を示せば左の通りである。

(一) 時代。寛政年間。櫻さく頃の夕。

(二) 場所。京都から大阪に下る高瀬舟のなか。

(三) 人物
1 同心の羽田庄兵衛。凡そ四十歳。妻と子供四人と老母がある。
2 罪人の喜助。凡そ三十歳。妻子眷族はない。

【白河樂翁侯】 シラカハラクラウコウ 松平定信。樂翁はその退隱後の號である。寶曆八年田安宗武の第七子として生まれ、後に白河城主松平定邦の養子となつた。更に三十七歳を以て老中筆頭となり、將軍家齊を輔佐して勤儉尙武、田沼意次の弊政のあとを改めることに努め、所謂寛政の治をなした。致仕の後風月に親しみ、著書も少くない。就中「花月草紙」はひろくよまれてゐる。文政十二年歿、享年七十二。

【政柄】 セイヘイ 政權。柄は「え」で、つかみどころのこと。即ち政治の樞機を執る意である。(笑柄・話柄・談柄)

【寛政】 クワンセイ その元年は皇紀二四四九年で、十三年二月五日に享和と改元された。將軍は家齊である。

【知恩院】 チオンキン 浄土宗鎮西派の總本山で、京都の東山に在る寺。法然の弟子の源空が草庵を結んで創めたものと言ふ。今の堂宇は寛永十年家光の再興の由。

【不定】 フヂヤウ 定つてゐないこと。

【棧橋】 サンバン 客の乗降や、貨物の積卸しに便するため岸から水上に突き出た橋。

【神妙】 シンメウとも。妙は漢音ベウで、吳音メウである。

(一) 人智を超えた靈妙不思議なこと。(二) けなげ、殊勝、奇特。(三) おとなしいこと、従順、すなほ。ここは

(三)。

【公儀】 コウギ (一)おもてむき、公なこと。(二)朝廷。

(三) 幕府、將軍。ここは(三)。

【權勢に媚びる】 権力や勢力のあるものにおもねること、迎合すること、ことさら表面でだけ氣に入られる様にとりつくるふこと。

【役目の表】 ウヘ

【歎んで】 ヤんで

【霽になつて】 その晩は、薄雲につつまれた月の下に、紫色のものがおぼろにかすんでゐたと言ふのであるが、そのもやを近寄る夏の温かさが、兩岸の土、川床の土から立昇つたものと見たての表現をとつたのである。

【下京】 シモギヤウ 京都は三條以北を上京(カミギヤウ)以南を下京と言ふ。

【舳】 ヘサキ 舟の前部、船首。

【まとも】 眞之面(マツモ)の義。正しく向ふこと、眞正面。

【氣兼】 キガネ 他人に對する心遣。遠慮。

【宰領】 サイヤウ ここは、運送荷物の人夫に添つて、支配して行くこと、又その役。

【目も當てられぬ】 悲惨で見ると堪へない。

【遊山船】 ユサンブネ 遊びに出る時用ひる船。「遊山」は郊外に出て遊ぶこと、行樂。物見遊山。

【ひよつと】 ひよつとしたら。或は。

【辻褄】 ツジツマ 始と終。筋道。それが合はないと言ふのは、前後矛盾したり、撞着したりすること。

【見咎め】 ミトガめ

【居すまひ】 坐つてゐる状、ゐさま、坐作。坐つてゐるなりすがた。

【動機】 ドウキ (Motive) 行動の起る最も直接的な原因。

又意志の行動を決定する意識的目的。

【役目を離れた應對】 ここでは、罪人とそれを護送する役人といふ監視・被監視の關係を離れて、單に一個の對等の人同士が對ひ合つて話すこと。

【分疏】 言合、申しわけ、申しひらき、陳辯、辯解。

【お前の】 「の」は「が」の意。

【二百文】 銅錢で二百の意。

【鳥目】 テウモク 青錢の異名。圓くて中孔が四角な形が鶯鳥の目に似てゐるところから言ふ。轉じて金錢、ぜにかね。

【掟】 オキテ 定め、とりきめ。法制、法則。

【お足】 オアシ 錢の異名。世に通用すること足があつて行くが如き意からであらうか。

【工面】 クメン (一) 才覚、工夫、算段。(二) 金錢の工面の意から轉じて身上、身代、金廻りのこと。

【元手】 モトデ 資金、もときん、もと、基本金。

【噤んだ】 ツグんだ

【意表】 イヘウ 思ひの外なこと、計らざること、意外、案外。

【初老】 ショラウ 四十歳の異稱。それに手の届くとは四十歳近い年輩であること。

【吝嗇】 リンシヨク 過度にしわいこと、甚しく物惜しみすること、けちなこと。

【扶持米】 フチマイ 昔、幕府や諸侯の小臣等が、一日一人の食料を標準として給與された俸米のこと。徳川時代では一人一ヶ月の分を一斗五升としてゐた。そして何人扶持といふ名目で夫々分に應じて給與されてゐた。これがよい士になれば何石といふことになる。然しここは別に石と扶持とを區別して云つたのではなく、廣く「お扶持」、即ち食祿、俸祿の意であらう。もつとも事實としては與力や同心は所謂何人扶持の階級に屬してゐたものであらうか。

【手元】 テモト 手の届くあたり、手近、手廻り、手許。

【内證】 ナイシヨウ あらにはしないこと、内々にすること。おもてだてぬこと、内密、秘密。

【里】 サト ここは妻の實家、里方。

【帳尻を合はせる】 足りない所を填め合はせて收支相償ふ

様にすること。帳尻(チャウジリ)は帳簿の精算の結果。

【五節供】 ゴセツク 節供(セチク)とは其の節々に供する物品から起つた名で、節日(セチニチ)に酒饌を供することを言ふ。即ち元日の膳、正月十五日(後世は七日)の七種粥、上巳の草餅、端午の粽、七夕の索餅、玄猪(十月初の亥の日)の冢子餅などである。約めて、せち、又せく。せつく、せちごと、おせちなどとも言ふ。後の節句と言ふのはこれから移つたものである。即ち人日、上巳、端午、七夕、重陽の五つの節日を節供とよび、すべて五節供と稱する。夫々その日には七種粥、草餅、白酒、粽、柏餅、索餅、栗飯、菊酒を飲食して祝ふからである。

これは古く王朝時代から行はれてゐたが、明治六年五節句を廢し、紀元節天長節など祝日としたのである。(節日、佳節。)然し上巳の雛祭と端午の鯉幟とは男女の愛兒からの關係であらうか、今も猶ほ盛んに行はれてゐる。

【七五三の祝】 男兒は三歳、五歳。女兒は三歳、七歳の時十一月十五日に新衣をきて氏神に參詣する祝儀。

【格別】 これと言つて、とり立てて。

【風波が起る】 ゴタ／＼が起きる。夫婦喧嘩。

【算盤の桁が違ふ】 ソロバンのケタがチガふ 桁は算盤の脊梁、即ち横に通つてゐるものを言ふ。それが異なつてゐるといふのは、同じく五玉を置いて一の位と十の位

では、一方は五であり、一方は五十となる。故にここでは收入の上で唯だ單位が異ふだけで、残りのないことは同様だと言ふ意。今かりに喜助が五圓を右から左へ出して暮してゐるのも、庄兵衛が五十圓入つて五十圓出して暮してゐるのも、違ふ所は單に位だけの話で、彼は一の位の桁、自分は十の位の桁である點が違つてゐるだけで何も後にのこらない點では同様だと言ふ意。

【口を糊する】 かゆをすすること。轉じて三度の食物を食ふこと。口すきをする、暮すこと。糊口(糊口の方が正し。

し。

【出納】 スキタフ 金錢の出入、收支。

【お役御免】 免職、免官。

【疑懼】 ギク びく／＼心配すること。

【意識の闕の上に頭を擡げて來る】 今までひそんでゐたものがはつきりと意識されてくること。意識 (Consciousness) は心理學上の語で、感覺・感情・觀念・欲求等あらゆる心の作用が現に働いて、しかも是等の諸作用を心自ら知覺してゐる状態を言ふ。闕(シキミ・シキキ)は門の内外を區別するもの。即ちひろく境界となつてゐるものを言ふ。それで今迄は意識の内(ひそんでゐたもの)が境界をこえて意識上に浮かび上つてくることに言つたのである。

【係累】ケイルキ 身につながらわづらひ、足手まとひ、妻子眷族のわづらひ。

【もつと深い處】語としては前出の「うはべ」に對するものであつて、換言すれば所謂人生觀、生活的態度、財産に對する根本的觀念とでも言ふべき様なことをさしてゐるのである。

【踏止る】主觀的に満足することを知る。足るを知る。現在を有難く思ふこと。

【驚異の目】羽田の深い感動と悟りから出發した驚異の目である。

2 文の構成

第一段 初—一八頁の終迄 序

高瀬舟と罪人護送との大畧。

第二段 一九頁—一二二頁一〇行

高瀬舟に乗せられた罪人喜助と、護送人羽田庄兵衛。

第一節 一九頁四行迄 時と處との提示。

第二節 同八行迄 罪人喜助の提示。

第三節 一二〇頁三行迄 護送人羽田と、棧橋に至る迄の不審。

第四節 同頁六行迄 舟中でも細かく注意したこと。

第五節 同頁の終迄 その夜の川岸の景など。

第六節 一二二頁四行迄 喜助の態度とはれやかさ。

第七節 同頁九行迄 羽田は益々不思議だと思ふこと。

第八節 一二二頁一〇行迄 そこで羽田はひとり種々に考へて見たが愈々わからなくなるだけであつたこと。

第三段 一二二頁終行から一二七頁四行迄

羽田の問と喜助の話。

第一節 一二四頁三行迄 羽田はたまらなくなつて喜助にわけを話して問うて見たこと。

第二節 一二七頁四行迄 喜助の話。

第四段 一二七頁五行から最後迄

羽田が黙考して悟ること。

第一節 一三一頁六行迄 羽田が身に引き比べて種々考へて見、彼此の間に甚しい懸隔のあることを知つたこと。

第二節 終迄 その懸隔の原因は何であるかを考へた結果、結局足るを知るか知らぬかに在ることを悟つた時、喜助の姿が非常に尊いものと思はれ出したこと。

3 文意

罪人喜助の話をきいた羽田が、財産や生活に對する考へ方に於て、足るを知ることの尊さを悟るに至る心理の解明。

4 鑑賞批評

讀み返して見れば益々嚴肅敬虔な氣持に包まれ、實にこれこそ名文だと感歎せざるを得ない文章である。

本篇の序の位置を占める「高瀬舟」の概説、これは簡にして要を得、しかも以下の本文を生かす上に於て、異常な役割を果してゐることに先づ注意せられる。

「いつの頃であつたか……」といふ書き出し、江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃といひ、京都の知恩院の櫻が入相の鐘にほろ／＼散る春の夕といひ、これらは即ちロマンチックな世界であつて、讀者は先づその浪漫的雰圍氣に包まれて、遠く靜かな物語の世界に己を落ちつかせることが出来るのである。唯「これまで類のない珍しい罪人」といふ語はやや説明的に墮したとも思はれようが、これこそは本篇の主旨をなすもので、強く先づ讀者の心に印象づけ、以下その所以を一枚々々覆をめくる様に明らかにして行くのであつて（一二二頁迄）、そこに却つて深い用意が見られることを思はなければならぬ。

「しかもそれが罪人の間に往々と見受けるやうな、温順を装つて横勢に媚びる態度ではない」

「單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく」

是等は語は簡潔であるが、いかにもその眞實を的確に表現したものと謂ふべく、或は

「その日は夕方から……」の、あの河岸の描寫は、僅かに數行の辭句で、夏の近づく晩春の夜景を如實に寫しえて、眞に「舳にさかれる水のささやき」を耳にするが如くである。

「雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其の額は晴やかで、目には微かながやきがある。」

「若し役人に對する氣兼ねなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとか、しさうに思はれたからである。」

是等の描寫は、いかにも繪畫的と言ふよりはむしろ彫刻的であり、寫實的と言ふよりはむしろ象徴的である。

かく見て來ると、如何に本文が洗煉に洗煉を経たものであるか、いかに一語々々が些少の無駄もなく生き生きとした働をなしてゐるかがわかるであらう。これは鷗外の文章の卓越した一特色であつて、和文漢文洋文の何れをも巧みに取入れ、

しかも之を完全に自家藥籠中のものとなして、いささかの厭味を感じさせる様な紛飾もなく、わざとらしい修辭の跡も見せず、淡々としてゐてしかも實は彫琢に彫琢をへた後の珠玉の文字となつてゐるのである。これが讀めばよむほど讀者をひきつける所以であり、名文の名文たる所以である。

後半の述懐、羽田の辿る心理の明快さには、生徒も亦「人の一生といふものを」「只漠然と」ではなしに、しみじみと思つて、嚴肅な氣持、敬虔な心持になるであらうと思ふ。

不幸のどん底にあつた喜助、今は罪人といふ汚名をきせられてゐる喜助から、その監督者の地位にある羽田が考へさせられて悟つた所に、この悟りが一層の輝きを増してゐることも亦注意すべきであらう。ある徹底した境遇にある人の思想、所行なるが故に、ことさら羽田は「驚異の目を睜り」、したがつてその頭から「毫光」がさしてゐると思はれる迄の驚歎をしたのである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 此の文は本課に於ては三段落になつてゐるが、構成の項に示した通り、四段落にした方が一層生徒には理解し易からうと思ふ。とにかく全體の構成を先づ明確に把握させておいて授業を進めることが大切である。

(二) 第二段の指導に於ては、「これまで類のない珍しい罪人」といふ語がその手がかりである。何を以て無類の珍しい罪人であるかを、順次に生徒の力で發見させるがよいと思ふ。

(三) 第三段に於ては喜助の述懐の要點を確認させ、第四段に於ては、羽田の境遇と、その我が身にひきくらべて辿る彼の心理の経路、そして遂に如何なる解決如何なる悟りに到達したかを明確にさせるのが主眼でなければならぬ。

(四) 此の高瀬舟一篇から受ける内容的感動、及びその表現上から受ける形式的感銘、これこそは、一は小説の本質に觸れさせうる鍵であり、一は文章そのものの指導をなしうる萌芽である事に注意されたいと思ふ。ここに鑑賞批評の心眼を養ひうる手がかりを求めて、此の逸品の活用を十二分にされる様に切望する。

(五) 原據の翁草を示して、その素材とこの創作との比較對照をさせる事も亦、有意義であらう。

2 参考

鷗外氏自ら筆を執つた「高瀬舟縁起」を示しておかう。

「京都の高瀬川は、五條から南は天正十五年に、二條から五條までは慶長十七年に、角倉了以が掘つたものださうである。そこを通ふ舟は曳舟である。元來たかせは舟の名で、其舟の通ふ川を高瀬川と言ふのだから、同名の川は諸國にある。しかし舟は曳舟には限らぬので、和名鈔には釋名の「艇小而深者曰楫」とある楫の字をたかせに當ててある。竹柏園文庫の和漢船用具を借覽するに「おもて高く、とも、よこともに、低く平なるものなり」と言つてある。そして圖には篙で行る舟がかいてある。

徳川時代には京都の罪人が遠島を言ひ渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたさうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞かせられる。或るとき此舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがつてゐなかつた。其仔細を尋ねると、それまで食を得ることに困つてゐたのに、遠島を言ひ渡された時、銅錢二百文を貰つたが、錢を使はずに持つてゐるのは始めてだと答へた。又人殺しの科はどうして犯したかと問へば、兄弟で西陣に傭はれて、空引と言ふことをしてゐたが、給料が少なくて暮しが立ち兼ねた、其内同胞が自殺を謀つたが、死に切れなかつた。そこで同胞が所詮助からぬから殺してくれと頼むので、殺して遣つたと言つた。

此の話は翁草に出てゐる。池邊義象さんの校訂した活字本で一ペニジ餘に書いてある。私はこれを讀んで、其中に二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一つは財産と言ふものの觀念である。錢を持つたことのない人の錢を持つた喜は、錢の多少には關せない。

人の欲には限りがないから、錢を持つてみるといくらあればよいといふ限界を見出されないのである。二百文を財産として喜んだのが面白い。今一つは死に掛つてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣れば即ち殺すと言ふ事になる。どんな場合にも人を殺してならない。翁草にも、教のない民だから、悪意がないのに人殺しになつたと言ふやうな、批評の詞があつたと記憶する。しかしこれはさう容易に杓子定木で決してしまはれる問題ではない。ここに病人があつて死に瀕して苦んでゐる。それは救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縦令教のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと言ふ情は必ず起る。ここに麻酔薬を與へて好いか悪いかと言ふ疑が生ずるのである。其薬は致死量でないにしても、薬を與へれば多少死期を早くするかも知れない。それゆゑ遣らず置いて苦ませてゐなくてはならない。從來の道德は苦ませて置けと命じてゐる。しかし醫學社會には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦むものがあつたら、樂に死なせて、其の苦を救つて遣るが好いと言ふのである。これをユウタナジイといふ。樂に死なせると言ふ意味である。高瀬舟の罪人は、丁度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。

かう思つて私は「高瀬舟」と言ふ話を書いた。中央公論で公にしたのがそれである。」

此の「縁起」に出てゐる「翁草」の文章と言ふのは左の通りである。

流人の話

流人を大阪へ渡さるに、高瀬より舟にて、町奉行の同心之を守護して下る事也。凡流人は前にも記すごとく、賊の類は稀にして、多くは親妻子もてる平人の古辛に遇る也。罪科決して島へ追はるる節、牢屋敷に於て親戚の者を呼出し引合せて暇乞をさせらるる定法也。故に親戚長別して舊里を出る首途なれば、己がどち、船中にて夜と俱にし越方行末の事を悔て愁涙悲嘆して、かきくどくを守護の同心、終夜間につけ、哀傷起り心をいたましむることなるに、或時一人の流人、公命を承るや否、世に嬉しげに、舟へ乗りてもいささかも愁る色不見、守護の同心之を見て、卑賤の者ながら、よく覺悟せると感心して、船中にて彼の者に對して稱嘆するに、彼云く、常に僅の營に渴く粥を吸りて、露命をつなぎしに、此御吟味に逢ひてより、久久在牢の内、結構なる御養ひを戴き、いたづらに遊び暮し、冥加

なき上に、剩此度鳥目貳百文を下され（流人に鳥目貳百銅づつ賜る事古來定例也）ただ鳥に遣はさるる事、如何なる果報にて此如かりやと是迄二百文の錢をかため持たる事、生涯に覺え申さず加程過分の元手有之候へばたとへ鬼が鳥なり共、一つ身の凌ぎはいかやうにも山來可申候。素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候へば、都に名残は更になく候とて、悦ぶこと限りなし。此者西陣高機（西陣高機）の空引に備れありきし者なるが、其の罪蹟は兄弟の者、同く其日を過し兼ね、貧困に迫りて自害せしかど死（死）兼居けるを此者見付て、逆も助かるまじき林なれば、苦痛をせんよりはと、手傳ひて殺しぬる其科に仍鳥へ遣はさるる也とぞ。其所行もとも惡心なら、下愚の者の辨なき、仕事なる事、吟味の上にて、明白なりしまま死罪一等を宥められし物なりとぞ。彼守護の同心の物かたり也。

（翁草百十七ノ八）

尙、翁草（オキナグサ）といふのは神澤貞幹（彼はもと入江氏、幼時京都町奉行與力神澤貞宜に養はれ、長じて養父の職をついだ）が、病弱のため辭職退棲して専ら著述を業とした人。寛政七年歿、享年八十六。著の隨筆で、二百卷二十一冊の大部のものである。中古以來寛政頃までの百般の事象に亘り、ことに著者の親しく賭聽した事を悉く記録したもので、中には當時流傳稀な寫本類からの抄寫加入もあつて、一種の叢書の様な趣を存してゐる。

次に本課に續く後半の大意は左の通りである。

羽田が更に弟殺しの事情を包まず聞かせてくれと言ふと、喜助は次の様に語つた。

「早く兩親に分れた兄弟二人は互に助け合つてこれ迄生きて來たが、去年の秋に弟は病に倒れて北山の獨立小屋に寝つき、自分は仕事歸りに食べ物を買つて歸るのを常としてゐた。或る日歸つて見ると、弟は血まみれになつてゐるので、驚いてきましただと、どうせなほらない病氣だから早く死んで兄さんらしくをさせたい。刺刀で切りそこねたから、どうか手を貸して抜いてくれ、さうすれば死ぬるからとの事であつた。私が醫者を呼ばうとすると、苦しいから早く抜いてくれ頼む頼むと、弟はしきりに催促する。早く早くと、怨むやうに憎むやうに目でせがむので、たうとうその言ふ通りにしてやつた。刺刀の柄を引くと弟はすぐと息が切れたが、その時丁度近所の婆さんが來て、その様子を見たのです」

羽田はこれをきいて、どうせ自殺を企てた弟を、早く苦から救つてやらうとして命を絶つたが、果して罪であらうかと疑つた。自分の上司の判断に従ふより外はないといふ念と共に、まだ膽に落ちぬものがその心に残つた。

次第に更けて行く臙夜に、沈黙の二人をのせた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。次に鷗外の作物に對する西尾寛氏の言を左に引用しておかう。

鷗外の作品を一見すれば、その特色は作者の人生に對する態度が著しく傍觀的であり、その手法が客觀的であつて、容易に作者の自己を出さぬ所にあるやうに思はれる。そして作品をもし作者の人間で書くそれと、腕で書くそれとに分けるならば、鷗外の作品は腕で書かれた作品の種類に屬するやうに思はれる。しかしそれは未だ作の真相ではない。傍觀者の立場をとればとる程、客觀的になればなる程、益々作者鷗外の全人がそこに生かされて來るのが鷗外作品の特色である。この傾向は殊に晩年の作品に於て著しい。鷗外晩年の小説は、筋が確實に緊密に連んでゐる點に於て、又人物の性格なり、事件の發展なりがいかに簡潔に、いかにも明白に描かれてゆく點に於て、たしかに腕の冴えを示してゐる。しかし親しく讀み返して見れば、それは單なる腕の冴えではなくて作者その人の觀照の冴えであり、人間の冴えである。その結果作中の、物の行動が、風手が、性格が、單純化せられて、しかも立體的に描き出され、その一が内面的なものの表示として、發展として作中に生き動いてゐる。この點に於て、鷗外の作品は繪畫的であるよりも彫刻的である。又さういふ人物や事件の背景として描かれてゐる敘景にしても、簡單な一句が主人公の運命を暗示し、讀者の心を作の世界に同化させて連れて行く如き特質をもつてゐる點に於て、そこに寫實の精しさよりも象徴の深さがある。

（岩波講座、「日本文學」、「現代文學鑑賞」）

一七 詩 境

夏 目 漱 石

一 解 題

1 作 者

夏目漱石 ナツメソウセキ 本名金之助。英文學者。小説家。慶應三年正月江戸馬場下（現牛込區喜久井町一番地）に、名主夏目小兵衛直克の末子として生まれた。三歳の時養子に遺られたが數年後實家に歸つた。一ツ橋中學校（東京府立第一中學校の前身）を半途退學後二松學舎・成立學舎に學び、明治十七年東京大學豫備門豫科（第一高等學校の前身）に入り、二十一年本科に入り、二十三年卒業、帝國大學文科大學に入學、英文學專攻、特待生となつた。明治二十六年大學卒業、更に大學院に入學。高等師範學校（東京高等師範學校の前身）・松山中學校・第五高等學校に教鞭を執り、三十三年文部省の命により英文學研究の爲英國へ留學。三十六年歸朝。第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師となつたが四十年一切の教職を辭し、朝日新聞社員となり、文藝的述作を同紙上に掲載することとなつた。四十二年滿洲遊行、翌年胃潰瘍の爲吐血して重態に陥つたが、この大患によつて人及び藝術上に一轉機を來した。四十四年博士號辭退。大正五年十一月胃潰瘍の爲大出血二回、十二月永眠した。享年五十。

明治二十四年頃から句作に専念して正岡子規と交遊が厚く、俳壇にも一地位を占めてゐた。三十八年一月から「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載して一躍文名を轟かした。三十六年から繪筆を弄び 歿年なる大正五年頃も頻りに書畫をもつてゐる。又大正五年夏から秋にかけては漢詩を多く作つた。

著作は「夢十夜」「倫敦塔」「薙露行」「坊ちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」「心」「硝子戸の中」「道草」等があり、隨筆「明暗」は未完のまま遺された。小説・俳句・書簡・紀行・小品・批評・隨筆等總べて漱石全集に收められてゐる。

その作風は初めは著しく浪漫的な色彩に富んだものが多く、當時の文壇の主潮をなしてゐた自然主義的傾向の外に超然として筆を驅り、餘裕派・低徊趣味等と評せられてゐたが、後次第に寫實的傾向に深まり、「三四郎」「それから」以後、漸く本質的の鑛脈に掘り當てたやうに、内へ内へと深く心理解剖を掘り下げて行つた。かくの如くして作者の發見したものは、人間の性格に根強く培はれてゐる自我主義であつた。自我主義の發見は、作者をまず一厭世家にし、人間嫌ひにした。けれども最後の「明暗」を書く頃、作者は心境上更に一飛躍をして、則天去私といふ廣い人間愛の方へ考へ方が向つてゐた。

2 出 典

漱石全集中の「草枕」から抄出。「草枕」は明治三十九年九月刊行の「新小説」に掲げられた作で、全篇十三章からなつてゐる。本課は其の第一章の前大半を抄録したものである。「草枕」は四十年一月「坊ちゃん」「二百十日」と共に「鶉籠」と題して春陽堂から出版され、又單行本としても同書店から出てゐる外、新舊の全集及び二三の文庫本の中にも收められてゐる。その筋をせば左の通りである。

三十才位の畫家が、非人情の境地を味はふ態度で、那古井の温泉、志保田に逗留する（これは假想の地であるが、一體この草枕は著者が熊本の高の教授であつた際、明治三十年十二月末の休暇を利用して、一友人と共に同地の玉名郡小天温泉で越年した時の旅行を素材にしたものである）そこに廿七八になる那美さんと言ふ出戻りの美人がある。人々にはき印と言はれてゐる通りの變り物で、畫家を相手にして種々な交渉があり、波瀾がある。畫家はその肖像をかきかきと思ふが、顔の表情に統一がないので畫に出來ず煩悶する。

所が、その中に那美さんの従弟が満洲へ出征することになり、人々は停車場に見送る。その最後の車窓から、茶色の巾着を冠つた顔の男が顔を出して、名残惜しげに美那さんを見た。見られた女は茫然として之を見送つたが、その顔にはかつて見られなかつた「憐れ」が一面に浮いてゐた。之を觀取した畫家は咄嗟に胸中の畫面を成就する。(その間に骨董好きの那美さんの親父、ひとり那美さんに感心してゐる觀海寺の大徹和尚、その弟子の口達者な小坊主了念、東京から流れて來てゐながら日本一の腕自慢をする床屋などのことが描かれて、それぞれの特長を示してゐる。尙さきの畫面の男と言ふのは、那美さんの先夫で、土地の銀行の頭取であつたが、戦争の飛沫をあびて破産し、満洲へ出かせぎに出るのである。)

筋は右の通りであるが、この作品は著者の人生觀藝術觀を述べた所に要點がある。漱石の言ふ通り、その内容・構想・表現等に於て創意が示されてゐる。當時の文壇に喧しく言はれて居た自然主義者の「人生に觸れる」と言ふ事に對し、その皮相的半面的暴露的態度に慚らず、觀照に距離と餘裕との必要な所以を物語風に力説したものである。所謂餘裕のある徘徊趣味、低徊趣味の小説である。

その文章は歐文脈の句法と俗語と漢語の成句とが巧みに調和された美をあらはして居り、才氣縦横の創作である點で「坊ちゃん」と共にその初期の作風を示す代表作である。(作者は之を脱稿するのに僅か一週日を要したにすぎないと言ふ。如何に油の乗りきつてゐたかが想像されよう。)

3 主眼及び採擇の趣旨

草枕に就いては漱石自身次の様に言つてゐる。

「私の草枕はこの世間普通にいふ小説とは全く反對の意見で書いたものである。唯一種の感じ——美しい感じ。が讀者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。……」

即ち唯讀者に美感を感じさせることが出來ればそれでよいと言ふのであるが、本課に於ては更に漱石の藝術觀・人生觀・

自然觀を鑑賞させ、東西兩洋の詩の比較から到達しえた詩境の何物であるかをも味讀させ、以て本時代に獨自の地位を占める漱石の文藝が如何なる特色をもつものであるかも理解させたい。

二 解 釋

1 語 釋

【山路を登りながら、かう考へた】この發端の句はなかなか趣がある。いかにもくだけてゐて輕妙である。生徒は既に卷一で、「おいと聲をかけたが返事がない」(峠の茶屋)と言ふのを學習してゐる筈であるが、漱石の作品はことに草枕の各章の句は大抵同類同種の味のあるものである。

【智に働けば角が立つ】これは以下の二句と對比して味はふべきものである。即ち心理學者が心の働きを智情意の三つに分けることにしたがつて述べ、しかも夫々修辭をこらして重複をさせた表現をとつてゐる。

情に 働けば、角が立つ。
情に 桿させば、流される。
意地を 通せば、窮屈だ。

さて本句の意味は、人はともすれば智情意の中何れかに偏し易いものであるが、もし理智の働きだけにしたがつて人情その他の方面を閑却すると、萬事圓滿を缺き、世

の中が人との交際がいかに角ばつたものになると言ふのである。なんでも道理で押し通し、すべて理窟に合はないものは決して取りあげないと言ふ態度、それは成程それで正しいし、間違はないかも知れない、然しそれは温かみやうるほひと言ふものがなくなつて、ひややかな味のない生活、圓みのない角ばつた交際に陥つてしまふと言ふのである。世の中にはさう言ふ人も決して少くないし、又考へて見るとさう言ふ場合は随分と多いものである。なほ「角が立つ」は何でも合理的一點張の人に見られる趣を遺憾なく示してゐることに注意。

【情に桿させば流される】それかと言つて、感情の動くままに舵をまかせて人生と言ふ大海を渡らうとすれば、即ちそこに理智や意志の力の取締がないと、忽ち押し流されてしまふと言ふこと。一つの比喩で桿さす、流されると言ふ縁語を連ねたのである。しかも情に溺れてするすると知らぬ間に深か入りし、遂に取返しつかなくなる這般の事情が、「流される」と言ふ語によつて生きてゐる

【意地を通せば窮屈だ】 又意志の強固なのを自慢にして、どこ迄も意地で突張らうとすると、やがては自縄自縛で非常に窮屈な思ひしなければならなくなるといふこと。上の二つは智と云ひ、情といつたが、こんどは意地と二字を使つて變化をみせてゐる。

【兎角に人の世は住みにくい】 だから、いづれにしても、人間社會は住み憎いものであるといふ意。「兎角に」は、とあつても、かくあつても。即ち智・情・意の何れに従つたにもせよの意。「人の世」は上の智・情・意からまじめられたものであり、「住みにくい」は「角が立つ」「流される」「窮屈だ」に應ずるものである。そんなら智情意の三者をうまく統一して行けばよいぢやないかと反駁するかも知れない。なる程理窟はさうである。然しさう言ふ事を早速言ひ立てる人は、即ち智に働く人なのである。勿論さうすればよいにきまつてゐるが、人である限りなかなか思ふ様には行かないのが現實なのである。したがつてこの想の基底には、「どうか人は智情意の何れかに傾き易いものであるが」と言ふ事が前提となつてゐる。

【高じると】 カウじるとは、つゝること、高まつてくること、怵へきれない程度までひどくなること。

【易い所】 住みやすい所、住みよい所。

【どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて、畫が出来た】 この詩と言ふのは廣義のもので文藝の謂である。「詩が生まれて」の「て」は順序を示すものではなく、「詩も生まれれば畫も出来る」と言ふ程の意。さて詩や畫の發生起源、ひいては藝術の人生に於ける意義等についてこれから述べようとするのであるが、漱石の考によると、人の世は住みにくいと言ふ事が前提で、而もどこへも引越すことが出来ないと言ふ事を悟つた時、その一つの救として要求されるものこそ、藝術であると言ふのである。しかし漱石は別に「文藝の哲學的基礎の中で自然と人間との關係を意識したいと言ふ理想を實現する」一方法として詩は生まれるものである事を説いてゐる。謂はば人の本能とも言ふべき意識の作用に藝術の起源はあると説いてゐるのであるが、それとことは少し趣を異にしてゐる。これは碎いて常人にも理解し易いことを求め、ことに草枕の作意から見て、當時の自然主義的作家の猛省を促さうとするところに本義があるのであるから、かう言ふ様な述べ方をしたものと思はれる。

【神でもなければ鬼でもない】 人間以上、以下の代表として夫々神と鬼とを取り上げたのであつて、その何れでもないと言ふことは、結局はその中間に位する人間であると言ふことになる。そこで下文につづくのである。

【束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ】 宇宙の永遠なのに比べると、人の命などと言ふものは、ごく短いものであるが、其の短い命の中の、更に短い束の間でもよいから、住みよいものにならなければならぬといふ意。束の間（ツカのマ）は暫しの間。「束」は四本の指で握んだ程の長さ。古くは物の長短をはかるに之を以てしたのである。（十二束三伏の箭などと言ふのもそれである）その空間的の呼稱を時間的にうつしたことが「束の間」である。

【天職が出来て……使命が降る】 詩人や畫家の役目を天から授つた職分、天から與へられた使命と見ての表現をとつたのである。後の藝術の士といひ、……するが故に尊いとあるのにひびいてゐる。

【住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である、畫である】 かう言ふ考と、かの自然主義的文藝、ことに當時人生の眞實を寫すのが文學であるとして、ことさらこのんで醜惡な陰慘な方面を描かうとしてゐた日本の自然主義作家とを比較すれば、そこに甚しい差があることに氣づくであらう。【こまかに言へば寫さないでもよい】 藝術は表現である。したがつて、文字文章・色彩・音調等の具體的形をとつて始めて藝術品と言ふことが出来るのであり、そこに詩

人・畫家・音楽家等が存するわけである。故に無聲の詩人・無色の畫家と言ふのは、ことばとしては實に面白いが、事實としてはその存在は許されない苦のものである。然しこの邊になると藝術論と言ふよりは、むしろ人生觀とも言ふべきところまで想が進んでゐるのであるから、その意味では俗人凡人と藝術家との中間に、無聲や無色の詩人・畫家を考へて見ることは至極面白いことであると思ふ。

【唯まのあたりに見れば】 この客語は上文の住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、「有難い世界を」である。尙この邊の文脈は

こまかに 唯まのあたりに見 そこに詩も生き歌
言へば寫 著想を紙に落さず 琴鏘の音は胸裏に
ささないで とも、 起る
もよい 丹青は畫架に向つ 五彩の絢爛は自ら
て塗抹せずとも 心眼に映る。

唯己が住む世を……となり、初の二つは詩歌に就いてのべ、最後のは言ふ迄もなく畫について言つたものである。そして、それは前文の「詩である、畫である」を受け、更に後文に對しては「無聲の詩人」「無色の畫家」につながつてゐるのである。

【著想を紙に落さずとも】 思ひついた想を筆に託し、文字文章に現はして紙の上へ書き記さなくても。「著想」は胸にうかび、心に湧いた思ひつきを言ふ。

【瑔鏘】 キウサウ 「瑔」は玉のふれ合つてなる音、「鏘」は金屬の響。ここでは詩的の妙なる旋律が、胸の琴線にふれてなりひびいてゐる形容。

【胸裏】 胸の中、胸裡。

【丹青】 タンセイ 赤と青との色。轉じてはひろく色彩を言ひ、繪の具、又は繪のことをも言ふ。ここは繪の具。

【畫架】 グワカ 畫布を立てかける三脚。

【塗抹】 トマツ 塗りつけること、彩色すること。「抹」はぬること、ぬりけすこと。(一)抹、抹殺)

【五彩の絢爛】 ゴサイのケンラン 「五彩」は青黄赤白黒の五色の色どり、五色。「絢爛」はあやがあつてきらびやかなこと、轉じては詩歌文章の辭句の豊麗なこと。ここは兩者で、繪畫の色とりどりの目もあやな華麗さを言ふ。

【自ら心眼に映る】 「心眼」と言ふ語に注意。紙に落さない著想、畫布に塗抹しない丹青は所謂目には見えない。然し精神的な無形な心眼(物事を觀察し、又はみわけける心力。肉眼の更に根柢をなす觀察主と考へて心眼と言ふのである)には自然と映ると言ふのである。即ち胸中心中にはまざまざとその妙音を奏で、靈筆を描いてゐること。

心の中だけでは具體的な姿を示してゐること。
【かく觀じ得て】 上文の有難い世界と觀じ、下文の清いうちらかな姿と見ること。

【靈臺方寸のカメラ】 「靈臺」は靈魂の宿るうてな、即ち精神のあるところ。靈府。莊子に「不可内於靈臺」とある。「方寸」は一寸四方、無形の心を寸法で現した具象で、胸中の心のこと。カメラ(Camera)は寫眞機の一部の暗箱。心が五官を使つて外象を感知するのを、恰も寫眞術に於て暗箱が外象を映すのに似てゐるのでかく喩へたのである。全體で結局「心」のことである。其の比喩は趣き深くしかも斬新である。

【澆季濁濁】 ゲウキコンダク 末世になつて道德風俗は頹廢しにこりきつたこと。「澆」は薄いこと。「澆季」は末世の世、末世のこと。佛教上で釋迦の入滅後、正法・像法に次ぐ末法の世のこと。即ち道德廢れ、人心の亂れた世。「濁」はにごること、けがれること。ともに俗界、俗世間、現實の浮世に對する修飾語。

【うららかに】 はつきりと、さつぱりと、うるはしく。

【收め得れば】 收めるは「カメラに」の縁語。心に寫しとることが出来れば。

【無聲の詩人】 詩人は歌つてこそ詩人なのであるが、歌はなくとも詩想を十二分に蓄へて居れば、即ち胸裏に瑔鏘

の音が奏でられてゐれば、それも亦詩人と言ふことが出来る。と見、しかし聲の無いところが普通の意味の詩人とは異なるので、無聲の詩人といつたのである。

【無色の畫家】 これも全く右の句と同趣のものである。繪心は十二分に持つて居り、心眼には五彩の絢爛が映つて居ても、實際には繪筆を執つて彩色しない、即ち繪をかかない、無色の畫家のこと。

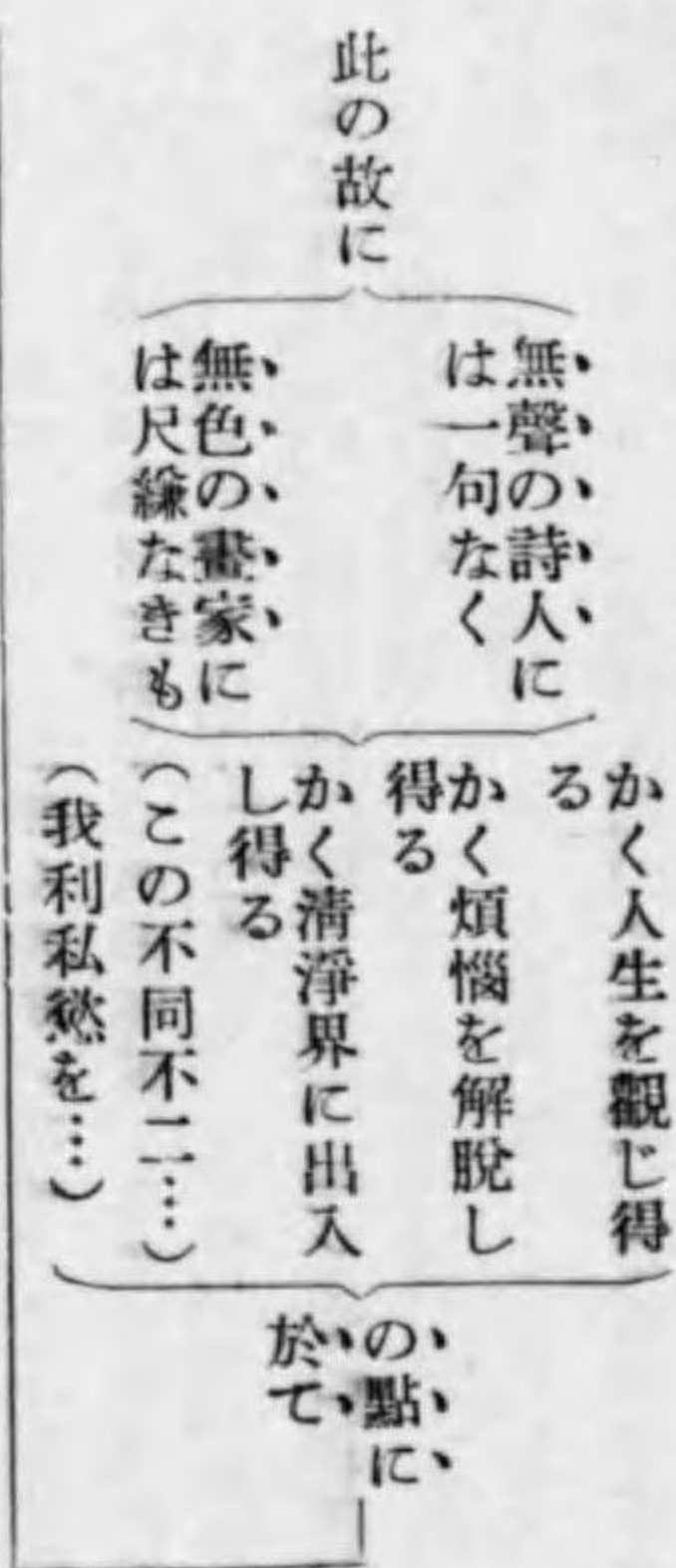
【尺練】 セキケン 僅少な繪絹。「」は直接には一尺のことであるが、ここは些少の意。「練」はキヌ、カトリギヌのこと。此の兩句は對句と反覆とが用ひられ、相當の技巧がこらされてゐる。

【煩惱】 ボンノウ 佛教語で心身をなやます一切の妄念。

【解脱】 ゲダツ これも佛教語で、煩惱から脱して憂のない安らかな心境に達すること。

【清淨界に出入し得る】 シヤウジャウ界とは清らかな世界で、利慾にけがれた俗界に對して言ふ。これは別に俗界かれ離れた他の處にあるわけではなく、人の心のもち方人生觀の如何によつて、俗界の中の住みにくさ、けがれたもの、きたないものを引き抜いた残りの世界にだけ着眼すれば、その人だけにはその心中に清淨の世界が出来上るわけである。そこに出入(ここは入の方に重點がある)するとは、これも精神上の事柄で、俗念妄念になや

まさされて朝夕くるしんでゐる俗人とは違つて、かくの如き清淨を心に書きうる人は、その世界に遊ぶことが出来るわけであるから、出入し得ると言つたのである。この次に左の省略がある。
「又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、——千金の子よりも、萬乗の君よりも、」
【俗界の寵兒】 俗界に於て寵兒としてもはやされてゐる人。寵兒(チヨウジ)とは時運にあつて今をときめく人。幸運兒のこと。以上の文脈は



(千金の子)
(萬乗の君)
あらゆる俗界の寵兒
右の様になる。平易に言へば、俗界に居りながら、俗界の濁濁を去つて、美の世界をまのあたりに見うる人は、俗

界の（富豪より大官より）あらゆる幸運兒よりも幸福だといふこと。

【二十五年にして……三十年の今日は……】この二十五歳の時の考と、三十歳の今日の考との間にどれだけの差異があるであらうか。二十五歳の時の悟り、即ち明暗は表裏の如く、日のあたる所には蛇度影がさすと言ふことは、物事は決して單純なものではなくてすべて物には表裏があることを悟つたわけである。これは二十の時に、單に此の世は生甲斐のあるものだと思つたよりは、一步進んで、世の真相にふれて來たわけである。然し三十の時は一歩進んでゐることがわかる。即ち「喜の深きとき憂愈、深く、樂の大いなる程苦も大きい」と言ふのであるから、喜や樂と共に喜の裏の憂、樂の裏の苦を知つてゐるばかりでなく、（それに止るならばそれは二十五歳の悟りである）、更に喜が深ければ深い程その裏の憂が深く、樂が大きければ大きい程、苦も亦それだけ大きいと思ふ様になつたわけで、ここに單に物の表裏を悟つたところから一步を進めて、それらの相互關係の把握に迄進んでゐることがわかる。これが二十五の時と三十の今日との差異である。尙「三十の今日は」と言ふ語でこの主人公の年齢が示されてゐることに注意したい。

【之を切り放さう……片付けよう……】技巧のこらされた

措辭である。

【金は大事だ……】これが現在の考の具體的説明の一つである。大事な金が殖えることは喜であり樂しみである。然しそれが殖えれば殖えるほど、失ふまい、とられまいとして寝てゐても心配する様になる。即ち裸一貫のものに比べて、喜び、樂しみが深く大きいだけ、それだけ憂と苦とが甚しいわけである。次の關係、うまい物の引例も亦同斷。尙「心配だらう」の次に「戀はうれしい、嬉しい戀が積もれば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかる」を省略。

【關係】カクレウ 内閣諸大臣のこと。尙この引例ではその重責の方だけをのべて他を省略し、以て文に變化を求めてゐる。言ふ迄もなく、高位高官と言ふ點では、關係等は先づ人の羨望する喜であり、樂でなければならぬ。然しその反面にはかくの如き重責があつて、そのまた苦勞は一通りでないことを言つてゐるのである。

【存分】ソンプン 思ひのまま、思ふ存分。
【余の考がここまで漂流して來た時に】冒頭の「山路を登りながら、考へた」に應ずるものである。漂流（ヘウリウ）は（一）漂ひ流れること。（二）さすらひあること。ここはその考がここまでたどりついたこと。低徊趣

味の表れである。

【坐り】 スワリ

【角石の端】 カクインのハジ

【平衡】 ヘイカウ 釣合ひ、平均。

【肩にかけた繪の具箱】 これでこの主人公は畫家であることがわかる。

【立ち上る時に】 前に「余の腰は……おりた」とあるのに應ずる。

【だんだら】（一）段のいくつもあること。だんだん。（二）だんだら染、即ち違つた色で横筋にそめること。又その模様。（三）だんだら縞、即ち違つた色糸で織つた横縞のこと。ここは根もとから頂までの蒼黒い森を一つの布と見れば、その所々に山櫻がさいてゐるのが、恰もだんだら染の様に見えること。そしてその地の蒼黒さと櫻色との織目がわからない位に濃くたちこめてゐるのである。これで季節は春であることが明瞭である。

【巨人の斧で削り去つたか】 巨人が斧でもつて削り去つたのでもあらうかと思はれるくらゐ鋭い平面を見せてゐること。

【やけに】 「やけ」は俗語で望みを遂げられないので、思ひやけるが如く、自ら甘んじて振舞ふこと。是非をかへりみないこと。やけくそ、やぶれかぶれ、すてばち。自暴。

ここは巨人がやけくそのあまりにやつたかと思はれる位徹底的に谷底までいつてゐることを言つたもの。

【天邊】 テツペン 頂上のこと。（五重塔の課参照。）ここは禿山の頂である。

【赤い毛布が動いて來る】 赤い毛布をきた人がやつてくること。

【時つて】 ソバダつて

【向うで聞かぬ上は】 石の方で言ふことをきいてのいてくれない以上は。

【一間幅を三角に穿つて……】 中央の窪んだ山路を描きえて妙。

【固より急ぐ旅でないから……】 かう断らなくても、今迄よんで來た所でその畫家の風姿は十分察せられる。然しとくにかう明言してぶらぶら七曲へかかると言ふのが、次の忽ち足の下を一層よく生動させてゐることに注意したい。

【忽ち足の下で雲雀の聲がし出した】 ここは山上であるから文字通り脚下に露雀の聲をきいたわけであるが、その驚きをうつして讀者のものとさせ、筆路一轉、文に變化あらしめたものである。

【影も形も見えぬ】 「影」は姿のこと。したがつてつまりは同じことになるが、平談の語をそのままとつて句調をた

すけたのである。

【方幾里の空氣が……氣がする】「方幾里」は幾里四方のこと。「わたたまれない」はじつとして居られないこと。あの小さい雲雀が小刻みにかん高く鳴く時の、そこら幾里四方の空氣の有様を人が蚤にさされて痒さにもがく心持にたとへたのである。比喩斬新、趣ある上に洒落味も加はつてゐて一層面白い。ことに雲雀のありかがわからないことに注意。

【長閑な春の日を……】長閑な、しかも長い長い春の日を一日中鳴きつくし、更に夜中鳴いてなき明かし、更に又あくる日も一日鳴いてなき暮すこと。前に「せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる」は間断のないせはしさを述べ、こんどはそれが何時迄も長くつづいてゆくことを言つたものである。

【雲雀はきつと……】前の「どこまでも昇つて行く、いつまでも昇つて行く」をうけて、更にこんどは空想に入つて行つたのである。長閑な春の日の山路で、心を別天地に遊ばしてゐる畫家にはいかにもふさはしい空想であるが、これ即ち漱石の得意の一面でもある。「擧句」はもと連句の最後の句を言ふのであるが、轉じてすべて終局の意に用ひるのである。

【落ちる雲雀と……】去來の「時鳥鳴くやひばりの十文字」

や、芭蕉の「雲雀より上に休らふ峠かな」などを腦裡にうかべながら筆を進めたことであらう。

【春は眠くなる……】「忽ち足の下で」にも増して突拍子な書きぶりである。單に一作一章の冒頭だけに奇抜な辭句があるばかりでなく、一章の各段落の始にも亦人の意表に出る起筆が多いことがこれでわかる。更に「猫は鼠を捕ることを忘れ」と進み、「人間は借金のあることを忘れる」と轉じたその奇抜さ。これで讀者はいよいよ俗念妄念を忘れざるをえなくなり、残るは「美しい感じ」だけになるわけである。

【唯菜の花を……雲雀の聲を】猫や借金に筆を轉じて甚しく前と離れたと思つたら、いつのまにか又菜の花、雲雀と關係がついて來た。讀者も亦目がさめ、文意のありかが判然としてくる。

【口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものうちで】鳴くのは口で鳴くのきまつてゐる。然し所謂至藝名技の人々がみな、手で書かず、筆で描かず、喉で語らないのと同様、あの雲雀の元氣な絶え間ないなき聲は決して口先だけで鳴くのではなく、魂全體をゆり動かしてのことだと見たのである。魂の活動が聲にあらはれたもの」と言へば、名人の至藝の語、長唄、常盤津、浪花節等々はみなこれに屬するであらう。

作者は勿論これ等と比較してゐるわけではなく、鳥のなき聲の中では、もつとも雲雀のなき聲が元氣にみちみてゐて最高であることを稱揚したまでである。

【かう愉快になるのが詩である】愉快になつただけでは勿論詩ではない。然しその心境こそはずでに詩境であり、詩人の詩的情緒と同一なものであり、詩想・詩情に他ならないといふこと。

【忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して】又轉じた。然し前に「雲雀の鳴く聲……あゝ愉快だ、……かう愉快になるのが詩である。」とあるのをうけて、シェレーの雲雀の詩を思ひ出したのであるから、意表とは云へ、一聯の脈を有する進展である點が面白い。

シェレー (Rercy Bysse Shelley) は英國十九世紀前期の抒情詩人で、バイロン・キーツと共に三大詩人と稱せられた天才である。彼は富貴な名門の子として生まれながら、一生不遇であつた。牛津大學に入つたが「無神論の必要」と言ふ文をを書いて學校を逐はれた。後に肺を病んでイタリーに出かけ、スペチヤ灣で舟が顛覆して溺死した。年三十一。彼はその多情多恨な性格の結果不遇を招來したらしいが、若年で非業の死を遂げた事は惜しい。「雲雀」「西風によす」「雲」「アドネエス」「アラスター」等の諸篇、及び戯曲「チェンチ」「放たれたプロメシウ

ス」等の名作がある。

その雲雀の詩 (Ode to a Sky-lark) は一八二〇年(我が文政三年)の夏イタリーで作られたもので、彼の詩篇中最も廣く愛讀されたものである。二十一節からなる長詩で、本課引用の箇所はその十八節である。

We look before and after
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain in fraught;
Our sweetest songs are those that tell
Of saddest thought.

これは十六節以下が雲雀の讚美となつてゐる中、人間の歌との比較をした所で、吾々の眞實の心の底からの笑、即ちうれしいのしい歌(腹からの笑)であつても、みんなかなしい、さびしい思想をかたつてゐるもので、とてもあのひばりの鳴き聲の純な深いよろこび、一心不乱な叫聲には及ばないことをうたつたものである。

【萬斛】パンコク「斛」は十斗。石に同じ。
誰知一寸心、乃有萬斛愁。(庚信)
學瓢更取三三漿、酌一洗胸中萬斛愁。(苑浚)
【凡骨】ボンコツ 凡人、俗人のこと。老人を老骨とも言ふ。

【暫くは路が平で】 こんどは四圍の敘景に筆先を轉じてしばらくは讀者の心氣をあそばせるものである。文の一つの變化である。

【雜木山】 ザフキヤマ 種々の雜木の繁つてゐる山林。

【蒲公英】 タンポポ

【のして】 伸して、發展させて。

【真中に黄色な珠を擁護してゐる】 たんぼぼの黄色い蕾を珠と見たて、それを四方へのびた葉がまもつてゐると擬人化したのである。これがやがて「氣の毒な事をした」にひびいて、一層その句が生きてくるわけである。

【鋸の中に鎮座してゐる】 珠をこんどは神様扱ひにしてゐる。鋸の葉の中央にの意をあらはすのに「鋸の中にはやや突飛な表現である。

【暢氣】 ノンキ

【微塵】 ミチン (一)こまかなちり。(二)微細なものやこと。

【櫻も——櫻はいつか見えなくなつた】 このダツシュ以下の斷りによつて、ずつと櫻のんだらが見えてゐたことを示し、又想と景との關聯がいかに實感的になつてゐる。

【草臥れて】 クタビれて 疲勞すること。
草臥れて宿かる頃や藤の花 (芭蕉)

【見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦も起らぬ。起るとすれば……】 尻取りの反覆法で、連鎖法と言はれる修辭である。

【此の景色が——腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ此の景色が】 上の句を更に細説したためのダツシュであることは勿論だが、その説明が洒落氣をふくみ、軽い諷刺の句をも漂はせてゐて、いかにも漱石らしい所がある。

【瞬刻】 シュンコク 瞬きする程のきはめて短い時間。刹那、瞬間。

【醉乎として醉なる詩境】 醉の醉なる詩境の意で、詩的境地の中でも特に純粹なものであること。「醉」はまぢりけのないこと。純粹なこと。

【此の境を解説することを知らぬ】 人情や理非から離脱することがないことを言つたもの。解説(ゲツツ)は佛語で煩惱から脱して憂ひのない安らかな心境に達すること。

【浮世の勤工場】 此の世の中を一つの勤工場とすれば、同情も愛も正義も自由もみなそこにありふれた品々であると言ふのである。勤工場(クワンコウバ)とは一建物内に多くの商店が各自商品を陳列して販賣する所のこと。今なら早速デパートと言ふ語が用ひられる所である。しかし當時は勤工場と言ふ事柄も言葉も文化的のものとして新しいものであつたものである。

【シュレーが雲雀を聞いて歎息した】 前掲のシュレーの詩をさしてゐる。あれは既述した通り、人間の詩歌をひばりのうたに比較するとき、到底及びえないことをうたつたものなのである。

【採菊東籬下 悠然見南山】 この句は淵明の飲酒(二十首)の中の第五の詩中のものである。

句の意は、東籬の下を歩いては菊を愛し、俯しては之を採る、たま／＼頭を擧げると思はず南山の景色を見る。

(景と情と相融合し、手裡の菊を忘れて、悠然と遠く南山翠微の景を見る。その閑遠自得の趣、古來詩人嘆唱の句である)

結廬在入境、而無車馬喧、
問君何能爾、心遠地自偏、

○採菊東籬下、悠然見南山、
山氣日夕佳、飛鳥相與還、

此中有眞意、欲辯已忘言、

【獨坐幽篁裏……】 これは王維の詩輞川二十景の一の竹里館の句である。彼は同所に別墅をもつてゐたが、竹里館はそこにある奇勝の名の一つである。彼は裴迪と其の中に遊び、詩を賦して相酬し各二十絶句ある。これはその一部である。
幽篁(イウクワウ)の裏は幽なる趣をもつてゐる静かな

竹林の中。「篁」はタカムラ、即ち竹苗のこと。「彈琴復長嘯」、時には琴を弾じて楽しんだり、又時としては聲を長くして詩歌を吟じたり、口笛を吹いたりする。「深林人不知、然し何もかも深林中のこと故誰とて知るものは一人解するが如く)照すばかりである。

【優に】 十分に、十二分に。

【別乾坤】 ベツケンコン 別世界のこと。「乾坤」は天地のことである。浮世の俗世界とは別の清淨の世界、詩的境地のこと。

【建立】 コンリフ うちたてること。

【不如歸】 ホトトギス 徳富蘆花の小説。明治三十二年一月から國民新聞に連載されたもので、後單行本としても出てゐる。日清戦争を背景として我が國の家族制度に基づく嫁姑の問題を中心のテーマとした所謂家庭小説の代表的作品である。武男と浪子との名に於て、當時頗る世評をえたものである。

【金色夜叉】 コンジキヤシャ 尾崎紅葉の小説で、明治三十年一月から讀賣新聞に連載された。起稿以來六年をへたが未完成のまま作者は逝いた。貫一とお宮の名によつて社會的に有名なものである。
しかしこゝではこれらの作品をむしろ貶した取扱にな

つてゐる。これをもつて日本の、ことに明治の代表作としてゐるわけでも何でもない。却つて、世間の眞の文學がなんであるかをよくも知らない人々は、やれ「不如歸」が名作であるの、やれ「金色夜叉」は傑作であるのと言つてゐるが、それらがむしろ世評の割には小説として左程の價値がないと考へてゐるのである。

【功德】 クドク (一)佛語で、修業が十分出來て徳を他に及ぼすこと。(二)善行のめぐみ。ここは利益、效果、恩恵と言ふ様な意。

【汽船……禮儀】 人が此の世に生活する以上誰でも脱しえないことがらを列擧したものであつて、それに疲れるとは、結局生活の煩雜さによる疲勞である。それらのすべてを忘却することは、つまり此の俗世間をはなれた、所謂出世間的味をこの詩がもつてゐるわけである。

【二十世紀に睡眠が必要ならば】 「ぐつぐつと寢込むやうな」を受けてゐる句ではあるが、相當に人の意表に出た句である。これは世の中が所謂文明になり開化になればなる程、人はその精神を酷使することになる。したがつてその反面にまたその疲勞回復のための睡眠休息が必要となつてくる。それを心において言つてゐるのである。

【必要ならば……大切である】 此の關係は前文にあるから言ふ迄もないが、此の出世間的の詩はぐつぐつと寢込んだ

時のやうな功德をもつてゐると言ふのであるから、睡眠が必要なら、恰も睡眠にも相當するだけの働きのあるこの詩の様な詩味が大切なことは多言を要しない。

【扁舟】 ヘンシウ 小さい舟、小舟のこと。

【此の桃源に遡るものはない様だ】 此の仙境にも比すべき詩の世界までたづねる人はいないらしいとのこと。桃源(タウデン)は武陵桃源の略である。そこは奏の時代に、世をさけた人々が住んでゐたと言ふ平和で豊饒な仙境である。轉じて別天地、別世界の意にも用ひられるのである。ここも勿論一つの比喩をとつたまでである。尙ほ武陵桃源については生徒は淵明の同記を漢文の方でおそくは學習してゐるであらう。

【王維】 ワウキ 字は摩詰、太原の人。九歳にして既に文を屬するを知つたと言ふ。開元九年進士第一に擢げられ、尙書右丞に遷る。草隸に工みであり、又畫をよくした。

その名は開元天寶の間に盛んであつた。寧王薛王等に師友の如く遇された。輞川に別墅をもち、裴迪と其の中に遊んで詩を賦したことは前述の通りである。孤居三十年、上元の初七月に卒した。年六十一。

【淵明】 エンメイ 陶潛。字は元亮。晋の世の名は淵明、宋になつてからは潛と稱した。陶侃の曾孫に當る人である。性恬淡、若年の頃から識見高邁、博學拔群であつた。

晋に仕へて明の祭酒となつたが、間もなく止めて歸つた。後又彭澤の令となつたが、事に感じて「我豈能く五斗米のために腰を屈せんや」と言ひ、印綬をとき田園生活に悠々自適の生涯を送つた。門に五柳を植ゑ、五柳先生と稱した。「五柳先生傳」や「歸去來辭」をもつて生徒もよく知つてゐることであらう。

【境界】 キャウガイ 佛語で因果の理によつて人のうける境遇、又は地位の意であるが、轉じて單に境遇や地位の意にも用ひる。勿論これも後者であつて、とくにその境地、詩境の意。

【布教】 フケフ 教をしくこと。

【かういふ感興】 この王維や淵明やに見られる詩的感興のこと。

【演藝會】 エンゲイクワイ 公衆の前で芝居・講談・落語等の遊藝を行ふ會。

【舞踏會】 ブタフタワイ 所謂西洋流のダンスの會。

【ファウスト】 獨逸の大詩人ゲーテの傑作の名。第一卷(一八〇八年出版)はファウストと少女マアガレットとの説話であり、第二卷(一八三二年、ゲーテの歿後出版)はファウストの後日譚で、希臘の麗人ヘレナを點出してゐる。共に二十四場の戯曲である。森鷗外の邦譯により、當時翻譯劇として名高かつたものである。

【ハムレット】 英國の大文豪シェイクスピアの傑作。丁抹のハムレット傳説を取扱つた五幕の戯曲であつて、一六〇二年の出版である。我が國に於ては坪内逍遙の譯により沙翁劇の代表として喧傳された。

【非人情】 ヒニンジャウ これは草枕の中の中心的重要語句である。草枕一篇は換言すれば非人情の境地を描き出したものとも言ふ事が出来る程である。各所にその用語例があるが、その中に不人情と對立したのべ方の所が第九節に見えてゐる。即ち不人情は人情にもとるのであるから冷酷なものとして道德的非難の對象となるわけであるが、この非人情はそれとは異なるのである。即ち人情の世界、人間の日常生活、俗界、俗世間を離れた心持であり、所謂暑苦しい世の中をまるで忘れたきもち、浮世のすべての俗念をきれいに流し去つた心持を言ふのである。したがつてどこまでも美の世界詩の世界の問題であつて、そこが不人情とは違ふのである。前にあげた王維や淵明の詩に見られる様な世界、超然と俗世界の俗生活から解脱した別乾坤、所謂出世間的の境地が非人情の天地なのである。即ち醇乎として醇なる詩境こそは非人情の境地なのである。「願」の下には願があるばかりにかくするのだと言ふ意がふくめられてゐる。

【一つの醉興だ】 謂はば一つの醉興からだと言ふこと。

「醉興」はものすきの意である。

2 文の構成

文段は截然と明確には分ち難い。そしてそこに此の草枕の行文の特色がある。森田草平氏は草枕を評して次の様に言つてゐる。

「草枕一篇は、一方に此藝術觀を敷衍して述べながら、一方にそれを具體化して見せたものである。此議論と描寫との並行して行く所に、此作の異色があつて、こんな例は我國には從來嘗て見られなかつた。西洋にも滅多にあるまい。強ひて舉ぐれば、ギョエテの『ファウスト』とトルストイの『戦争と平和』位なものである。」

こゝでは假に之を幾段かに分けて見よう。

第一段 初—一三六頁一行迄

内面的思索の敘述であつて、藝術觀及び人生觀を春の山路を辿る畫家に託して述べたもの。

第二段 一三七頁終迄

外面描寫。

第三段 一三九頁—一行迄

雲雀の聲を中心として、外的描寫に即しながら思索をつづけるところ。

第四段 一四一頁二行迄

雲雀からシェレーの詩を思ひ出し、雲雀の叫と詩人と對比的思索、内面的敘述。

第五段 一四一頁八行迄

外的描寫。

第六段 一四二頁一〇行迄

自然の尊さ。

第七段 一四四頁—一行迄

東西兩洋の詩の比較。

第八段 最後迄

此の旅の目的、即ち草枕のテーマの提示。非人情。即ち詩境の強調。

3 文意

眞の意味の詩境の解明。

4 鑑賞批評

本課は漱石の藝術觀・人生觀が中心となつてゐるが、その表現にはまことに特殊な構想上の工夫が用ひられ、しかもその構想が、その非人情的哲理を述べるものとして、如何にもふさはしいものとして成功してゐる。即ちその時處は長閑な春景の山路であり、人は繪の具箱と三脚几を手にした青年畫家である。この時處を擇びこの人の口に託したがために、どれ程その内容が生かされてゐるかは、試みにこれを冬とし、火鉢でも圍んでの對人的な議論の形をとつた場合を想像して見ると直ちに了解出来るであらう。

次に景と情との渾融、これが又本文の特色である。これだけの内容を終始語りきかせられたならば、或る人は倦むかも知れない。然るに本文は主人公の動作、或は周圍の春景を描いてゐるかと思ふと、何時の間にか非人情的思索となり、徘徊的想念となつてゐ、又その内面的心理描寫が少しく續いたかと思ふと、筆は轉じて四周の自然界が描かれてゐるのであ

内面的敘述

る。しかもその兩者の關聯移動がいかにも自然であり、いかにも緊密であり、或は突如として人の意表にも出てゐるのである。

更にその文章の特異さにも亦注意せられる。起筆の奇抜さに就いては前述の通りであるが、或は對句を用ひ、或は擬人法により或は比喩による等、あらゆる修辭的彫琢が施されて、絢爛巧緻の行文を織りなしてゐる。唯美しい感じが讀者の頭に残ればよいといふ作意を果す上に於て、此のはなやかな辭句も亦大なる役割を果してゐるものと謂ふべきである。尙全篇の處々に見られるユーモアとウィットとは漱石の一特色であつて、春の山路を辿る畫家の非人情的想念としてはこれも亦すべてを繪としてながめ、詩として解さうとする態度にふさはしく、いかにも餘裕ある徘徊的な世界としてほほまましいものである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 草枕については既に卷一の第三課「峠の茶屋」に於て之を學習し、又漱石については本卷の十三課に於て一應學んでゐる筈であるから、是等の既習事項を十分に生かして本課に入りたいと思ふ。

(二) 本課の中には少々の難語句もあるが、本文のもつ特異な内容と其の斬新な表現との魅力の前には、別しての障害とはならないであらう。一字や一語の註解は之を簡潔に要領よくすまし、その表現、その内容そのものに即して、十二分に讀み味はせたい。

(三) 漱石自らも言つてゐる通り、草枕には所謂筋といふものがない。ことに本課などは事件の進展から言つたなら、何等の發展もないと同然である。故に漱石獨特な斬新にして奇抜、絢爛にして巧緻な筆致を鑑賞しつつ、其の語られた藝

術觀や人生觀——非人情の世界、詩的境地の妙趣を心から味はせるところに主力を注ぐべきである。そこにこそ草枕を、漱石を、餘裕派を理解しうる鍵がひそんでゐる。

(四) 尙文學史的取扱としては、此の如き主張が如何なる文學史的流を背景として唱導され、且つ草枕の様な作品となつたものであるかと言ふ事も一應觸れたいと思ふ。

2 省略

少量のものについては語釋の項に於て補つた通りであるが、一四二頁一〇行の次に、

戀はうつくしかる、孝もうつくしかる、忠君愛國も結構だらう。然し自身が其局に當れば利害の旋風に捲き込まれて、うつくしき事にも結構な事にも、目は眩んで仕舞ふ。従つてどこに詩があるか自身には解しかねる。

これがわかる爲には、わかる丈の餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ。三者の地位に立てばこそ芝居は見えて面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も、小説を讀んで面白い人も、自己の利害は棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。それすら、普通の芝居や小説では人情を免れぬ。苦しんだり、怒つたり、睡んだり、泣いたりする。見るものもいつか其中に同化して苦しんだり、怒つたり、睡んだり、泣いたりする。取柄は利害が交らぬと言ふ點に存するかも知れぬが、交らぬ丈に其他の情緒は常よりも餘計に活動するだらう。それが嫌だ。

を省略。

尙ほこれは参考のためであるが、本文の次の一節を引いておかう。それは一つには非人情といふ用語例を知る便利も一面にはあると思ふので。

「勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寐た男でもなからう。矢張り餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筋は八百屋へ拂下げたものと思ふ。かう言ふ余も其通り。いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿する程非人情が募つては居らん。

こんな所でも人間に逢ふ。じんく、端折りの顔冠りや、赤い腰巻の姉さんや、時には人間より顔の長い馬に迄逢ふ。百萬本の櫛に取り
圍まれて、海面を抜く何百尺の空気を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。夫所か、山を越えて落ちつく先の、今宵の
宿は那古井の温泉場だ。」

3 参考

草枕について漱石自身の語つてゐる所を左に掲げておかう。

(1)

来る九月の新小説に小生が藝術観及び人生觀の一局部を代表したる小説あらはるべく候。御批評願上候。是れとても全部の漱石の趣
味意見と申す譯には之なく、その邊はあらかじめお断り申候。(畔柳郁太郎氏宛)

(11)

私の「草枕」は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意見で書いたのである。唯一種を感じ、——美しい感じが讀者の頭に残り
さへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットもなければ事件の發展もない。茲に事件の發展
がないといふのは、かういふ意味である。あの「草枕」は一種變つた妙な觀察をする一畫工が、たま／＼一美人に邂逅して之を觀察する
のだが、此の美人即ち作中の中心となるべき人物はいつも同じ所に立つてゐて少しも動かない。それを畫工が或は前から或は後から或
は左から或は右からと、種々の方面から觀察する。唯それだけである。中心となるべき人物が少しも動かないのだから其處に事件の發展
しやうがない。所が普通の小説ならば、その主人公は甲の地點から乙の地點に移つてゆく。即ち其處に事件の發展がある。此の場合に
於ける作者は第三者の地點に立つて事件の發展して行くのを側面から觀察してゐるのだが、「草枕」の場合はこれと正反對で、作中の人
物は却つて動かずに、觀察する方が動いてゐるのである。だから事件の發展のみを小説と思ふものには「草枕」は分らんかも知れぬ。面
白くないかも知れぬ。けれどもそれは構つたことではない。私は唯讀者の頭に美しい感じが残りさへすればこれで満足なのである。若
し「草枕」がこの美しい感じを全く讀者に與へ得ないとすれば、即ち失敗の作、多少なりとも與へられるとすれば、即ち多少の成功を

したのである。

また、私の作物は、ヤムもすれば議論に陥ると言ふ非難がある。が、私はやつてゐる。もしそれが爲に讀者に與へるいゝ感じを妨げ
るやうではいけないが、これに反して却つてこれを助けるやうならば議論をしようが何をしようが構はんではないか。要するに汚ない
事や不愉快な事は一切避けて唯美しい感じを覚えさせればそれでよいのである。普通にいふ小説、即ち人生の真相を味はせるのも結構
ではあるが、同時にまた人生の苦を忘れさせて慰藉を與へるといふ意味の小説も存在していゝと思ふ。私の「草枕」は無論後者に屬す
べきものである。云々。

(三十九年、十一月、「文章世界」、「余が草枕」)

一八時 雨

一 解 題

1 作者

島木赤彦・齋藤茂吉兩氏に就いては、既に本卷十三課に於て之を學習してゐるから、ここでは中村憲吉氏についてだけ次に記すこととする。

中村憲吉 ナカムラケンキチ 伊藤左千夫の門人であり、アララギの同人である。明治二十二年一月二十五日生まれ、昭和九年五月五日歿、享年四十六。大正四年東京帝大經濟學科を卒業。同五年十一月郷里廣島縣雙三郡布野村に歸つて家業に従事、同九年春兵庫縣西宮に假寓、同十一年大阪毎日新聞社經濟部に入り、同十五年まで勤務、退社後歸村して家督を相續し再度家業に従つた。

歌は七高に居る頃(明治四十年)、故堀内卓造の誘導によつて始めたと言つてゐる。その後左千夫の門に入り、アララギ發刊と共にその同人となり、同派の重鎮であつた。精細な實相寫生と、新鮮な感覺とによる萬葉調の歌風がその特色である。

著書には、歌集として「馬鈴薯の花」(赤彦との合著、大正二年)、林泉集(同五年)、中村憲吉選集(同十一年)、しがらみ(同十三年)、松の芽(同十四年)があり、その他古歌評釋・歌論・隨筆等がある。現在中村憲吉全集が刊行されつつある。

2 出典

夫々の解釋の項に於てその所在を明かにすることとする。

3 主眼及び採擇の趣旨

三氏の詠により現代の短歌に對する理解を深めしめようとするのである。言ふ迄もなく赤彦・憲吉・茂吉共に、明治と言ふよりはむしろ大正の歌人であり、とくに茂吉は現在盛んに活躍してゐる人である。しかもこれらは何れもアララギ同人であつて、その採擇上の不公平に對する非難があるかも知れない。然し

「大正時代に入り、自然主義が文壇より退けられるに及んで、歌壇に第三次の展開が生じた。その主流をなすものは子規・左千夫の系統を受けたアララギの歌風であり、島木赤彦・齋藤茂吉等によつて唱へられた寫生道の主張と萬葉精神への復歸の主張が歌壇を壓して現在に及んでゐる」(本卷九五頁)

と言ふ既習事項を読み返して見る時、編者の意圖、本課採用の趣旨も亦自づから明白となるであらう。

二 解 釋

山にして遠裾原に鳴く鳥の聲の聞ゆるこの朝かも

1 語 釋

【山にして】 山に居ると、山中に居ればの意。これは一首全體にひびいてゐる句であつて、一見ぼつとした説明的の語の様でもあるが、山にゐる自己を意識しながら、しかもそれに馴れ親しむ情を内に藏してゐる、かなり重要

な働きをなしてゐる句である。赤彦に「山にして、雪割草を送りやらむ人さへ遠く思ほゆるかも」の詠もある。
【遠裾原】 トホスソバラ 遠く開けた山の裾野の原。
【朝かも】 アシタかも 「かも」は感動。

2 歌意

この朝、山上に居ると、遠い裾野原から、爽やかに鳥の聲が聞えて来る。

3 鑑賞批評及び其の他

この歌は太虚集に收めてあり、自選歌集「十年」にも採られてゐる。大正十二年巖温泉滞在中の作で、この山や、遠裾原と言ふのが何處であるかが分る。即ち作者は信濃と甲州との堺にある八ヶ嶽山腹の温泉に居り、遠い裾を見下しながら山中に居る自己を意識しつつ、朝に小鳥の聲をきいてゐるのである。

遠裾原の語は二音宛が三つ重なり、しかも濁音を含んでゐて、自然の廣さを音調的にもあらはしてゐる感がある。山、遠裾原、鳥の聲、朝と言ふ此の世界は、一つの新鮮さ、爽やかさ、廣さの世界であつて、それをやや抽象的な語句をもつて、一聯の調の上にその情をうつしたのが此の歌である。

一首はかの家持の「我が宿のいささむら竹ふく風のおとのかそけきこの夕かも」の句法をその下の句に取入れてゐるところが察せられるが、赤彦の上の句に示された力と廣さとは彼獨特なものと謂はなければならぬ。尙彼にはその句法の似た和歌に「山裾にありと知らるる川の瀬の音のきこゆるこの夕かも」(大正二年、「氷魚」所載)がある。

山つづき柿の畠に雲の來て時雨ふる日は寂しかりけり

1 語釋

【山つづき】「柿の畠」が山つづきの段々畠であることを示してゐる。

【柿の畠】柿の木が周圍に植ゑてある畠。

【雲の來て】雲を擬人化した表現である。時雨雲が低く暗く空を覆ひ、直ぐ家近くの柿の畠まで來てゐることを言つたもの。

【時雨】 シングレ 秋から冬にかけて定めなく降る雨のこと。

2 歌意

山つづきの畠の柿の木も、もはや大かた葉はおちつくして、枯れた様なくらいふしくれだつた裸の枝となつてゐる。山の雲はそこまで低く暗く下りて來て、さむくとした時雨が降る日、それはまことに寂しさの限りであるよ。

3 鑑賞

これは柿蔭集に收められてゐる。大正十四年、「山村小情」と題する歌の一つである。赤彦は長野縣下諏訪町高木(上諏訪)と下諏訪との中間で諏訪湖に面してゐる。に自宅があり、彼は柿人、柿の村人、柿蔭山房主人等の別號を用ひてゐる。「山つづきの柿の畠」の語は山間の山家の様を寫し、それだけで既にあるさびしさをもつてゐるが、更に「雲の來て時雨ふる日」を俟つて、うらさびしくなるとも晩秋初冬の山家が、その上にくらさと寒さを伴ひ來るわけである。第五句の「寂しかりけり」は一見概念的の語句の様でもあるが、かりけりに宿された語調は、その所在なさや、やるせなさの餘韻を残して、寂寥の氣がしみじみと深まつてゐると思ふ。「時雨ふる日」と相當の長さをもつ時の提示によつて、その寂しさの情が長さと擴がりを持ち、時をもてあますやるせなさの情が一層深刻となり、「寂しかりけり」の咏嘆的、回顧的、時間的の結びへのうつりが自然である様に思はれる。とにかく「柿蔭集」時代に見られる靜寂平淡の歌境を示す一首である。

信濃路はいつ春にならむ夕づく日入りてしまらく黄なる空の色

1 語釋

【信濃路】 シナノチ 信濃地方、信濃のあたりの意。信濃路は」と取り立ててあるところに、雪深い信濃、今自己

の住んでゐる信濃、ことに病床にある自己のすむ信濃の意がこめられてゐる。

【いつ春にならむ】 いつになつたら春になるであらうか。今どれ程過ぎたなら春がくるであらうかと待ちこがれる心である。

【夕づく日】 夕方の日光、夕日の歌ことば。

2 歌意

この雪深い信濃は何時になつたなら春になるのであらうか、今しも夕日の沈んだ西の空には黄色の夕映がしばらくの間空に輝いて、もう春も漸く近づいてゐるらしいが。

3 鑑賞

これも「柿蔭集」に收められてゐる。大正十五年病床の吟で、「恙ありて」と言ふ題の中の一首である。赤彦は十四年の十月頃から神経痛をやみ、翌年一月胃痛の疑ありとの診断をうけ、二月一日上京、二三の醫師の診察を受け、十三日歸郷、三月一日黄疽を併發、二十五日危篤に陥り、遂にその二十七日に死去するのであるが、これは、二月下旬乃至三月上旬の詠である。

この一首は赤彦の晩年病中の作であつて、修練の極地を示し、その代表的名歌とも稱すべきものである。この一首については、同じくアラギ同人の高田浪吉及び齋藤茂吉兩氏の評釋があるので之を左に引用する。

○高田浪吉

「信濃路はいつになつたら春の季節になることであらう。夕日が山の端に入つて、しばらく黄に染つた空のいろである。湖水の岸に山があつて、その後ろの方の高山が重なり合つてゐる。夕日の光が地上にはもう消えてゐて、空がひとしきり黄色に染つて光つてゐる。

春が来ることは分つてゐるのであるが、まだ寒さが身に沁みてくる。湖面を凝視することの出来た山家の起居は、作者の永い間の體驗を基礎としてかうした感慨を抱かせたのであらう。「黄なる空のいろ」と言ふ視覚表現には、象徴的な語感もあつて、春寒の空合を思はしめる。春暖の候を待ち戀ひながら、「信濃路はいつ春にならん」と言つてゐるのは、所謂短歌の形式的な詠歌を脱却して人の聲を調の上に聞くことが出来る。このやうな歌は、短歌を深く味へば味はふほど作者の高い心境に觸れ得られるので、永久性のある作品と言へるのである。」（「歌人赤彦の鑑賞」）

○齋藤茂吉

「大正十五年の病牀吟は一首一首が切實無類であるが、これを出来あがつた藝術として鑑賞する時は皆和歌の極致に達したものでばかりである。この歌は、いまだ雪に閉された信濃で自分は重い病に悩むが、今見れば諏訪湖の向うに日が落ちて、その空に餘光が暫く黄色になつて残つてゐる趣である。「信濃路はいつ春にならむ」といふのは、生に對する絶望のこゑではない。絶望でないからとげとげしくなくて無限の哀韻が其處から生じて来る。

太陽の沈んで行つた、静寂なる悲哀と、黄色にのこる餘光の永遠を示す深潭と、「信濃路はいつ春にならむ」といふ欣求に類する詠歌と相融合して、もはや如何ともなし難き莊嚴の一體として現はしてゐる。それほどこの歌は、胃痛を病む一個人を豫想しなくとも獨立して味はふことの出来る歌でもある。つまりさういふ題や詞書や、作者を絶したところもある。けれども寫生の歌はやはりそれだけで物足りぬのであつて、鑑賞に際しては、實在の作者とその肉體と生活とを常に勘定に入れることを欲して居るのである。ここでまた「信濃路はいつ春にならむ」といふ詠歌が、この語の背景としてもつと計り知れないやうな深韻を添へることになる。

動かぬ歌、抜きさしの出来ぬ歌といふものは歌論などによく論ずることであるが、實際の作物になるとさう多いものではない。第三者の眼からは何か難解をつけ得るものである。併しこの歌の如きになると、私の力量ではもはや奈何ともなし難いほど優秀である。夕日を歌つた赤彦君の歌には、なほ次のごときものがある。「はひ松のかげ深みつつなほ照れる光寂しも入日のなごり」（大正十年『太虚集』）「冬ふかみ霜焼けしたる杉の葉に一時明かき夕日のひかり」（大正十一年、『太虚集』）「西空は日の入るころか雪あれ雲紅にや

「染りつ」(大正十三年『柿蔭集』)などで、とりどりに骨折つたもの三あるが、この一首の渾一には及ばない氣がして居る。

(『アララギ』昭和十一年十月號所載、「童馬山房夜話」(二十)の「赤彦の歌十首」から)

【比叡山】 ヒエイザン 憲吉氏には比叡山に於ける連作があつて、それは彼自身の言つてゐる通り、彼の和歌に於ける進展上の一劃期的なものなのであるが、ここにはその中の三首を採用することとしたのである。

夕鐘はふもとに鳴りて白くもの結界のうへにかすか聞ゆる

此の和歌のみならず、この比叡の連作には諸本によつて一二辭句の異同がある。即ち彼の第三歌集「しがらみ」(大正十三年)には第二句が「鳴りぬ」となつて居り、改造社の現代短歌全集には、初句が「夕鐘が」とあり、又第二句は「鳴らし」となつてゐる。こゝには自選歌集「松の芽」から採つた。

1 語釋

【夕鐘】 夕方つく鐘、晚鐘。

【ふもとに鳴りて】 ふもとの方で鳴つて、即ち比叡山の麓の方で夕鐘が鳴つてゐるのである。

【白くもの】 シラくもの 次の「結界のうへ」を修飾する語で、白雲で埋められた様な高い所、即ち比叡山の塔堂のある高所を言つたもの。尙此の時は雨の日の夕暮であることも注意したい。

【結界】 (一)僧侶が佛道を修めるのにさはりのない様に地

域や衣食住に一定の制限を加へること。(二)寺を建て戒壇を造るに地域を限ること。(三)俗人と僧侶とを區別するために設けた格子。(四)禁制。こゝは(二)の意で、寺のある聖域を言つたものである。

【かすか聞ゆる】 かすかに聞えてくると言ふこと。聞ゆるは連體形であるが、語調をたすけ、餘韻をもたせるために修辭として用ひられたものである。

2 歌意

夕をしらせる寺々の鐘が麓の方で鳴つて、白雲に包まれたこの比叡の結界の上まで、その音だけがかすかにきこえてく

る。(鐘をここで直接鳴らさずに、麓の方の鐘をかすかにきくだけであるので、却つてその夕暮の白雲に包まれたこの聖域の幽邃さが、一層ひし／＼と感ぜられると言ふのである)

一體比叡山では昔から鐘をならさないものであつて、その事は同じ時の彼の歌に次の如く歌はれてゐる。

日の暮れの雨ふかくなりし比叡寺四方 結界に鐘を鳴らさぬ
雨雲のうへに日暮れてむかしより大比叡寺は鐘を鳴らさず

3 鑑賞

これは前に引用した二首に、「雨ふかく」「雨雲」とある通り(尙「しがらみ」には「雨山暮情」と言ふ題下に、「比叡山」
「其三」として是等の歌は出てゐる)、雨の日の夕暮の詠であつて、さらでだに幽寂幽邃である比叡が、今は夕暮のしかも雨雲によつて益々その靜寂さが深まつて居るのである。その時白雲の下から、麓の晚鐘の音が起つて、鬱蒼たる樹間にかすかに聞えて来るのを耳にし、その閑寂さを一層ひし／＼と身に感じたのである。「夕鐘はふもとに鳴りて」と一たんきつて、その遠さと高さを示し、「白くもの」と起して廣がりと高さとを感じさせ、「結界のうへに」と提示して「ふもと」に對さしめ、「かすか聞ゆる」と結んで、「ゆる」のゆるやかな語音の中に、その梵鐘のひびきの餘音をのこしてゐるが、「結界」の語は、その音調によつて、大きさと廣さとが感じられ「白くもの」の語を俟つて、いかにも壯大莊嚴な幽境であることを示して餘すところがないと謂ふべきである。

山に坐して湖をひろく見ほがらかに大き寂しさに入りたまひけむ

「しがらみ」では、初句が「山嶺より」、第二句は「見て」となつて居り、現代短歌全集では、初句が「山のうへゆ」、第二句は同様「見て」となつてゐる。これも自選歌集「松の芽」から採擇した。

1 語釋

【山に坐して】 ヤマにマシテ 「山」は比叡山のこと。「まつり」と言へば賀茂の祭を意味するのと同斷である。「坐す」はいらつしやること。「居る」の敬意を含んだ語。ここは比叡の開祖傳教大師に對する敬意。山上にお出になられて。山嶺にいらつしやられて。

【湖】 ウミ 海の如くひろごりわたつてゐる琵琶湖のこと。古くから「うみ」と稱してゐる。近江の國名も、もと「近つ淡海」から出て居り、尙柿本人麿の詠にも「淡海の湖夕浪千鳥ながなけば心もしぬに古おもほゆ」とある。

2 歌意

此の山の開祖傳教大師は、この雲を凌ぐ山嶺にいらつしやつて、はるかにほろばるとひろごる海の様な琵琶湖を遠く見下され、全く塵一片も止めないほがらかな心地で、大きな静寂境に徹せられた事であらう。

3 鑑賞

「山に坐して」、「湖をひろく見」、「ほがらかに」と三つに疊んであつて、そこに重々しさと力が生動し、一気に「大き寂しさに入りたまひけむ」と結んで、それらの背景、前提のもとに速く回顧するの情が深くこめられてゐる。「坐し」、「たまひ」の敬語は一首に莊重さを漂はせ、「ひろく」、「ほがらか」等のラ行音による開口音の重用には廣さが加はり、山と湖との對比にも亦壯大な感じが宿つてゐる。したがつてこれらを用いた第四句の、「大き」がよく生きてくる様に思はれる。

【ほがらかに】 朗らかに。ここは心がはれわたつて快いと。

【大き寂しさに】 「寂しさ」は閑寂、静寂、寂寥であるが、上に「大き」とある様に、同じ寂しさでも大きな寂しさ、即ち全く俗塵、俗界、俗念、妄想などのすべてを清くはなれて、すべての汚濁を脚下に遠く見下したほがらかな寂しさである。

【入りたまひけむ】 自然のその大きな寂寥所に参入されなされたことであらう。(その境界を羨む心地、その姿を欽仰する心持を含めてゐる)、「けむ」は過去の推量。

同じき時の詠に次の如きものもある。

朝ゆふは眼もとにひらく琵琶の湖山上に在ししさしみき聖

是の歌と次の一首に見られる様な古人追懐的の歌は、今迄自分にはあまりなかつた所のものであると彼は言つてゐる。(後文参照)

夕さればいにしへ人の思ほゆる杉はしづくを落しそめけり

1 語釋

【夕されば】 夕方になつたので。「さる」は「……になる」意で、こゝはその已然形である。「夕さらば」とは違ふ。

畝傍山晝は雲と居ゆふされば風吹かむとぞ木の葉さやげる

【いにしへ人】 傳教大師を始めとしてひろく比叡山關係の昔からの人々をさしてゐる。

2 歌意

夕方になると殊更に昔此の山に居られた多くの聖達の事が種々に思ひ出されるよ。周囲の老杉からも雫がぼた／＼と落ち初めて、一層深い懐古的な氣持に引き入れられる。

3 鑑賞

夕方になつて懐古的な情にひたることは人の情の自然であるが、とくに古くからの大堂伽藍が高くみつそりと並んで居り、あたりには晝猶暗き老杉が鬱蒼とそれを圍んで聳え立つ、由緒深き法の聖域に於ては一層それが高まつてくるわけで

ある。「思ほゆる」は連體形であるが、ゆるの音調の中に時間的な餘裕があつて、大まかに「いにしへ人」といつた語にもよく照應し、しばし種々な追懐に耽る情があらはれてゐる。「杉はしづくを落しそめけり」は、「一鳥啼山更幽」なりの心で、かすかなしづくの音が間を置いて落ちるために、却つて全然何の物音もないより一層その周囲の幽寂さが身にせまつてくるのである。

松風の音きく時にいにしへの聖のごとく我はさびしむ

1 語釋

【聖】ヒジリ (一)聖人。(二)天皇を贊め奉りて申す語。(三)凡人にすぐれた人。(四)神仙・仙人。(五)清酒の異

名。(六)高德の僧。(七)汎く僧侶のこと等。ここは第(六)。

2 歌意

松風のあのこほこほと冴え渡つた音をきくと、あたかも古の聖僧の様に、自分は寂しさの情が深まつてくる。

3 鑑賞

群がる老松に吹き通ふ風聲、それは俗塵を拂ひ去る様なさえたものであり、心の洗ひきよめられる様な爽やかなものである。然しその聲の中には一種言表し難い様な寂しさの響が漂つてゐる。したがつてそれを耳にするとき、俗塵汚濁を流し去つた様な氣持と共に、ある寂寥感に引き入れられずには居られない。その心地を「いにしへの聖のごとく」と言つたものであらう。聖といつても、とくに古來その高潔をもつて世に聞えた聖僧中での聖僧の意で、「いにしへの」とつけたものである。「寂びしむ」といふ結び、これは動詞を以て止めてあるが、決して強いものではなく、却つて、「む」の音調には黙止してゆく様をも暗に響かせてゐる趣があつて、深い沈黙に耽りゆく餘韻が残されてゐる様に思ふ。

かりがねは夕空たかく飛びゆけりいづらの里に落つるにやあらむ

1 語釋

【かりがね】「雁が音」の義で、(一)雁の聲。(二)轉じては雁のことにもいふ。ここは後者。
【いづら】代名詞の「いづれ」、又は「いづこ」に同じである。即ち「いづこの」「どこの」の意である。

伊波多野に宿りする君家人の伊豆良と我れを問はば如何に言はむ(萬葉集・一五)
古への句はいづら櫻花扱けるからともなりにけるかな(伊勢物語)

2 歌意

夕空を仰ぐと連れゆく雁が高く飛び去つていつた。一體あの雁たちはどこの村里あたりに落ちるのであらうか。これは昭和四年發行の現代短歌全集に出てゐるもので、おそらく昭和二・三年頃の作であらうと思はれる。「信濃路」といふ題下に出てゐるものの中の一詩である。その時の詠に

亡き友のなきを悲しみ信濃路のみ寺のなかに一日こもりぬ
といふのがあるから、或は赤彦の郷里を訪うた時の歌ではないかと思ふ。

「かりがねは夕空たかく飛びゆけり」は強い三句切であつて、秋の日のうすれた餘光にそまる空を、高く、遠く、雁が飛び立つてゆく景は、なんとなく力ない寂しさに満ちたものである。その姿がみえなくなつて、後にひとり取残された感じが、秋の日の「夕空」といふ物さびしい背景の中に、「高く、飛びゆけり」と強くボツンと切つてある所に餘韻として響いてゐる様である。かくて少しのポーズを置いて心に浮かんだのが、いま夜に入らうとする夕暮なものにもかかはらず、あの様にして飛びゆく雁は一體「いづらの里に落つるにやあらむ」といふ情である。我が心を雁にうつして、夕空に高く飛び去つて

しまつた雁のゆく方を思ひやる歌である。「病雁の堅田に落ちて旅寝かな」といふ芭蕉の句なども聯想される。

落の莖うれるを見れば日のあたる岡の上にははや萌ゆるらし

1 語釋

【落の莖】フキのタウ 落は古くは「ふふき」といつた。

菊科の多年生草本で、山野に自生もするが、又畠にも植ゑる。冬春の交に、宿根から花莖を出し、その大きさは大指の如くで青い。これを落の莖といつて食用にする。苦味があつて痰の薬だといはれてゐる。春高さ十四、五穂になり、黄白色の花がさく。別に四、五十穂の莖を

出し、又やや圓い葉をつける。莖は青白に紫を帯びてをり、若莖の皮をむいて煮て食する。

【うれる】賣れる、賣つてゐること。八百屋などの店先にあるのを見たのである。

【萌ゆるらし】「萌ゆ」は芽を出す、草木が生ひ立つ、めぐむ、きざすこと。「らし」は推量。

2 歌意

まだ自分は全く冬の氣に閉ざされてゐたが、すでに落の莖を賣つてゐるところを見ると、南日をうけたあたたかい岡の上には、もう芽を出してゐるものと見える。(もう春のやつてくるのも間近いことだ)。

3 鑑賞

これは昭和十年一月號のアララギ誌に載つたものであるから、九年の十二月作かと思はれる。落の莖は春の象徴ともいふべきもので、春の光と温度とに促されて、南向の丘邊などにポツ／＼とあらはれるものである。それを見たかつての經驗をふまへて、今まだ冬に閉ぢこめられてゐる時に、ふとそのなつかしい形を店先などで目にし、かつて見た早春の景がまざ／＼と目前に思ひ出されたのである。「うれるを見れば」には思ひがけなくも目にした軽いおどろきを感じられ、「日のあたる岡の上」の語には、作者の嘗ての經驗が具象的に表現され、それをなつかしく思ひやる

心が漂つてゐる。そして第五句の「はや萌ゆるらし」には近づく春への歡喜と期待との情が躍動してゐる。

三 備 考

1 指導研究

(一) 文學史的觀點からは、本課の採擇の趣旨を明らかにして、明治大正は勿論現在の和歌の動きが何を主流としてゐるかを理解させることが大切である。

(二) いふ迄もなくアララギの主張は寫生道と萬葉調とを以てその特色としてゐるのであるから、その派の代表者の和歌を通じてその特色を明らかにさせると共に、和歌一般の鑑賞批評の心眼をも高めてゆく様にしたと思ふ。

2 参考

○赤彦について

赤彦には次の様な五つの歌集がある。

馬鈴薯の花(中村憲吉合著)

大正二年(三十八歳)

切 火

同 四年(四十歳)

水 魚

同 九年(四十五歳)

太 虚 集

同 十三年(四十九歳)

柿 蔭 集

歿 後

今本課に採用したものは大正十二年、十四年、十五年の作で何れも後年のものばかりである。赤彦の和歌を、(一)信濃時代(大正二年迄、同年先師左千夫死去) (二)出郷當時(大正三年三月出京、其の後兩三年) (三)逝去迄(十五年迄)と三

分するならば、何れも第三期に屬するものばかりで、歌集でいへば太虚集以後である。太虚集あたりからは赤彦の油のりきつた時代で、壯大雄渾な萬葉調と、自然の實相參入の手法とがいよいよみがかれて來た時である。但し十四年あたりからは著しく懐古的となり、歌境も靜寂平淡なものとすみ、平和さと健やかさを加へて來てゐる。

今参考のために本課採用の和歌と同時の作を二三記しておく。

(1) 巖 温泉 (大正十二年)

谷川の音のきこゆる山のうへに巖を折りて子らと我が居り
裾野原若葉となりてはるばるし青雲垂りぬその遠きへに
水の音聞きつつあれば心遠し細谷川のうへにわが居り
山の上のところ伸し子らふたり鈴蘭の花を掘りて遊べる
山の上に花掘る子らを見つつをり斬のごとくに生ひ立ちにけり
ここにして遙けくもあるか夕ぐれてなほ光ある遠山の雪

(2) 山村小情 (大正十四年)

草の家に柿をおくべき所なし縁に盛りあげて明るく思ほゆ
蜂屋柿大き小さき盛りあげて心明るく眺めわが居り
山つづき柿の畠に雲の來て時雨降る日は寂しかりけり
柿の木の上より物を言ひにけり道を通るは皆村の人
わが門の道行く人は音たてて柿の落葉を踏みにけるかも
前山の芒を刈りて光さむし巖のむれの現れにけり
前山の芒にのこる夕づく日今宵も早く霜や至らむ

(3) 恙ありて (大正十五年)

寒餅のあたかもほねも噛みにける昔思へば哀へにけり
二月十三日歸國晝夜痛み一呻す。肉痔せに痔せ骨たちになつ
火箸もて野菜スーアの火加減を折り折り見居り妻の心あはれ
隣室に書よむ子らの聲きけば心に沁みて生きたかりけり
わが村の山下湖の水とけぬ柳萌えぬと聞くがこほしさ
信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる漬菜の色は
神經の痛みに負けて泣かねども幾夜寝ねば心弱るなり

三月十三日

我が病ひ悪しとあらねど遠國より來りし人にむかへば泣かゆ

三月十五日

箸をもて我妻はわれを育めり仔とりの如く日開く吾は

三月十六日

たまさかに吾を離れて妻子らは茶をのみ合へよ心休めに

三月二十一日

我が家の犬はいづこにゆきぬらむ今宵も思ひいでて眠れる
かくて三月二十七日、年五十一を以て死去するのである。なほ齋藤茂吉の「念珠集」に同氏の筆になる「島本赤彦臨終記」が收められてゐる。

○中村盛吉についで

一八時 雨

比叡山の連作は彼の和歌進展上に於て、一の刻期的のものであるとは、氏自らが記してゐるところである。その景の壯大さと、其の古人追懐的なるとの二點がそれである。今次に現代短歌全集によつて、その和歌と彼の述懐とを掲げておくこととする。(和歌の二三の辭句が彼の歌集「しがらみ」所載のものとは異なることは前述した通りである)。

比叡山

日の暮れの雨ふかくなりし比叡寺四方結界に鐘を鳴らさぬ
雨雲のうへに日暮れてむかしより大比叡寺は鐘を鳴らさず
雨ふかき大杉がなかなは物ものしく伽藍を構へ夕暮れにけり
雨霧の吹き腫るかにせる杉の秀に伽藍の屋根の大きく暮れつ
夕くらき大堂のそばも通りたり大杉をもりていちじるき雨
雨さむき夕山に來つれ宿院の厨裡にひとつ焚く赤き竈火
夕鐘がふもとに鳴らし白くもの結界のうへにかすか聞ゆる
夕さればいにしへ人の思ほゆる杉はしづくを落しそめけり
朝ゆふは眼もとにひらく琵琶の湖山上に在ししきみしき聖
山のうへゆ湖をひろく見て朗かに大き寂しさに入りたまひけむ

(現代短歌全集第十五卷)

此の外に、「篤」(六首)「山坊夜話」(四首)「根本中堂」(五首)の題の下に十五首の歌が同集に續いて見えてゐる。尙中村氏自身同集の「卷末記」に於て、此の時の歌について左の如く述べてゐる。

「しがらみの」歌には尙大正十年の部に「比叡山」の歌があるが、これは大正十三年の「しがらみ」出版ごろまで、未定稿を持ちあぐんだのを新しい元氣で完成したものである。これ迄の私の歌は、最初期の櫻島霧鳥などの數首の歌を除くほかは、大きな景色感情を歌

つたものは少なかつた。技力の不足もあつたらうが、感興がいまださうした方へ動くやうに熟してゐなかつた爲である。しかし「比叡山」の歌の一部分ははじめて私にその機會を與へた。

日の暮れの雨ふかくなりし比叡寺四方結界に鐘を鳴らさぬ
雨雲のうへに日暮れてむかしより大比叡寺は鐘を鳴らさず
夕さればいにしへ人のおもほゆる杉はしづくを落しそめけり
山のうへゆ湖をひろく見てほがらかに大き寂しさに入りたまひける
山の上に世をかなしみて下りてこぬ僧の多くが山にはてけむ
右に交れる古人追懐的の歌の如きも、また私の從來の歌にはなかつたと思ふ。

○齋藤茂吉について

第二首目の和歌を含む信濃路の題下のものを次に掲げることとする。

信濃路

うちひさす都をいでて山川のさやけき國をわれ行かむとす
湯のいづるはさまの家にふりさけし五つの山は皆晴れにけり
いろづきて夕日に映ゆる山もとの湯いづる里にわれは近づく
庭隈の苔をぬらして朝よりしぐれの雨は降りにけるかな
亡き友のなきを悲しみ信濃路のみ寺のなかに一日こもりぬ
かりがねは夕空たかく飛び行けりいづらの里に落つるにやあらむ
秋萩のうつろふ見ればこの庭のなべての草に照る月もがも

(現代短歌全集)

一九 知 と 愛

西田幾多郎

一 解 題

1 作 者

西田幾多郎 ニシダキタラウ 明治三年八月十日金澤市生。第四高等學校を中途退學し、東京帝國大學文科大學哲學科の選科に入り、二十七年卒業、石川縣尋常中學校の教諭となる。三十二年山口高等學校教授に轉じ、後第四高・學習院教授をへて、四十三年京大助教、大正二年同教授、同年文學博士の學位を得た。著書には「自覺に於ける直觀と反省」善の研究」「思索と體驗」「意識の問題」「藝術と道德」等がある。現代日本の代表的哲學者であることは勿論、西田哲學の名は、海外に迄知られてゐる。

2 出 典

「善の研究」明治四十四年岩波書店出版。大正十年改版。名著として廣くよまれたもので、第一編「純粹經驗」以下、「實在」「善」「宗教」の四篇からなつてゐるが、本課は第四編最終の第五章「知と愛」の中、その前半を抄出したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

本文は透徹した理智に基づいて、組織的にのべられた哲學者の學術的論文で、知と愛とは其の本質に於て全く同一の精神作用である事が述べられてゐる。生徒が明治大正の代表的文學として學んで來た所は、みな文學的・感情的・具象的文であつた。然るにこれは科學的・理智的・抽象的文であつて、そこに本文の特色が存し本課採擇の理由もある。

二 解 釋

1 語 釋

【知と愛】 知るといふ精神作用と、愛するといふ精神作用との意。しかも本文に於ては此の兩精神作用が根本的には同一のものであることが述べられてゐる。

【知と愛とは、普通には……考へられてゐる】 一寸考へて見ても、知は人の理性によるものであり、愛は感情によるものであつて、人の精神作用を智情意に三分する考へ方からしても餘程の差異がある様に思はれる。したがつて普通に全然相異なつた二つの物と考へられるのも自然である。

【主客合一の作用である】 これが本文の大主意の提示である。知も愛も主觀と客觀、知るものと知られるもの、愛するものと愛されるもの、我と物とが合一するといふ根本的な意味に於て兩者共に本來同一な精神作用だといふのである。その細部の論述については以下に詳しい。

【我が物に一致する作用である】 知も愛も、その作用をする主體の我が、其の作用の對象となる物に一致することであるといふ意。

【我が物の真相を知るといふのは】 我が、物を單に皮相的に知るのでなく、その物の眞のすがた、本體を知るといふことは。

ふことは。

【妄想臆斷】 マウサウオクダン 妄想（佛教語のときはマウザウ）とは正しくないみだりな想念をいふ。臆斷とは自分一人勝手な判斷、斷定。

【いはゆる主觀的のものを消磨し盡くして物の真相に一致した時、即ち純客觀に一致した時……】 純客觀の物自身に本來存在するのでなく、人間が自分の心で勝手に拵へたにすぎない事を除き去つて、物の本當のすがたに一致した時、換言すれば、我々人間の勝手な想像上の附加物を悉く除去して純粹なすがたの客觀それ自身に一致した時、始めて「物の真相を知る」ことになるのだといふ意。

【大鯨】 オホナマヅ 鯨は鯨科の淡水産硬骨魚。無鱗で口大きく、四箇の髭をもつてゐる。

【天文地質の學】 天文學と地質學のこと。天文學は天體の現象を研究する科學で、ここは前文の「明月に云々」をうけてゐる。地質學は地殼・地層の構造・變動・沿革等

を研究する科學で、ここでは上文の「地震は云々」に應じてゐるのである。

【自然法則】 シゼンハフソク 自然界を支配する普遍的必然的な法則のこと、自然法ともいふ。

【數千年來の學問進歩の歴史は……】 數千年來の學問進歩の歴史は、人類が主觀的な妄想や臆斷を棄てて物の真相をつかむやうになつて來た歴史であると謂ふ意。

【親が子となり、子が親となり】 親が全く子の心となり、子が眞に心から親の心になること。親と子、子と親といふ様に相對立した別々の二つのものでなく、精神的に兩者合一合體すること。親が子となる姿は、とくにかの母が子を思ふ情を見れば直ちに了解出来るであらう。殊に病になやむ愛兒に對する母の態度こそは全く親が子になりきつた、それこそ一點の隙間もない自他合一のすがたである。

【我々が自己の私を棄てて……人類の愛に進む】 無私となればなる程愛は大きくなり深くなるのであつて、親子の愛から遂には人類愛まで擴大されるのは即ちそのあらはれであるといふこと。

親子の間の愛情こそは人間本然の根本的なものである。但しそれは私の子、私の親であるといふ點に於て誰しもが自然にもつ愛情である。兄弟の愛、夫婦間の愛等

りぬいた結果生ずるものであり、或は又知は非常に愛した結果としてえられるものだといふ様に考へるのは誤で、事實は愛しつゝ知つて居り、知りつつ愛してゐるといふべきが正しいのだといふこと。

【自己を忘れて、ただ自己以上の不可思議が……】 これはすぐ直前にある通り、我々が物に熱中した時のことを述べたものである。即ち我々は初は之を知らう、あれを愛さうと考へて意識してゐても、いよいよ熱中してくると、知らうとする自分といふものが何時のまにか意識されなくなつて、その對象物と唯一つにとけあつた姿に化してしまふのである。かうなれば主もなく客もなく、我もなく物もないのであるから、眞の意味の主客合一であり、自他合一である。したがつて自己の力が働いてゐるといふよりは、何か自己以外の不可思議な力によつて動いてゐるといつた方が適切な状態であるわけである。ここはそれを言つたものである。

【愛は他人の感情を直覺するものである】 眞の意味の愛といふのは、己と他人とを別々に考へて、分析や綜合や推理や判斷をへて、その結果他人の感情を知るのではなく、他人と己とが全く合一してゐるのであるから、直覺的に直ちに他人の感情を知りうるのだといふこと。即ち他人の喜怒哀樂はそのまま直接的に我がものとして、自他の

は之につぐものであらう。然しそれ等の肉親的、血縁的即ち私といふ觀念を段々うすくして、我が子に對する愛を他人の子に及ぼし、我が兄弟に對する愛情をおしひろめて朋友に及ぼし、或は我が親に對する愛情をもつて他人の親に及ぼすといふ様に無私の度をひろめて行けば遂には人類愛にまで擴大され、更には木石禽獸の様な非情のものに迄も及ぶ博大なものとなるのである。それは自己中心の私を段々棄てることであり、即ち純客觀になり、より無私になることである。本文はその道理を述べたものである。

【佛陀】 ブツダ 梵語でひろく覺者の意であるが、ここでは釋迦佛をさす。(佛陀は單に佛ともいふ) 釋迦のねはんの圖を見ると數多の動物が悲傷哀悼してゐる姿が描かれてゐる。即ち禽獸に迄もその愛がひろく及んでゐた證據である。

【また一方より考へて見れば】 前文の數學者・美術家の例は愛すればこそよくその眞を知りうることを述べたものであるが、今度は反對によく知るが故に愛することに於て説明しようとするもので、また一方より考へて見れば」と言つたのである。

【愛は知の結果、知は愛の結果……】 この想を換言して述べたのが下文の知即愛・愛即知である。即ち愛はよく知

區別なく之を知りうるのだといふこと。

【抽象的概念】 「抽象」とは實在の事物から屬性だけを引きぬいて來て考へること。例へば雪、白紙、白チョーク、白髪等の様な實在から「白」といふ色彩を考へることは抽象作用であり、かくして出來上つたものは即ち概念である。したがつてそれはどこまでも考へられたものであり、人の心にだけ存在するものであつて、具體的な實在としては決して存在しないのである。白い物としては雪もあり白紙もあるが、「白」といふものはどこまでも抽象物であり概念にほかならない。それと同様に、純知識、純感情といふことは抽象的概念としては考へられるとしても、實在の精神現象としては兩者共に存在することはないといふこと。

【學理の研究が……】 學理の研究は知のはたらきであるが、然し決して純知識だけで學理の研究は進展しない。それを持續し維持するためには、深く學理を愛するといふ一種の感情が伴はなければならぬからである。そのことは他を愛するといふことは愛情の問題である様である。即ち眞に他を愛するためには其の基本として一種の直覺即ち知が必要だからである。

【余の考を以て見ると】 「普通には」とあつたのに對しての

語である。世間では知と愛との差異をのべて感情と知識とによる作用上のことであるとしてみることが、むしろそれは対象の差にあると謂ふべきものだといふ事を述べたのである。

【たとひ対象が非人格的であつても……】「愛は人格的対象の知識である」と言ふと、實在のものとして、必ず人格的のものでなければ愛の対象とはなりえない様に考へられる危険があるので、それを説明したのが此の語句である。即ち愛の対象は具體的事實としては非人格的のものでよいのであつて、之を人格的対象として見た場合の知識であれば、それも亦愛と稱することが出来るのである。換言すれば實在する対象が人格的であるか否かといふよりは、むしろ或る實在を人格的に見るか否かといふところに、普通の知と愛との差別があることになるのである。そのことは本課には省略されてゐるが、一五三頁十一行「知識である。」の次に、「たとひ対象が人格的であつても、之を非人格的として見た時の知識である。」とあるのによつて見ても明白である。

【古來幾多の學者哲人の……】宇宙の實在（現象といふ意の學問的哲學的用語）の本體が、單なる機械的なものでなくて、それは統一ある有機體であり、活動體であつて恰も一つの生物の如く考へる考へ方の様に、もしかりに

人格的のものであるとするならば、愛は人格的対象の知識なのであるから、愛こそは實在の本體を捕捉す。力であり、したがつて、これによる知識こそは最も深い知識になるわけであるといふこと。

【分析・推論の知識】何れも論理學や心理學上の語で、廣くいへば普通の知識をもとめる、所謂科學的眞を追求する方法である。「分析」は綜合の反對であつて、細部から細部へと何處までも細かにその構成要素を分解してゆくこと。「推論」とは一種の思考形式によつて、既知から未知なものをして推して判断すること。例へば「生物は死す」「彼は生物なり」「故に彼は死す」といふやうな三段論法などはその一つである。これらによる知識はどこまでも我と物とが對立してゐて、その本體をつかむことが出来ず、したがつてそれは皮相的、表面的知識にすぎないといふのである。

【愛は知の極點である】愛は知の反對側に對立して並立する様なものではなくて、知をふかめてゆき、高めてゆくと遂には愛といふ極上の點に達するといふ性質のものであり、したがつて愛は知を含むものであり、知は愛をともなつてこそ始めて眞の知と謂ふことが出来るといふ意。

2 文の構成

第一節 一五〇頁六行迄

1 一四九頁五行迄

2 一五〇頁六行迄

第二節 一五一頁六行迄

第三節 一五三頁四行迄

第四節 終迄

論旨の提示。

知は主客合一なること。

愛は主客合一なること。

知即愛、愛即知なること。

愛は知の極點であること。

3 文意

知と愛とは本來同一の精神作用であり、知即愛、愛即知であり、更にいへば愛は知の極點であること。

4 鑑賞批評

學術的科學的論文としては當然のことでもあるが、その想の展開、論述の筆路が實に井然として一分の隙もない事が先づ注意せられる。しかもその段落を示さうとして殊更らしく筆を弄した所の見えないのが一つの味である。一見至難と思はれる様な問題を提示しながら、かくも短い文章を以て、よく讀者をしてその思索の跡を追つて自然に了解しえさせる事に成功してゐることは本文の手柄と謂はなければならない。名だたる哲人だけあつて、その表現にも些少の無駄がない事を注意すべきである。

想として見ると第二節迄は或は普通の者にもかく思念し、かく表現することが可能であるかも知れない。然しその前二節をうけて、主客合一、自他合一の妙趣をのべ、知即愛、愛即知の妙理をあきらかにした第三節は必ずしも容易なことではなからう。然るに本文は更に進んで知と愛との高下大小の關聯を論述し（第四節）、ここにその所論は愈々完璧なものとなつて

して光を放つてゐるのである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 本文は哲學者の抽象的科學的論文であることをよく考慮して學習させることが肝要である。即ち主とするところはその内容にあり、先づ何よりも明らかにしなければならないのはその論旨である。その想の展開、思索論述の跡を、眞に熟考しつつ理解する様に努めさせなければならない。

(二) 單に文字面だけの理解ではなく、心から之を理會するためには我が經驗的事實を充當して見るといふことが一つのよい手段である。本文中にも二三の例が示されてゐるが、これはこの様な抽象的科學的論文を書く時の一つの心遣でもあると同時に、亦之を味はふ時の心得でもあることをよく知らせたいと思ふ。

(三) 尙内容を重く見すぎて、その表現の吟味を忘れる様なことのない様にしたい。知と愛とが根本的には同一的精神作用であり、否、知即愛、愛即知、更にいへば愛は知の極點であるといふ論旨——それを理解させることは一見常人には非常に困難な様に思はれる論旨——を明快的確に論述しえた所以はその思索や構想の明確適切である事にもよるが、一面その行文の達意な點も與つて大いに力があると謂はなければならない。論旨がむづかしいからといつてその表現迄むづかしくなければならぬ理由はない。むしろ論旨がむづかしい程その行文は平明達意であることが必要である。さういふ點から考へても、とかく晦澁生硬な文章の多い今日、この簡明な行文は範とするに足りるであらうと思ふ。

昭和十四年三月一日印刷

昭和十四年五月廿三日發行

非 賣 品

著 者 能 勢 朝 次

不 許 複 製

發 行 者 東 京 市 神 田 區 美 土 代 町 十 八 番 地 株 式 會 社 文 學 社
代 表 者 小 林 竹 雄

發 行 所

東 京 市 神 田 區 美 土 代 町 十 八 番 地 株 式 會 社

文 學 社

電 話 神 田 三 五 一 番 振 替 東 京 三 八 七 八 番

392
5
472

終

